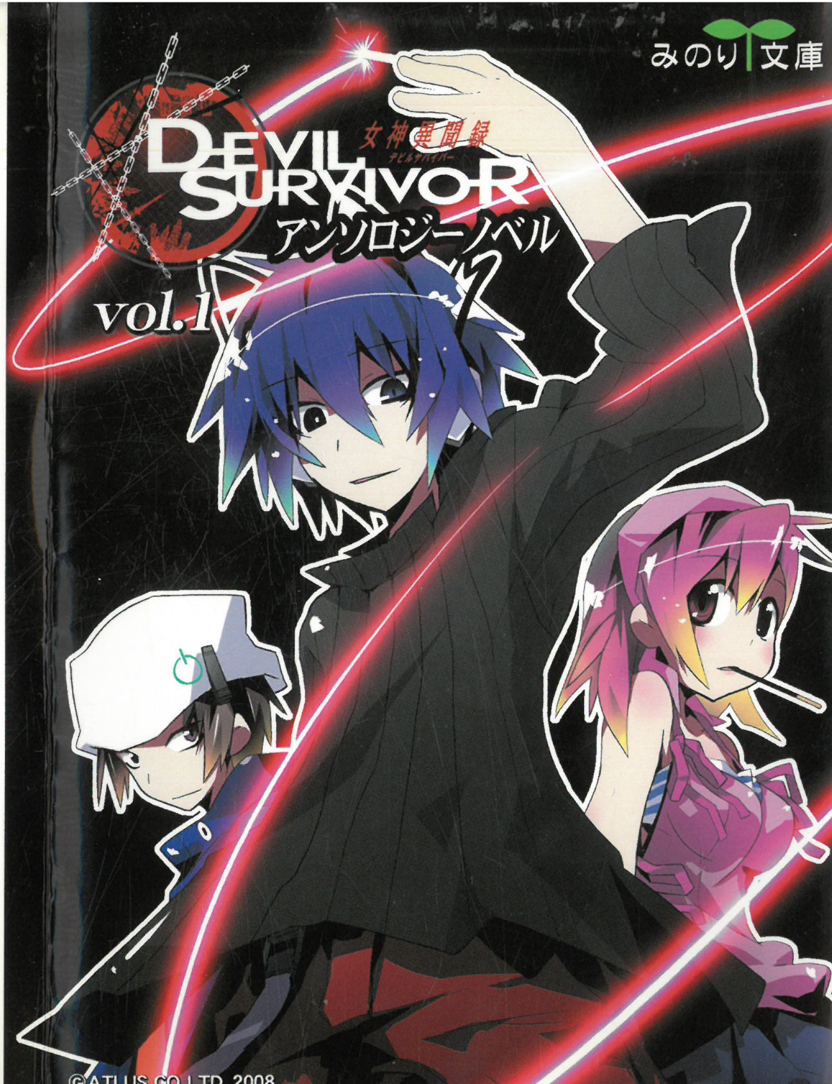
海法紀光（かいほう・のりみつ）
ゲーマー／ライター／小説家。『ウォッチメン』ブルーレイを予約しました。

高平鳴海（たかひら・なるみ）
小説家、ゲームデザイナーなど幅広く活動。
近著『センチネル・ヒート』(幻冬舎)

村田治（むらた・おさむ）
株式会社ランアンドガンに所属するライター。なごみ文庫でも何か書いています。

◎イラスト
異識
http://okotak.fc2web.com/
nino
http://f17.aaa.livedoor.jp/˜nino/
まつざき雄嵩
http://www003.upp.so-net.ne.jp/nagaya/
やと
http://wind-t.xii.jp/

カバー：異識



みのり文庫
For GAME
X-01-01
女神異聞録
デビルサバイバー
アンソロジーノベル
Vol.1
海法紀光　村田治
高平鳴海
ハーヴェスト出版
640



みのり文庫
For GAME
X-01-01

女神異聞録
デビルサバイバー
アンソロジーノベル
Vol.1
海法紀光　村田治
高平鳴海



ハーヴェスト出版
640

ISBN978-4-434-13307-7
C0193 ¥640E

9784434133077

1920193006407

定価(本体640円+税)

発行/ハーヴェスト出版
発売/星雲社



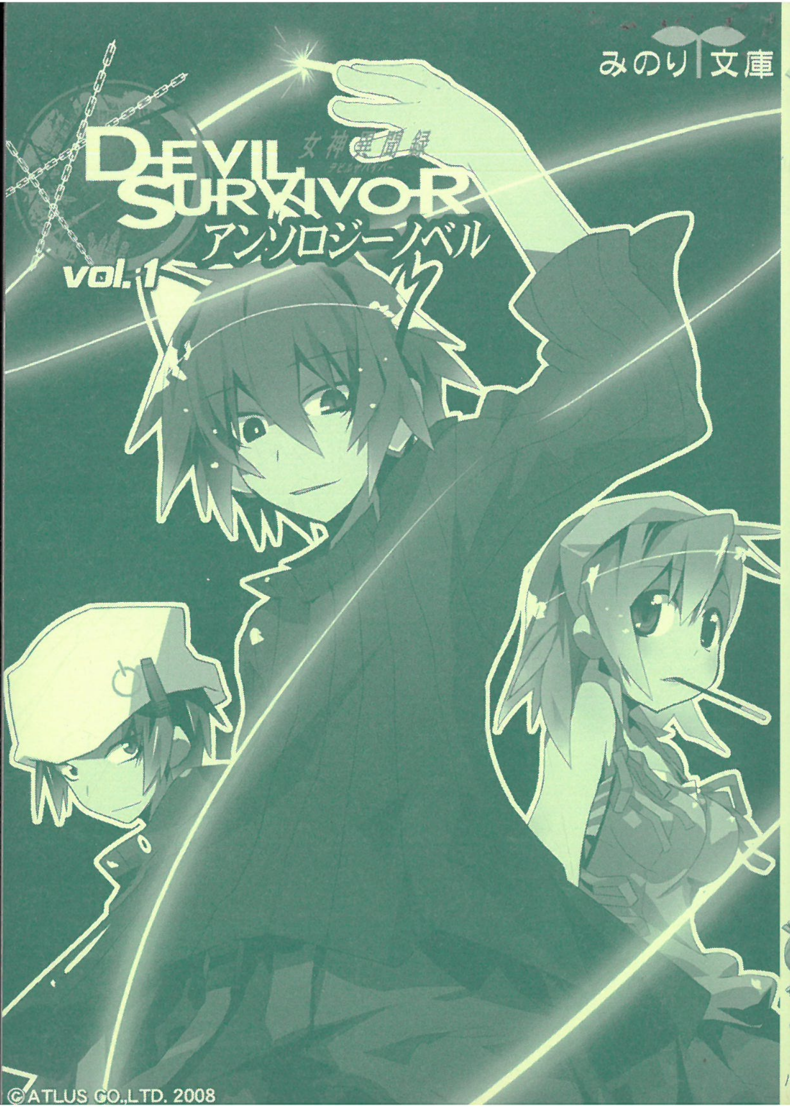
みのり文庫ラインナップ（各巻640円+税）

藤浪智之/著
　『てぃあてぃあ。　vol.1』
水野隆志/著
　『レッスルエンジェルス　サバイバー２　短編集』
三浦洋晃/著
　『φなる・あぷろーち２　～ Wedding Mirage ～』

《アンソロジーノベル》
海法紀光・高平鳴海・村田治 / 著
　『女神異聞録デビルサバイバー　vol.1』

新刊情報（8月～）
　『てぃあてぃあ。　vol.2』
　『アテナ』




みのり文庫
女神異聞録
デビルサバイバー
DEVIL SURVIVOR
アンソロジーノベル
vol.1
©ATLUS CO.,LTD. 2008



みのり
文庫

女神異聞録 DEVIL SURVIVOR デビルサバイバー
アンソロジーノベル

vol. 1

STORY
海法紀光　高平鳴海　村田治

ILLUSTRATION
異識　nino　まつざき雄嵩　やと



女神異聞録 デビルサバイバー
DEVIL SURVIVOR
アンソロジーノベル

vol.1

STORY
海法紀光　高平鳴海　村田治

ILLUSTRATION
異識　nino　まつざき雄嵩　やと





キャラクター紹介



主人公
東京近郊に住むごく普通の少年。従兄のナオヤに呼び出され、渋谷を訪れる。
そこで待っていたのはナオヤではなく、山手線内封鎖という非常事態だった。



谷川柚子（ユズ）
主人公の同級生で幼馴染み。ハルが所属するＤ－ＶＡの大ファン。



木原篤郎（アツロウ）
主人公と同級生。プログラムに精通しており、ナオヤを敬愛している。



高城圭介（ケイスケ）
アツロウの中学生時代の同級生。曲がったことが嫌いで、弱い者イジメを許さない性格。



小牧翠（ミドリ）
絶大な人気を誇るネットアイドル。正義感の塊でヒーローに憧れる。



二階堂征志（カイドー）
カリスマ不良チーム「ダイモンズ」のリーダー。マリに対し密かな思いを抱いている。



望月麻里（マリ）
「連続吸血事件」の犯人を追っている小学校の養護教諭。カイドーとは幼馴染の関係。



悪魔使い流サバイバル生活術「雨宿り」

それは、あまりにも脈絡のない『断絶』だった。
突如として山手線沿線に作られたバリケード。自衛隊による、発砲も辞さない徹底的な警備。
八月某日——山手線の内部は、完全に日本から孤立してしまった。
封鎖区画内に住居を構える者、公用もしくは私用で偶然にも山手線内にいた者——多くの人々が、封鎖区画内での生活を余儀なくされる。
そして……。
その閉じた世界には、外の世界とは異なった存在が発生していた。
『悪魔』と呼ばれる異形の生物が溢れ出し——。
同時に、その『悪魔』たちを使役する『悪魔使い』が出現する。
今、四人の若き悪魔使いが、多くの封鎖難民が集まる芝公園で、車座になって話し合っていた。
「なぁ、マッカって普通の店で使えるのか？　オレ、この三日

で十万マッカくらい溜まったんだけど」
アツロウの言葉に、主人公がにこりと微笑む。
「もしお金として使えるんだったら、大金持ちだね」
「使えるわけないでしょ、このアホロウ！　主人公も乗らないの！　人間のお店でマッカ使って買い物してる人なんて、見たことないわよ。第一、もっと重要なことがあるでしょうが……」
「そうだよ、ふたりとも！」
呆れ顔のユズに、ミドリも立ち上がって付け加える。
「停電でアニメが見れないとか、封鎖されてるから週刊少年誌が届かないとか！」
「いやいや、それは大して重要じゃないから」
ユズは首を横に振る。
「重要なのは、私たちの生活でしょ？　食べ物とか、着る服とか、住む家とか！」
その言葉に、ユズ以外の三人も「そうだよなぁ」と頷く。
食べ物はない、屋根のある家もない、ないない尽くしのこの状況だ。ちょっと前までは四人とも、冷房のきいた涼しい部屋の中で、お腹が空いたらおやつでも食べて、喉が乾いたらジュースを飲んで……という悠々自適な生活をしていたのに。

アツロウはなんとなく空を見上げる。まるで自分たちの行く末を指し示すような曇り空だ。ポタリポタリと雨まで降ってきている。
「って、雨!?」
出し抜けなアツロウの声に、その場にいた全員が一斉に空を見上げた。雨粒は次第に大粒になり、勢いを増して全員の顔を打つ。
「まずい、ＣＯＭＰが濡れる!?」
「っていうか、風邪引くって！」
「マジカル・ドリーの衣装が!?」
アツロウ、ユズ、ミドリはそれぞれ、突然の雨に慌て始める。山手線内に閉じ込められるとは思っていなかったため、傘などを持ってきている者はひとりもいない。
「どこか雨宿りできる場所を探さないと！」
主人公の言葉を合図とするかのように、座り込んでいた全員が一斉に立ち上がる。それぞれ散らばって、公園内で雨宿りできる場所を探し始めた。
しかし――。
「ダメだ。どこも人でいっぱいだ」

「そうみたいだね……」
「ドリーの服しか持ってきてないのに……」
　数分後、再び集合したアツロウ、ユズ、ミドリは揃って首を横に振る。
　トイレ、公園内の店の軒先、遊具の中――この近くで雨宿りできそうな場所を探してみたが、どこも同じ目的の人でいっぱいで、アツロウたちまで入れそうもない。芝公園にはかなりの人が集まっていたから、仕方ないといえば仕方ないことだった。
「あれ？　主人公はどうしたんだ？」
　アツロウは周りを見回すが、主人公の姿はない。集まっているのはアツロウたち三人だけだ。まだ雨宿りできる場所を探しているのか――そう思った時、
「みんな！　雨宿りできる場所、見つけたよ」
　主人公の声がして、アツロウたちは振り返る。
「マジか⁉　どこ……だ……？」
　アツロウの言葉は、途中で空気に溶けるように消えていく。
「……」
　ユズもミドリも、彼と同じく沈黙した……。
　三人の視線の先――確かに、雨宿りをしている主人公の姿があった。

　アツロウやユズやミドリと違って、完全に雨を遮(さえぎ)れる場所に立っていた。
　確かに、確かにそれは雨宿りができる場所ではあったが……。
「あ、アバドンじゃねえかあぁぁぁ！」
　邪神の口の中にすっぽり収まっている主人公に、アツロウが叫び声を上げる。
「……？　何、そんなに慌ててるの？」
　主人公はまったく慌てた様子がない。
　しかし――。
「グゲゲエェ……我、口ヲ開ケルコトニ、疲労セリ……」
　――バクン。
　主人公の体が、アバドンの口の中に消えた。
「しゅ、主人公さん！」
「このバカ――――‼」
「おい、口開けろ、このっ！」



降りしきる雨の中、三人の悪魔使いは友人を助け出すべく、わらわらとアバドンに群がった。

《悪魔使い流サバイバル生活術心得　第一条》

悪魔は非常に強力な存在です。些細な理由・目的で彼らを使役するのは、危険なので避けましょう。



行列のできる地獄法律相談所「開業前夜」

高城圭介、十七歳。通称、ケイスケ。彼はCOMPを介さずにヤマ——すなわち閻魔大王を召喚し、山手線内の様々な人々を裁いてきた。その判決は的確にして公明正大、かつ迅速対応。

今やその判決方法は山手線内で有名になり、封鎖区画内で彼とヤマのコンビを知らない者はいない。

秋葉原——。

「あ、ケイスケさんとヤマさんだ！」

ケイスケがヤマと一緒に中央通りを歩いていると、リュックを背負った若い男ふたりが駆け寄ってくる。

「聞いてくださいよ、ケイスケさん！　こいつ、封鎖の混乱に紛れて、店の商品を盗もうとしてやがるんですよ」と男のひとり。

「オレがもらおうとしてたのは防犯用の道具だ！　悪魔から身を守るためには、スタンガンのひとつも必要なんだよ、仕方ないだろ！　店員もいないから、買うこともできないし！」ともうひとりの男。

「それでも盗みはダメだ！」「いやしかし、死んだら元も子もないだろ！」とふたりは言い争う。そして彼らは、ケイスケとヤマを見つめた。
「「ケイスケさん、ヤマさん、どっちが正しいと思いますか⁉」」
地獄の裁判官、ヤマは厳かに答える。
「判決。店員がいないのであれば、代金を店に置いておき、一応の『買う』という体裁を取るべきである。よって、この男は有罪！」

ケイスケとヤマが宮下公園に通りかかると、カップルと思われるふたりがベンチの前で言い争っていた。
「やっぱり、夏といったら海で海水浴だろ！」
「いいえ、山でハイキングよ！」
ふたりはケイスケとヤマを見かけると、早足に駆け寄ってくる。
「ケイスケさん、ヤマさん、どっちがいいと思いますか⁉」
「やっぱり夏といえば海ですよね⁉」
言い募ってくるふたりを、どうどうと抑えるケイスケ。
「ヤマ、判決を頼む！」

召喚主の命令に応じて、ヤマは判決を下す。
「判決！　今の時期、海はクラゲが発生していて危険である。よって、海より山の方が良いだろう！」
表参道。ケイスケとヤマが歩いていると、今度はＯＬらしきスーツ姿の女性が話しかけてくる。
「聞いてくださいよ、ケイスケさん。封鎖が始まってから、彼が冷たいんですよ。オレたちはもう終わりだ、とか。ひどいと思いませんか？　こういう危機的な状況だからこそ、お互いに助け合って生きていかないといけないのに！」
その話を聞き、ケイスケはなるほど、と頷く。
「おそらく、その男には人々の余命が見えているんでしょう。『終わり』というのはふたりの仲が終わりというわけではなく、もっと具体的な終わり――死ぬことを言っているんです。しかし、それを説明しない彼にも問題がある……。



ヤマ、判決を頼む！」
うむ、とケイスケの背後に立つヤマは頷く。
「判決！　悪魔使いに見える余命は、変えることができる。これからはふたりで手を取り合って、その運命を乗り越えていくべきである！」
判決を下され、「そうよね、ふたりで協力していかないと！」と意気込んで去っていくＯＬを見送って、ケイスケは息をつく。
（ふう、今日もいい裁きをした……って、裁き……なのか？）



悪魔使い流サバイバル生活術「洗濯」

封鎖された山手線内にいる人間は、二種類に分けられる。
すなわち、『悪魔使い』と『一般人』である。
そして今、四人の若き悪魔使いが、芝公園で車座になって話し合っていた。
目下のところ、彼らにとって最大の議題は――着替えをどうするのか、だ。
さっきの通り雨のせいで、主人公、アツロウ、ユズ、ミドリは全身ずぶ濡れになっている。ちなみに主人公の場合は雨だけでなく、アバドンの唾液も原因のひとつだ。
それにしても――。
「服、ぐしゃぐしゃになっちゃったんだけど……」
ユズが服の裾（すそ）を絞りながら、不満気味に口を尖（とが）らせる。
「アタシもだよ。このままじゃ、せっかくの衣装がダメになっちゃう」
一方ミドリはコスプレ衣装が肌に貼り付くのが気持ち悪いのか、パタパタと服の裾を払っている。

「……」
こんな状況で、アツロウとしては目のやり場がない。
「ちょっとアホロウ、今、こっちを見てなかった？」
「アホロウさん、目つきが怪しいよ」
「そんなことないっての！」
女子ふたりに白い目で見られ、アツロウは言い返す。
（というか、ミドリちゃんまでオレのことを『アホロウ』って……）
こうなったら、自分ももっと『オデコ』というあだ名を広めてやった方がいいんじゃないか、とアツロウは思う。
「だいたい、オレだけじゃなくて主人公にも言えるって」
「？」
急に白羽の矢を立てられ、主人公はキョトンとする。どうやら彼はあられもない姿の女子ふたりを、まったく意識していないようだった。
（こいつ、本当に人間か……？）



付き合いの長いアツロウだが、時々疑いたくなってしまう。
「しゅ、主人公はいいのよ、別に」
「そうだよ、主人公さんはいいの！」
ユズもミドリも、口を揃える。照れたように微妙に頬を染めていた。
（さ、差別だ……）
横にいる主人公を見ながら、アツロウは理不尽さを感じずにはいられない。
ミドリが仲間に加わってから、以前に増して感じるようになった扱いの差に、心の中でため息をついた。
とにかく、とユズは言葉を続ける。
「いくら夏でも、濡れた服のままじゃ風邪引くかもしれないし。着替えるなり服を洗濯するなりしないと！」
山手線内に閉じ込められたことが予定外だったため、四人とも着替えなど持ってきているはずがない。
だったら洗濯するしかないのだが……。
彼らがやってきたのはコインランドリー。しかし、主人公が洗濯機のボタンを試し

に押してみても、動く様子はまったく見えない。洗濯機はどれも『起動中』の表示が消えていた。

「そうか……今は停電してるから」

主人公が、今初めて気がついたように手を打つ。

「洗濯するのは無理かぁ……」

ユズは落胆で肩を落とす。おそらく、どこのコインランドリーも同じ状態になっているだろう。

ユズ、主人公、アツロウが別の方法を探そうかと思い始めた時——。

「諦めちゃダメだよ、みんな！　こういう時こそ、悪魔使いの本領発揮じゃない！」

ミドリがＣＯＭＰを開き、悪魔召喚プログラムを起動させる。床から光の柱が発生し、その中から羽根の生えた手のひらサイズの少女——妖精ピクシーが出現する。

「は～い。それじゃあ、このコインランドリーに電気を供給しま～す」

「え？」

ピクシーの言葉に、その場にいるミドリ以外の三人が、そろって顔を引きつらせる。三人とも「すごく嫌な予感がする……」と言うように眉(まゆ)を潜めていた。

しかしそんな空気に気づくことなく、ピクシーはミドリの望みを実現すべく、行動

を開始する。

「ジオ！」

……狭いコインランドリーの中で、落雷のような電気が爆(は)ぜた。

《悪魔使い流サバイバル生活術心得　第二条》

悪魔の一部には電気を発する者もいます。しかし彼らを電力源として用いる場合は、電圧が家電製品の規格に合うかどうかをよく確認しましょう。



「迷惑な居候」

「――ハンマープライス！」

「よし落札できたぞ！　苦労したなあ……」

デビルオークションサイト。略してデビオクと呼ばれる悪魔の取引所だ。悪魔が自らに値をつけ、契約相手を待っている場である。

主人公はここで新たに強力な仲魔を手に入れた。地獄の門番と恐れられるケルベロスだ。有能なだけに人気は高く、競り落とすのにたくさんのマッカを必要とした。

「そのまま戦力として編入しても心強いし、合体させてもよし」

そう、ケルベロスを落札したまではよかったのだ――。

「へへ。ようよう、ずいぶん待たせるじゃねえか。このヤクシャ様を待たせるなんて百億年早ええんだよ、小僧どもが」

メッセージを送ってきた悪魔の太鼓腹がぶるると震える。

「ヤクシャ？　落札したのはケルベロスだけど……」

画面に表示されていたのは筋骨たくましい、それでいてどこか鈍った感じの中年の鬼だった。



「ハァ？　なんだなんだ、俺じゃあ不満だってのか？　まあいいじゃねえか、堅いこと言うなよ。さあゼニ出しな、ほれほれ」

「なんですかあなたは……知りませんよ、帰って下さい」

　ガラの悪い悪魔を前に、主人公は思わず敬語になってしまう。

「いいからよぉ、契約金（カネ）出せよー。カネ持ってんだろ？　ほれ、ジャンプしてみ？　たんまり持ってんじゃねえか、出せって。ちょっと借りるだけだから」

「借りるってなんですかカツアゲですか」

　悪魔がマッカを借りるなんて聞いたことがない。

「……おい、これはアレだ。アクシデントってやつだろ？」

　見守っていたアツロウは主人公に耳打ちする。

　デビオクではたまにこんなことが起こるのだ。呼んでもいない悪魔が勝手に出てきて契約を迫る、というケースだ。

「ええ？　でもさ、こいつでもいいんじゃない？　この悪魔、なかなか強そうだよ」

　ユズはむしろ面白そうだというリアクションだった。

　もっとも、ヤクシャと言えば闘鬼族の中でも最強の戦士で、ケルベロスに優（まさ）るとも劣らない実力を持っているはずだ。

「おっ、ねえちゃんわかってるじゃねえか！　さすがだな、その巨乳はダテじゃないってことだ」

「きょ……ムネは関係ないでしょ！　ねぇやっぱこいつやだ～、セクハラ悪魔よ！」

「堅いこと言うなよ。なにしろ悪魔ってくらいだからな。セクハラのひとつくらいやっても当然だろ？」

　こんなふうにゴネられた場合、落札者は契約をする必要はない。そのまま立ち去ってもいいのだが――。

「でもこのまま帰ったんじゃ、ケルベロスは手に入らないんだよな……この先の戦いにはどうしても新たな戦力が必要だったんだが」

　するとヤクシャはしめたとばかりににやりと笑った。

「じゃあ、俺と契約するんだな。それっきゃねえだろ、さあ決まりだ。行こうぜ」

「しょうがないなー、わかったよ。契約してやろう」

　この際、ヤクシャでもいいかと思い、主人公はマッカを渡そうとしたが、相手はその場を動かない。

「俺を雇おうってんならちと足りねえなー。この金額の倍はもらわねえとな」

「ちょ、調子に乗るなよ！」

「あれれ、いいんですか？　俺、ディアラハンとか使えるんスけどー？　力かなりあるし。こんなにお買い得なんだから、二倍払えってのよー」
　主人公は歯ぎしりしながら倍額のマッカを渡したのだった。
「……まったくとんだヤクシャもいたもんだ。でもまあ気を取り直して、と」
　マッカは戦っていればいずれ貯まっていく。たいした損失ではない。
　それよりも戦力が増えたのだからと彼は自分を納得させて、さっそく戦いの場に向かった。
「じゃさっそく働いてもらうぞ！　ラクシュミ、そしてヤクシャ、召喚に応じよ！」
　敵を前にＣＯＭＰを操作し、二体の悪魔を召喚する。
　ヤクシャの剣は敵を切り刻み、その皮膚は火炎をものともしなかった。戦いはあっという間に終わった。
「よーし、よくやったぞ……」
「きゃあ〜！　このスケベ！　何をするつもりですかーっ！」
　悲鳴に驚いて振り向いてみれば、ラクシュミにヤクシャがにじり寄っているところだった。ラクシュミはおびえまくっている。
「へへへ……モロ好みだぜ、あんた。なんだかいい匂いだなあ、女神なんだろ？　同

郷のよしみで仲よくしようぜ、な、な？　ウシシシシ」
　同じインド出身のラクシュミにひとめぼれでもしたのだろうか。ヤクシャは周囲の目もまったく気にしていない様子だった。
「やめないか！　いやがってるだろ」
　女神の身体に遠慮なく触れようとするヤクシャを、主人公は即座に帰還させた。
「なんであんなのを入れたんですか！　私、ＣＯＭＰに戻りたくありませんわ。いつ襲いかかってくるかわからないですわよ、あのケダモノ！」
　重要な仲魔であるラクシュミはおびえつつも怒りをあらわにした。
　しかし、悪魔を出しっぱなしにしておくわけにもいかない。主人公はなんとかなだめてラクシュミを帰還させた。
　ヤクシャの実力は確かに高いのだ。その後の戦闘でも、他のメンバーに呼び出され、戦果を挙げることもあった。だが……。
「おい、主人公、ヤクシャって奴、呼んでも来なかったんで調べてみたら、寝てやがった。こんなのありかよ」とか、
「ちょっと！　回復要員を召喚したのにヤクシャが勝手に出てきたわよ。戦術が乱れて危うく負けるところだったんだから」とか、

「ちょ、あのヤクシャっての、女形悪魔と組ませられないぞ。女のケツばっか追っかけてまともに戦わないんだ」といった具合に、苦情の方が多い始末だった。
「まいったな……とんでもないのをスカウトしちゃった」
その高い実力のおかげで、いくつかの難局を乗り切れたのだが、それ以上に問題の方が多い。主人公はヤクシャを早々に合体させて別な悪魔にしてしまおうと考えた。
だが、その前に、ヤクシャに代わる戦力を補充しなければならない。
再びデビオクにアクセスして、より強力な仲魔を選ぼうとした彼は、またまたハプニングに見舞われた。
〝これ以上、悪魔と契約できません〟
「あれ？　おっかしいな、数体分はメモリに余裕があったはずだけど」
調べてみると、知らない悪魔が数体入っている。
「ヘアリージャックにマカラ、トウビョウ？　こんな低レベルの悪魔、まだストックしてたっけ？　っていうか契約した憶えがないんだけど」
それもなんだか平均より能力低め、スキルも足りないようなみすぼらしい個体ばかりだ。首をひねりながらも、合体させて別な悪魔にしようかと思った矢先、ヤクシャが現れた。

「へへへ、まあまあちょっと待ってくれや、小僧。こいつらさ、宿なしでかわいそうだから、俺が面倒見てやってるんだよ。まあ俺の弟子っていうか居候だよ」
「ええっ、何でそんな勝手なことをするんだよ！　弟子とか居候っていうか、これはお前の家じゃなくて俺のＣＯＭＰだから！」
主人公はあまりのことに怒声をあげた。
「男らしくないな、小僧。こいつらだって経験を積めば強くなるんだぜ。ちっと時間はかかるけどよ、気長にやっていこうぜ」
「もうヤダ！　お前いらない！　邪教の館.exeで目つぶったまま他の悪魔とランダム合体させる。ここからいなくなれ～っ！」
主人公はちょっと自分を見失って、そんなことを口走った。
「待ッテクレ……」
「主ヨ、アニキヲ責メナイデクレ！」
マカラとトウビョウがＣＯＭＰの画面から主人公を止めに入る。
「わふっ。罰ならワシらが受ける。ヤクシャの旦那のおかげで暖かい寝床にありつけたんじゃ。消えるのはワシらだけでじゅうぶん。な、主、許してやってくれ」
ヘアリージャックも恐縮して頭を下げていた。

「暖かい寝床って……そういう表現もアリなのかな。でも……メモリがいっぱいだと強い悪魔が入れられなくて、先に進めない。でも、お前らもかわいそうだし――」
主人公は情にほだされ、拾われ悪魔たちを消すことにも躊躇してしまう。
「おーし、わかった……」
そこで口を開いたのはヤクシャだった。
「俺も男だぜ。弟子どもにかばわれて永らえようとは思わん。それに、もとはといえば俺が悪いんだ。オトシマエはつけさせてもらおう――なあ、小僧、俺を消してくれ。おねえちゃんでなくても合体に応じるからよ」
「しかし……」
「冷静になってよく考えな。俺が加わってからの戦いで、小僧も少しは強くなったろう。だから、俺よりレベルの高い悪魔も合体できるようになってるはずだぜ」
ヤクシャは白い牙を見せて笑いながら、親指を立てた。
つまり、ヤクシャに罰を与える意味で違う悪魔にしてしまうのではなく、合体相手を吟味（ぎんみ）してより強い悪魔に転生させればいいのだ。
「そうか……えーと、こいつと合体させれば、よし、使える悪魔ができそうだ。ヤクシャ、お前の力、今後も活かさせてもらうよ」

主人公が決断したのを見て、ヤクシャは弟子悪魔たちに最後の別れを告げた。
「お前ら、立派な悪魔になれよ。俺は草葉の陰から見守ってるぜ」
「アニキー」
「強イ悪魔ニナッテクレ……」
「旦那、世話になったのう。転生後の姿を楽しみにしておるよ」
四体の悪魔が抱き合って泣いている姿はそれなりに感動するものがあった。
「……よし、小僧、準備はいいぞ。強くしてくれるんだな？」
主人公は無言のまま、合体の準備を進めていく。
そして――いよいよ合体という時、相手を見たヤクシャは情けない悲鳴を上げた。
「いや、っていうか、ギャルと合体させろとは言わねーが、グロい奴との合体はカンベン……うわ、メチャクチャグロ～！　これは罰ゲームだろ！　おい、やめろ！　やめてくれ、こいつとだけは……うぎゃあああああ！」
ヤクシャは邪神アリオクと合体させられた。赤い身体のヤクシャと紫に斑点のあるアリオクの身体は溶け合い混ざり合い、別なものに再構成されていく。
「すまん……悪気はないんだ。とりあえず、アリオクしか合体要員がいなかったんだ。許してくれ、ヤクシャ」

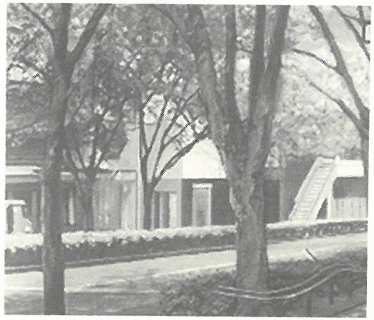
そして――。
「私は偉大なる者の子、幻魔ガネーシャ。お望みならば裁きの雷を降らせ、貴方の行く手を開きましょう……」
象の頭に青みがかった男の身体を持つ悪魔が誕生した。
その太鼓腹がぶるると震える。小太りの体型は、ヤクシャの遺伝子を受け継いでいる証拠のようなものだった。
「やれやれ、問題は解決したな」
もちろんガネーシャは品行方正かつ有能で、一行はその力を借りて善戦を続けることになる。
「でも、あのお騒がせセクハラ悪魔、いなくなったらいなくなったで寂しいわね」
ユズはヤクシャの太鼓腹を思い浮かべながら、そうつぶやいた。
「女悪魔たちも同じようなこと言ってたぜ。あいつはあいつなりにけっこうみんなに愛されてたんだな～」
アツロウはため息をつく。
「仕方ないよ。俺たちは目的を達するために、より強い悪魔を仲魔にしていかなければならないんだ」

ヤクシャがどんな奴だったにせよ、最終的には合体要員になっていたはずだ。
「ああ、でもねぇ……ガネーシャって変な癖があるのよ。ちょっと困った癖」
ユズが語ろうとした背後にガネーシャが現れる。
「主、少々よろしいですか？　申し訳ないが、この宿なし悪魔をしばらく居候させてもらえないでしょうか。どうにも捨て置くのが不憫(ふびん)でして」
ガネーシャの腕には、みすぼらしいネコマタが抱えられていた――。



悪魔使い流サバイバル生活術「着替え」

　封鎖された山手線内の人間には、『悪魔使い』と『一般人』がいる。
　今、四人の若き悪魔使いが、芝公園で車座になって話し合っていた。
　彼らの姿は、他の民間人と大きく隔たっている。髪や服の一部は焦げ、皮膚には火事場から逃げだしてきたようにススがついていた。
「取りあえずミドリちゃんのお陰で服は乾いたみたいだし……不幸中の幸いかな」
　力ない笑みを浮かべる主人公を、ユズがキッと睨みつける。
「乾いたっていうか、燃えた、でしょ」
　今の四人の状態は、ミドリの仲魔が放ったジオの結果だ。ミドリはシュンとして小さくなっている。
　ちなみにジオが炸裂した時、一番近くにいたのはユズだった。そのせいで、上着の下半分が焼け焦げてしまっている。
「これはもう、洗ってなんとかなるってレベルじゃないよな。



服、買うしかないんじゃないか？」
かく言うアツロウも、トレードマークの帽子が焼け焦げている。それでも帽子を取ろうとしないのは、彼のポリシーだ。
「でも、洋服店なんてどこも閉まってるし……」
ユズはそう言いながら周囲を見回す。芝公園の中にある店舗も、そして公園沿いの道に並ぶ店も、すべてシャッターが降りている。現在、封鎖区画内では、飲食店、スーパー、コンビニ——ほぼすべての店が閉まっていた。もちろん、洋品店もその例外ではない。停電のせいで店内の照明が保てないため、そして商品管理にコンピューターを使っている場合は、その電源を確保できないためだ。
「それだったら！」
ミドリが勢い込んで手を挙げた。
「いいお店があるよ！　アタシ、店長さんと知り合いだから、多分売ってもらえると思う」



そして約一時間後、秋葉原——。
「うわあああっ！　悪魔が！　悪魔がぁぁぁっ！」
「きゃあああ！　助けてぇっ！」
街には混乱が広まっていた。何人もの民間人たちが、中央通りを転がるように逃げていく。悪魔が出現したのだ。
「うわっ！」
逃げていた会社員のひとりが、地面につまづいて転んでしまう。その真後ろに、巨大で毛むくじゃらな大男——ウェンディゴが、ゆっくりと迫る。
「ひぃっ！」
彼は死を覚悟した。目をつぶり、絶望的な暗黒の中で、数秒後に自分を押しつぶすであろう衝撃を待った——。
しかし、その衝撃はいつまで経っても訪(おとず)れなかった。
恐る恐る、彼は眼を開ける。
視界に映ったのは、炎に包まれて燃えている雪男の姿だった。「うぉごぉぉ……」と苦悶のうめき声を上げ、会社員の目の前で、魔界の怪物は消滅していく。

そしてその向こうに立っているのは、四人の少年少女。彼の半分程度の年齢であろう四人は、悪魔を従え悪魔に対抗していた。

「アタシたちが来たからには、もう安心です！　悪い悪魔には、天罰☆てきめん！」

その姿に、会社員の彼は一瞬だけ、幼い頃に憧れた五人組のヒーローたちを思い出した。

その若き悪魔使いたちはそれくらい格好よく、ヒーローにふさわしかったのだ。

――着ている服を除けば。

後にその会社員、高橋権三（33）は述懐する。

「学校の制服？　いえ、違いますよ。一番元気がよかった女の子は、そうですね……あれです。うちの娘がよく見ているアニメに出てくる――いわゆる魔法少女ってやつですね。

いやでも、彼女はまだまともな方だった。その横にいた女の子は、今はやりのメイドさんの服装でした。ええ、裾が長いタイプの。なんでそんな動きにくそうな服で戦ってるのか、まったく意味不明でしたね。

けど、それもまだ序の口です。その横にいた少年は――婦警さんの服装だったんです。いえ、本物の警察服じゃありません。こう、全体に派手な青色で、やけに短いスカートには、腰までスリットが入っていて……。ええ、ミニスカポリスってやつです。

最後にもうひとりですが、彼は――ナースさんみたいな格好をしていましたね。ナースキャップじゃなくて、なぜか焦げた帽子を被ってましたけど。病院から怪我人を助けに来てくれたのかと思いましたよ。でも、よく見てみたらなぜか男の子で……。

マジカル・ドリーって子はなんだか楽しそうに悪魔と戦ってたんですけど、他の子たちは微妙な顔をしてたなぁ。メイド服の子なんかは、ずっと『なんで私がこんな格好を……』って不満げでしたし。

彼らは終始『皆さん、俺たちの悪魔は危険ではありません。俺たちは怪しい者ではありません』って周囲の人に訴



えていましたけど、いや、あの服装で怪しい者ではないと言われてもねぇ」

《悪魔使い流サバイバル生活術　心得第三条》
悪魔使いは信頼されにくい存在です。言動や身だしなみには常に注意し、無用の誤解を受けないよう気を配りましょう。



プログラマー列伝「超肉体派プログラマー・アツロウ」

悪魔の出現と自衛隊による封鎖の影響で、すっかり普段の活気を失った秋葉原——そこで、主人公、ユズ、アツロウの三人は、一台のＣＯＭＰを覗き込むように集まっていた。護国寺（ごこくじ）で悪魔に襲われ、命を落とした10ＢＩＴから託されたＣＯＭＰだ。

「10ＢＩＴっていうハンドルネームが、暗号を解く鍵じゃないかな？」

そう提案したのは主人公だった。

なるほど、とアツロウは思った。その可能性はゼロとは言えない。少なくとも試してみる価値はある。

アツロウは10ＢＩＴという名前から、何かの数字が思いつかないか、考えていく……。

じっくりと考える。

じっくり、じっくりと考える。

しかし——何も思いつかなかった。

「だぁあああっっっ！　解けない暗号なんて作るんじゃねえ――――！」

アツロウの拳がCOMPをぶっ叩き、地面にたたき落とす！　解けないからこそ……暗号には意味があるはずだが。暗号考案を生業とする者が『解けない暗号を作ってすみません』と謝ってしまいそうな一撃だった。

――ガシャン、ボンッ！

「……」

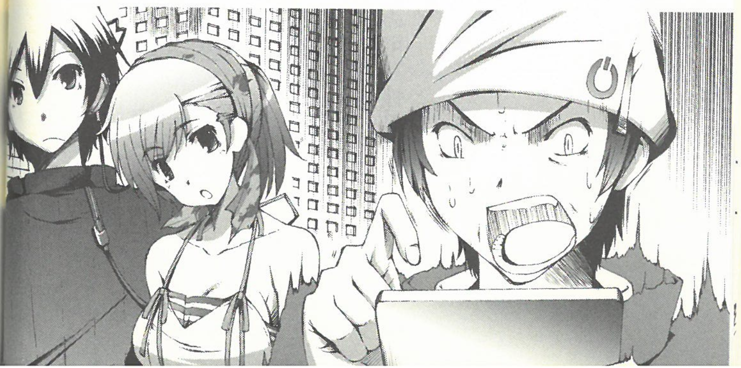
ユズと主人公は呆気に取られて沈黙した。そしてアツロウは、顔を引きつらせて口をつぐんでいた。

預かりもののCOMPは、地面と衝突して無惨に粉砕。COMPの液晶部分とコントローラー部分が分断され、どう見ても修復不可能な惨状だ。

「何やってんのよアホロウ！　というか筋肉ダルマロウ！」

「き、筋肉ダルマロウ⁉」

ユズのその言葉は、アツロウにとってあまりにも予想外



で、かつ彼のアイデンティティを粉砕しかねない罵倒だったのである。

木原篤郎、十七歳。特技、プログラミング。豊富なコンピューター知識で、主人公たちをアシストする。

スキルは『渾身の一撃』『暴れまくり』『絶妙打』。ちなみに、さっき10BITから預かったCOMPを破壊したのは、『渾身の一撃』だ。

「これ、どう考えてもプログラマーじゃないだろ！」

アツロウはCOMPに表示されたステータス画面を見ながら、自分で自分にツッコミを入れる。

「どこのファイターだよ、オレは⁉　というか、なんで『絶妙打』なんて格闘家っぽい技を使えるんだ⁉」

「でもそれ、あんたが自分でセットしたスキルじゃない」

「うんうん」

呆れ顔のユズと、それに頷く主人公。

ふたりともアツロウの現状をまったく疑問に感じず、水が上から下に流れるのと同じくらい当然のこととして受け止めているようだった。

「いや待て、おかしいだろ！」

アツロウはCOMPを振りかざしつつ、自らの異常な現状を訴える。

「普通は！　プログラマーってのは、もっとこう、インドア派なんだよ！　パソコンの前に座って一日中キーボード叩いてて、日の光に当たったら『ぎゃー溶けるぅ～』って雰囲気を醸(かも)し出してて――」

「そのプログラマー像は極端だと思う……」

主人公のツッコミを無視し、アツロウの言葉は続く。

「それなのに……オレの体を見てみろよ！」

アツロウは上着を脱ぐ。別に脱がなくてもいいが、敢えて脱ぐ。露出癖があるわけではなく、自分の状態をしっかりと主人公とユズに伝えるためだ。

上着の下から現れたのは、厚い胸板、割れた腹筋、引き締まった上腕二頭筋――。すっかり格闘家然とした肉体になってしまったアツロウに、主人公とユズはまぶしいものでも見るように目を細める。

しかし、そんな視線も今のアツロウにとっては、なんの慰(なぐさ)めにもならない。

「プログラマーが、この体をどう使えってんだよ！」

ユズの『筋肉ダルマロウ』という罵倒も、的を射ていたわけである。

「確かに、アツロウって肉体派だよね。素手で悪魔と闘えるのってすごいと思うよ」

ニコリ、という少しも悪気のなさそうな笑顔を見せる主人公の言葉にアツロウは今までの自分の闘いを思い出す。

初日は、襲いかかってきたコボルトとオーガとビルヴィスを拳で返り討ちにした。次の日は、ガギソンとトウビョウを殴り倒し、ジャンバヴァンとジャックフロストを蹴散らし、ゴズキとガルムをフルボッコにした。その次の日は、取り囲んできたウェンディゴとメズキの壁を腕力だけを頼りに打ち砕き、その先にいたペンドラゴンとバジリスクを鉄拳一撃で沈黙させた。

「ペンドラゴンを倒した時のアツロウはすごかったな～。人間にあんなすさまじい動きができるなんて……思わなかったよ」

（主人公……それってプログラマーに対する言葉じゃないよな……）



アツロウはがっくりと肩を落とす。
師匠とあおぐナオヤのことを彼は思い出してみる。その戦闘スタイルは肉弾戦ではなく、魔法戦がメインだ。そう、プログラマーといえば知能派、知能派といえば魔法で戦うものである。
しかしアツロウは、どこからどう見ても物理攻撃専門だ。
（オレはこれでいいのか――否、よくない）
この時彼の胸に、熱い決意が宿った。
「やめる……」
「は？」
「え？」
突然のアツロウの言葉に、主人公とユズが訝（いぶか）しむ声を漏らす。
「やめるって、何を？」
顔を伏せ、どこか異様な雰囲気を醸し出すアツロウに、ユズが尋ねた。それに応えて、アツロウはガバリと顔を上げる。
「オレはもう肉弾戦で戦うことをやめる！　これからは、魔法だけで戦う！」

芝公園で、主人公がＣＯＭＰでレベルを確認しながら言う。
「そろそろフリーバトルでレベルを上げるか」
出現する悪魔は日増しに強くなる。そんな中、フリーバトルでのレベル上げは必要不可欠だ。
ユズもアツロウも反対しない。特にアツロウは、内心で笑みを浮かべていた。
（待ってたぜ、この時を！　新生アツロウの――ＮＥＷ　ＡＴ－ＬＯＷの力を見せてやる！）
アツロウは主人公たちに内緒でＣＯＭＰを起動し、コマンドスキルを変更した。
所持スキルが『渾身の一撃』『暴れまくり』『絶妙打』から、『マハジオ』『マハラギ』『マハブフ』になった。そして彼らは、宮下公園に向かう――。
約半時間後。アツロウは息も絶え絶えで、主人公とユズに両肩を支えられて、フリーバトルの行われていた宮下公園から逃げ出てきた。
「アツロウ……どうしてあの時、『暴れまくり』を使わなかったのさ。いつものアツロウだったら、暴れまくってウェンディゴなんて蹴散らしてたところだよ」
「まったく、このアホロウ！」

「悪い……」
ふたりの言葉に、アツロウはただ頭を下げることしかできない。
今回の戦いで、彼はウェンディゴの集団にマハブフを使い、反射されて返り討ちにされたのだ。
（魔法って、相性とかも考えなきゃいけないんだな……。物理攻撃で戦ってた時は、そんなこと気にもしていなかったのに）
しかし、これは結局慣れの問題だ。闘っていけば、きっと魔法戦にも慣れていくはずだ。
アツロウは拳を握り締めて誓う――オレは立派な魔法使いになる、と。
なんだか方向性がずれてきている気がしないでもないが、目下のところアツロウの目標は、肉体派を脱却することである。

しかし――。
二回目フリーバトル後。
「あんた、魔法を使うんだったら、もっと魔力を上げなさいよ」
「アツロウは体力しかあげてないからね……」

「ごめん……」
再び、アツロウは公園から瀕死で運び出されていた。
（けど、次だ。次こそは……）
主人公とユズに支えられながら、アツロウは次回の勝利を心に誓う。
三回目フリーバトル後。
「MPがなくなったんだったら、普通に攻撃しなさいよ！」
「アツロウ、MP少ないのに、無理に魔法にこだわることはないと思うよ……」
「でも、オレは肉体派を……」
そうつぶやきながら、やっぱりアツロウは公園から瀕死で運び出されていた。

そして四回目のフリーバトル――はなかった。
宮下公園で悪魔たちと戦う主人公とユズを、アツロウは公園の外から眺めている。
アツロウはチーム編成でメンバーから外されたのだ。
「え？　なんで？」
キョトンとするアツロウを振り返り、ユズは致命的な一言を突きつけた。

「あんた、役に立たないもん」
ユズの言葉に、主人公も頷いて同意する。
（ええええええ！）
確かに、ここしばらくのバトルでアツロウは敗北してばかりだった。
「アツロウが物理攻撃中心に戻ったら、またチームに戻すよ」
にっこりと、やっぱりまったく悪気のない顔で言う主人公。
（つまりそれは……オレにはずっと肉体派でいろってことですか……）
アツロウはがっくりと肩を落とす。
筋肉プログラマー・アツロウの苦悩は続く……。



行列のできる地獄法律相談所「相談者：A・K」

窓が少なく、薄暗い事務所……そのデスクに、ケイスケとヤマが座っていた。
悪魔使い、ケイスケ――彼は自ら召喚したヤマと共に多くの人々の相談にのり、今や封鎖区域内の誰もが知る存在となっていた。ここは、そんな彼らが設立した相談所事務所である。
そして今日もまたひとり、迷える子羊がこの法律相談所を訪れる……。

ケイスケが座るデスクの向かいのイスに、ひとりの少年が座っている。パソコンの電源マークが刺繍された帽子が特徴的だった。
「聞いてくれよ～、ケイスケ。オレはプログラマーなんだよ。プログラマーっていうのは、頭脳戦とか作戦参謀とか、そういうのが役割だろ。なのに誰もオレにそれを求めないんだよ。それどころか、お前は腕力だけで闘えっていうんだ」
今日の相談者K（プライバシー保護のため、本名は伏せさせ

ていただきます）を悩ませているのは、自分の望む姿と、周囲の人間が彼に期待する姿とのギャップだった。

「別に作戦参謀になりたいってわけじゃないんだよ。でも、せめて攻撃方法を魔法中心に変えるとか、そういうやり方があると思うんだよ」

「確かに、古来よりファンタジーものでは、知恵のある者は魔法で戦い、体力自慢の者は剣や格闘で戦うのが定番だからね」

「そうなんだよ～。けど魔法を使って戦うと、お前は役立たずだ、なんてみんなが言うんだぜ！　オレはいったいどうすればいいんだ⁉」

「……ヤマ、どうかな？」

ケイスケは背後に立つヤマに尋ねる。地獄の裁判官は頷き、

「判決！　回復系魔法――ディア、メディア、ディアラハンと、回復系魔法を持つ仲魔を、汝のチームに独占してしまえば良い！　そうすれば、他の者たちは回復することができず、必ずや汝の魔法を必要とするだろう。その時、魔法使いとしての汝は認められるのだ！」

「な、なるほど！」

暗闇の中に一筋の光明を見出したのか、彼の瞳が輝き出した。その笑顔を見て、ケ

イスケは少しだけ微笑む。人が喜んでいる姿を見ると、彼自身も幸せになれる。

――が、その輝きはすぐに失われてしまう。

「でも考えてみたら、魔力の低いオレのステータスじゃ、ディアしかスキルセットできない……」

彼の情けない言葉に、ケイスケとヤマも沈黙する。

そして数十秒後、やっと口を開いたヤマは、再び判決を下した。

「判決！　根本的に汝の能力値は魔法に向かぬ。よって死刑！」

「え、そ、それだけで死刑⁉　ちょっと、待っ……ぎゃあああ！」

事務所の中で、裁きの火炎魔法が爆発した。





悪魔使い流サバイバル生活術「恋愛」

封鎖された山手線内部。そこには、異界の生物を使役する『悪魔使い』と呼ばれる者たちがいる。彼らは他の一般人より戦闘力などで優位に立つ一方、畏怖され、忌み嫌われる存在でもある。

そして今、その悪魔使いふたりが、密談を行っていた。

悪魔使いのひとりは、ダイモンズリーダー、カイドー。もうひとりは、四人組で人助けを行う悪魔使い集団のリーダー、主人公。

芝公園で偶然出会ったカイドーが、主人公に相談を持ちかけたのだ。

その内容とは――。

「マリ姉に男として見てもらえるには、どうやったらいいんだろうな？」

まるで思春期の気弱な男子のような相談だった。渋谷を拠点とするカリスマチームのリーダーとはとても思えない姿だ。今のカイドーを見れば、そのギャップに噴き出す者もいるかもし



れない。しかし——。

「う〜ん……」

主人公は、その相談を聞いて真面目に考えてくれていた。口数少なく、何を考えているかよく分からない男だが、彼のそういうところをカイドーは信頼している。

「オレは今まで、ずっとマリ姉から弟扱いされてるからな……」

「つまり、ちょっとやそっとじゃ、その関係は変わらないってことだね。だったら、荒療治が必要か……」

「荒療治？」

眉間にしわを寄せるカイドーに、主人公は『作戦』を説明する。

「まぁ、単純に言って真正面からの告白なんだけど、そのために色々と下準備をしておくんだ。つまり……かくかくしかじか……」

その話を聞くうち、みるみるカイドーの目が見開き、思わず尋ね返していた。

「え？　そ、そんなことして、いいのか……？」

表参道に立ち並ぶビルの陰に隠れ、カイドーはひとりの女性が通りかかるのを待つ。

「来た……」

歩道の向こうに見えたのは白衣の女性——マリだった。何かを探すようにキョロキョロと辺りを見回しながら、こちらに歩いてきている。

そしてカイドーから数メートル先に差し掛かった……。

（今だ！）

彼は主人公から提案された作戦を実行すべく、ＣＯＭＰを起動させる！

「出て来い、ケツアルカトル！」

カイドーの召還に応じ、光の柱と共に、翼の生えた白蛇が出現する。白蛇——龍王ケツアルカトルは、マリに襲いかかった。

「な、何⁉」

突然出現した悪魔に驚きの声を上げるマリ。しかし抵抗する暇もなく、彼女はケツアルカトルの長い胴体で締め上げられてしまう。

龍王種族特有スキル『龍胴絞め』である。

（よし、計画通りだ）

カイドーは作戦の第一段階が成功したことに、安堵の吐息を漏らす。主人公から提案された作戦は、まずマリをしっかりと捕まえておくべき、というものだった。告白する時、誤魔化されたり逃げられたりしないように。

『相手の行動を制限するんだったら、龍胴絞めが一番だね』と主人公は言っていた。

そして作戦は、第二段階に入る。

カイドーは再びＣＯＭＰを起動し、ジャックランタンとジャックフロストを呼び出した。

「ヒーホー！　二頭身の底力、見せてやるホ！」

「ブラザーはまだマシな方、オイラなんかマントの下は何もないから一頭身だ、キーホー！」

「どうでもいい、さっさと行け！」

出現した瞬間から騒ぎ出す妖精ふたりを、カイドーは一喝する。

「仕方ないホ。色気づいたマスターのために頑張るホ」

「ヒーホー！　付き合ってるこっちが恥ずかしくなるホ！」

勝手なことを言いながら、マリの方に向かっていくフロストとランタン。ふたりを見ながら、カイドーは取りあえず後であのふたりはボコっておこう、と心に誓った。

そしてビルの陰から出ていった妖精二体は、龍胴絞めで束縛されているマリに魔法を放つ。

「アギ！」

「ブフだホー！」

主人公が提案した作戦の第二段階は、告白前にマリをピンチに陥れることだった。

『心理学でいう吊り橋効果ってヤツだよ。危機に陥った時、人は恐怖心で感じるドキドキを恋だと思い込んでしまうんだ』とは主人公の言葉だ。

（心理学とは、説得力があるぜ！）

本当はあまり信憑性のない理論なのだが、カイドーはそんなことを知る由もなく、主人公の言葉を純粋に信じ込んでいた。

そして今や龍胴絞めで拘束され、悪魔たちによる魔法攻撃でこれ以上ないほどのピンチに陥っているであろうマリの前に、カイドーはビルの陰から颯爽と姿を現す。

一世一代の告白をするために！

「マリ姉、オレは……あんたのこと……を……」

しかし、その大告白は最後まで告げられることはなかっ



た。その時、カイドーが目にした光景があまりにも予想外だったからだ。
マリは、全然ピンチになどなっていなかった。むしろ、ピンチだったのはカイドーの仲魔たちだった。マリの足元には、ケツアルカトルとジャックフロストが、ボロボロになって横たわっている。
カイドーは開いた口がふさがらない。
そして、昏倒する悪魔たちの中央に立つマリが、ゆっくりとカイドーの方に目を向けた。
「貴様、クドラクの手下か……？　こんな低級悪魔をけしかけるとは、私も甘く見られたものだな。ならば私の力、身をもって思い知るがいい」
マリはカイドーに一歩近づく。
その目は異様に鋭く、いつもの彼女とはまるで別人だ。
（こ、こんな事態……聞いてないぞ、主人公おおおおっ！）
表参道に、ひとりの悪魔使いの絶叫が響き渡った。

その頃、芝公園では——。
「あ……」

ふと、何かを思い出したように手を打った主人公に、「どうしたの？」とユズが怪訝そうに尋ね返す。
「そういえばカイドーにひとつ、言い忘れてた。今のマリ先生、クルースニクと同化してるんだった」

《悪魔使い流サバイバル生活術心得　第四条》
悪魔の力を使って異性の気を引こうとするのはやめましょう。



行列のできる地獄法律相談所
「相談者：T・N」

ケイスケとヤマが開く相談所——今日もそこに、ひとりの迷える子羊が訪れる。

デスクを間に置き、ケイスケと向かい合って座っているのは、渋谷を中心として活動するチームのリーダー・N（プライバシー保護のため、本名は伏せさせていただきます）だ。

ケイスケを前にした彼は、言葉を発しようとして口ごもり、迷い、また話そうとして口ごもり——それを数回繰り返した後、やっと事情を語り始める。一番初めに彼が発したのは、舌打ちだった。

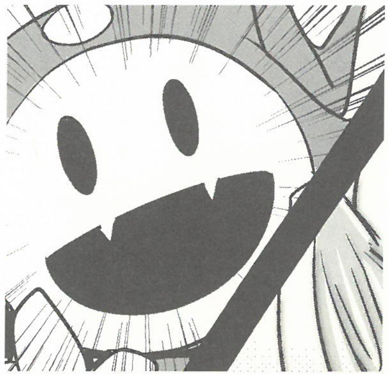
「ち、本当はこんなこと、てめえなんかに話したくねえンだけどよ。オレには、ちょっと気になってる女がいる。まぁ、そいつはオレのことをなんとも思ってねえんだけどよ」

「なるほど、つまり恋愛相談ってことでいいのかな？」

「は、はっきり言うんじゃねえ、バカ野郎！」

彼は赤くなって顔を背ける。

「それで、何かいい方法はねえかよ？　前にひとり信頼できる



やつに相談してみたんだけどよ……その方法も失敗だったんだ」

　何かよほど恐ろしいことでもあったのか、彼はぶる、と体を震わせた。

「そうだね……ヤマ、判決を頼む」

　召喚主の言葉に、地獄の裁判官は重々しく頷く。

「判決！　女人の気を引くためには、男の力を示すのが最善。よってその娘が何者かに襲われ、危機に陥っている際、汝がそれを救出すべし！」

「なるほど、その手があったか……ってできねえよ！　今のマリ姉はオレより強えンだから。この前、ボコられたばっかだし」

「……ボコられた？」

　尋ね返すケイスケに、彼は「ああ」と首を縦に振った。

　ケイスケとヤマは沈黙する。

　……そして時間が止まったような沈黙がしばらく続いた



後、再びヤマが口を開く。

「判決！　軟弱者は死刑に処す！」

「軟弱⁉　ンだとこのメガネ！　この前うやむやになってた決着、ここでつけるか、ああ⁉」

　――そして事務所内に、ふたりの悪魔使いによる火炎魔法の爆発音が響き渡った。





プログラマー列伝
「超天才プログラマー・ナオヤさん」

『プログラムに「邪教の館.exe」が追加されました』

秋葉原で手動充電機を手に入れた後、アツロウのＣＯＭＰに新機能追加のメッセージが表示された。主人公やユズのＣＯＭＰにも、同時にその機能はインストールされている。

「ナオヤって、プログラム作るの速いよね」

新機能を確かめながら、主人公が感心したように言う。悪魔召喚プログラムをはじめ、ＣＯＭＰの様々な機能はすべてナオヤが作ったものだ。起動してからまだ一日しか経っていないのに、ラプラスメール、先制発動スキル、スキルクラック、デビルオークションと、プログラムは矢継ぎ早に追加されていた。

主人公の言葉に、アツロウは自慢げに胸を張る。

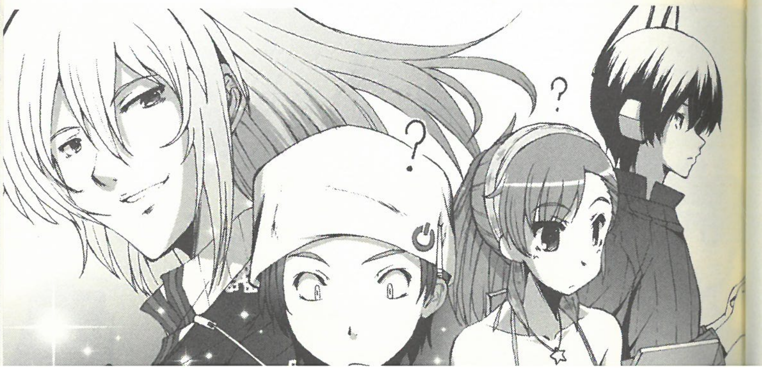
「ふふん、ナオヤさんは天才だからな。これぐらい、あの人にとっては朝飯前さ」

ナオヤを師と仰（あお）ぐアツロウとしては、彼のことを褒（ほ）められるのは誇らしい。

「というか、ナオヤさんってどこでプログラム作ってるのか

な？　ずっと家には帰っていないんでしょ？」
　ユズは首を傾げる。以前にナオヤの家を彼女たちが訪れた時、郵便受けには新聞が溜まり、ナオヤは長く留守にしているらしかった。
「……ネット喫茶とかじゃない？」
　COMPの新たな機能を確かめながら主人公がつぶやいたことに、アツロウは少し想像を働かせてみる――。
　緑のマントを翻す長身の男が、ゲタの足音をカランコロンと響かせながら、薄暗いネット喫茶の中を闊歩する。悪魔を召喚したり合体させたりする奇妙なプログラムを作る一方で、『ドリンクがフリーじゃないだと？　今時、ネット喫茶でそんなことが許されるのか？』と舌打ちする……。
（なんか、ありえそうだ……）
　アツロウは嫌な想像を振り払う。
　と、その時COMPを弄っていた主人公が声をあげた。
「あ、また新しい機能が追加されたみたいだよ」
「え？　もう？」
　本当に速いな、と思いつつ、アツロウも自分のCOMPの画面を覗き込む。未読の

システムメールが一件、と表示されていた。
　アツロウはメールを開く。
『プログラムに「ナオヤんの目覚ましボイス」が追加されました』
「……ナオヤん？」
　そこに現れた言葉に、アツロウは眉をひそめる。
（これ、ナオヤさんのことだよな？）
　疑問に思ったのはアツロウだけではないらしく、横にいたユズも「何これ？」と呟く。しかし、主人公は特に驚いている様子もない。
（主人公って、本当に感情の動きが見えないよな。何が起こっても動じないし）
　考えが読めないという点では、ナオヤさんと似てるかもしれないな――そんなことを思いながら、アツロウは試し



に『ナオヤんの目覚ましボイス』なるものを起動してみた。
　COMPから、ナオヤの声が流れ始める……。
『主人公、朝だぞ、起きろ。今日からお前は魔王になるんだ』
『今日の朝ご飯は、お前の大好きな卵焼きだ。外側はふわふわ、中はちょっとだけトロトロ、砂糖多めで甘～くしておいたからな。それを食べたら、魔王になるんだぞ』
『主人公、まだ起きないのか。まったく、仕方ないやつだな。そんなに魔王になるのが嫌なのか。だったら、オ・シ・オ・キだ……』
　ガシャン！
「!?」
　突然横から響いた音に、アツロウは振り向く。
　主人公の足元に、COMPが落ちていた。しかもさっきの音は、ただ落としたというより、叩きつけたような音だ



った。
「ど、どうしたの、主人公？」
　心配そうに顔をのぞきこむユズに、主人公は首を横に振りながら答える。
「ふふ、大丈夫だよ、ユズ。昔、ナオヤがうちに居候してた時のことを思い出してさ」
　かなりひきつった笑いだった。全然、大丈夫そうに見えない。
（いったい、ナオヤさんと暮らしてた時に何があったんだ……）
　しかし、なんだか踏み込んではいけない気がして、アツロウはそれ以上深く聞けなかった。その瞬間、アツロウのCOMPから電子音が鳴る。画面を見てみると、また機能の追加が通知されていた。
『プログラムに「ナオヤんの気まぐれ☆ダイアリー」が追加されました』
「気まぐれ☆？」
　なんで『☆』なんだ……アツロウは微妙な気分になったが、とりあえず新機能のヘルプ画面を見てみる。
　その説明によると、これはナオヤの日記を表示する機能らしい。

（日記……！）
　ＣＯＭＰを握るアツロウの手に力が入る。ナオヤの日記を読めば、悪魔召喚プログラムの仕組みがもっとよく分かるかもしれない。そうなれば、アツロウが密かに目指している、悪魔の完全制御へと近づけるはずだ！
　早速、プログラムを起動させた。ＣＯＭＰの画面に、日付とその日に起こった出来事の記録が表示されていく……。
「○月×日。今日も翔門会の奴らがすごくウザかった。パソコンでゲームしてたら、ゲームは一日一時間とか言いやがって。あんまりムカついたから散歩に出ると、主人公の姿を見かけた。今日もあいつはお気に入りのヘッドフォンをつけていた。似合ってるぞ、主人公」
「○月×日。今日は曇り。曇りの日は気分が落ち込むな。気晴らしに散歩に出かけたら、主人公の姿を見かけた。ちょっとだけ元気がわいてきた。よ～し、今日も頑張ってプログラムを組んじゃうぞ（はぁと）。あいつが立派な魔王になれるように」
「○月×日。最近、主人公が決まった時間に通りかかる道に気づいた。たぶん、学校の下校時間なんだろう。そうだ、これからは毎日この時間に散歩をして、あいつがちゃんと学校に通ってるかどうか見守ろう。そういえば昔、あいつが学校に行くのが心配で、俺はいつもこっそり尾行して……」

　ガシャン！
「!?」
　また横から響いた音に、アツロウは振り向く。主人公の足元に、再びＣＯＭＰが落ちていた。
「しゅ、主人公？」
　不安げなユズに、主人公はあからさまな作り笑いを返す。
「ふ、ふふ。き、気にしないでユズ。また昔のことを、思い出しただけだから……」
　そしてゆっくりと、叩きつけたＣＯＭＰを再び拾い上げる。その顔は青ざめ、手は小刻みに震えていた。これほど動揺している主人公を見るのはアツロウもユズも初めてだった。
（だから、ナオヤさんと何があったんだよ、お前……！）
　アツロウとして気になる。すごく気になる。だが尋ねるのはなんとなく怖い！
　葛藤していると、三度、電子音が鳴った。
「また機能が追加された？　いくらなんでも、プログラム作るの、早すぎだろ……」

画面を見てみる――。

『プログラムに「ときめき♪スイーツラブ」の機能が追加されました』

「と、ときめき？」

ヘルプには、「スイーツのように甘～い恋愛アドベンチャーを楽しめるぞ☆」と書かれている。同じく画面を覗き込んでいる主人公とユズは、頭に疑問符を浮かべている。アツロウは恋愛アドベンチャーと言えばどんなゲームかすぐに分かるのだが、主人公たちはピンと来ていないようだ。

取りあえず、起動してみる。

「アツロウ。これってどうなってるの？」

「プログラムの使い方が分からないんだけど」

ユズと主人公がアツロウのＣＯＭＰを覗き込んでくる。

そしてオープニングのシーンが始まった。

ユズ「ほ～ら。起きなさいよ」

バサァ！

今日も妹のユズに布団をはがされて、オレの安眠は空の彼方だ。

主人公「まったく、ユズは乱暴だなぁ」

ユズ「兄さんが起きないのが悪いんでしょ」

「い、妹!?　なんで!?」

言葉と同時に放たれたユズのパンチが、アツロウの鳩尾（みぞおち）を打つ！

「ぐが……っ!?　お、オレに聞くな……」

（というかソデコお前、いつの間に『渾身の一撃』なんか覚えやがった……いや、今のはむしろ『絶妙打』か……？）

ユズの戦闘スタイルが魔法中心というのは、絶対にウソだとアツロウは思った。それぐらい強烈な一撃だった。

「と、とにかく……続きを、プレーしてみようぜ……」

急所への一撃で遠ざかりそうになった意識を根性でつな





ぎ留め、アツロウはCOMPの操作を再開する。もしかしたらこのゲームの先に、ナオヤからのメッセージがあるかもしれない。ならば、プレーしなければ……。

主人公「やばい！　このままじゃ遅刻だ！」
ユズ「兄さんがいつまでもグズグズしてるから！」
オレとユズは通学路を走る。
ガツン！　痛！　曲がり角で誰かにぶつかってしまった。
アマネ「あなたは……」
ぶつかった相手は、昨日オレと同じクラスに転入してきたアマネだ。
オレは、ぶつかった拍子にアマネを押し倒し、その胸に手を触れてしまっていた。
アマネ「……」
アマネの頬がうっすらと赤らむ。恥ずかしそうだった。
主人公「ご、ごめん……」
アマネ「悪いと思うならば、救世主になりなさい」
「何、その唐突な理論！」

思わずアツロウはツッコんでいた。しかし、ツッコミなどしている場合ではなかった。アツロウの背後には凄まじい怒気があったのだから。

「なんで、主人公がアマネといい雰囲気になってるのよ～！」

「お、オレは知らない！　作ったのはナオヤさんで……ほ、炎の乱舞はやめろって！　熱、熱いっ！」

ユズが魔力で作り出した炎が、アツロウの体を焼く。前言撤回、やっぱりユズは魔法戦タイプだと思うアツロウだった。

主人公「ふぅ、なんとか間に合った」

ユズ「ぎりぎりだったね……」

オレとユズは閉まる直前だった校門をくぐり、校舎の中に入った。

そこで、生徒会長のナオヤに出会う。

ナオヤ「まったく、今日も遅刻か、主人公。ほら、ネクタイが曲がってるぞ」

ナオヤが急に近づいて、俺の制服のネクタイを正してきた。唐突な接近に、思わず俺はドキリとしてしまう。

「ここでナオヤさん、登場⁉」

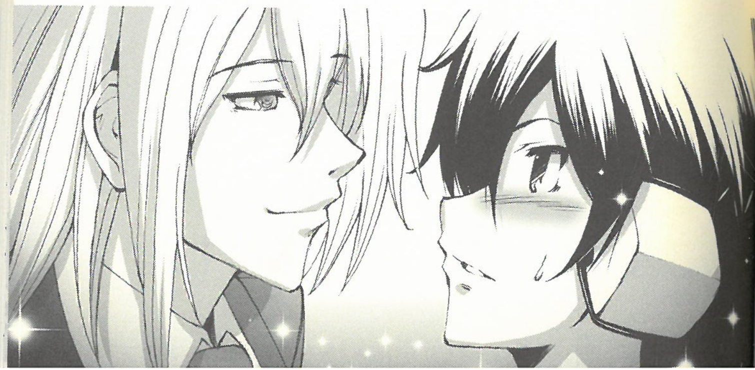
なんだかさっきから自分がツッコミキャラっぽくなっているのはアツロウも自覚しているが、それでもこの展開はツッコまずにはいられない。

（しかもなんで攻略対象キャラっぽい登場なんだよ、ナオヤさん⁉）

しかし、この展開の異常性はオタク知識に疎い主人公とユズには分からないのか、ふたりは「あ、ナオヤだ」「へ～」とほぼスルーしていた。

ネクタイを結び直してくれたナオヤは、オレに微笑みを向けてくる。

ナオヤ「お前はいつまで経っても、俺がいないとダメだな。そんなことでは、立派な魔王になれんぞ。よし、今日からじっくり、魔王になるための個人レッスンを俺が直々に施してやろう」



——ガシャン！

主人公がアツロウのＣＯＭＰを、突然はたき落とした。

「オレのＣＯＭＰがぁっ⁉」

「ご、ごめん、アツロウ。ものすごい悪寒がして……」

どうやらほとんど反射的な行動だったようだ。主人公は頭を下げ、アツロウのＣＯＭＰを拾う。

そしてどう考えても使えない機能を大量に追加されたＣＯＭＰを見て、ユズはポツリとつぶやいた。

「というか……ナオヤさんってもしかして、暇なの？」



悪魔使い流サバイバル生活術「お風呂」

封鎖された山手線内部。そこには、異界の生物を使役する『悪魔使い』と呼ばれる者たちがいる。彼らは異界の力を利用する一方、普段は食事をし、睡眠をとり、人間とまったく変わらない生活を送っている。

そして今、四人の悪魔使いが、芝公園で車座になって話し合っていた。

「私たち、いい加減にヒトとしてダメだと思うの」

真っ先に言い出したのは、ユズだった。その顔はひどく真剣で、どこか思いつめているように見える。

「は？　いきなり何言ってんだよ？」

アツロウには、ユズの言葉の意味がわからない。ヒトとしてダメ、というほどダメなことをした覚えはないのだが。

「だって、もう何日間お風呂に入ってないと思ってるのよ！　服とか体とか汗臭いし……これってもう人間失格、というか公害よ！」

乙女には一日だってお風呂は欠かせないの！　とユズは拳を

握り締めて訴える。

「……別にそんなに汗臭くないよ？」

主人公はユズの肩に顔を近づけ、ニコリと笑う。

「ば、バカ！」

ユズは顔を赤くして、主人公からズザ、と座ったまま遠ざかる。主人公は、なぜユズがそんなに過剰に反応するのか分からず、キョトンとしていた。

（今の、オレがやったら多分殴られるぐらいじゃ済まないんだろうなぁ……）

最近、アツロウは主人公と自分の扱いに理不尽なほどの差を感じていた。

「だいたい、あんたたちもこんな炎天下でずっとお風呂に入らないと、汗臭くなるわよ！　ミドリちゃんもそう思うでしょ⁉」

「アタシは慣れてるから、あんまり気にならないかな……夏コミの会場に比べたら」

「……」

コスプレイヤーの生き様を見せつけられ、ユズが一瞬黙り込む。が、すぐに気を取り直して言葉を続けた。

「と、とにかく！　お風呂に入るのは衛生的にも必要だと思うのよ！」

「けど、風呂に入るってどうするんだよ？」

アツロウは公園全体を一瞥する。男だったら水道や池や川で洗うという手もあるのだが、女子にそれは無理だろう。かといって、このあたりの銭湯はもうすべて営業していなかった。

ユズは重々しく頷き――。

「……そこで、いくつか案を考えてみたんだけど」

「ヒホ？　バトルじゃないのに、どうして呼び出されたホ？」

ジャックフロストは唐突に呼び出され、首を傾げる。

ユズが考えた方法のひとつというのが、ブフをシャワー代わりにすればいいのではないか、ということだった。

「いや、死ぬって、本当に」

無理無理と、手を横に振るアツロウに、ユズは自信満々に応える。

「大丈夫よ。今のアタシ、氷結無効のスキルをセットしてるから」

「そんな問題なのか……。主人公も何か言ってやってくれよ」

しかし主人公は特に気にした様子もなく、「氷結無効をつけてるんだったら、大丈夫じゃない？」と答える。

「そういうわけで、ブフをお願い、ジャックフロスト！」
ユズの指示に、ジャックフロストは「本当にいいのかホ～？」と心配しながらも、氷結魔法を放つ。氷粒混じりの吹雪が、ユズの全身に浴びせかけられる。
……一分経過……二分経過。
ユズの体が、吹雪の中に埋まっていく。
……三分経過……四分経過。
完全にユズは雪だるまと化した。
「そ、そろそろ止めた方がいいんじゃないか、ジャックフロスト……？」
いい加減、心配になってきたアツロウは、ジャックフロストを止める。「ヒホ？」と首を傾げながら、雪の悪魔は吹雪の魔法を中断した。
そしてユズは、ボコリと雪だるまを壊して中から出てくる。氷結無効はきちんと機能していたらしく、ユズにダメージを受けている様子はない。しかし、シャワーを浴びた



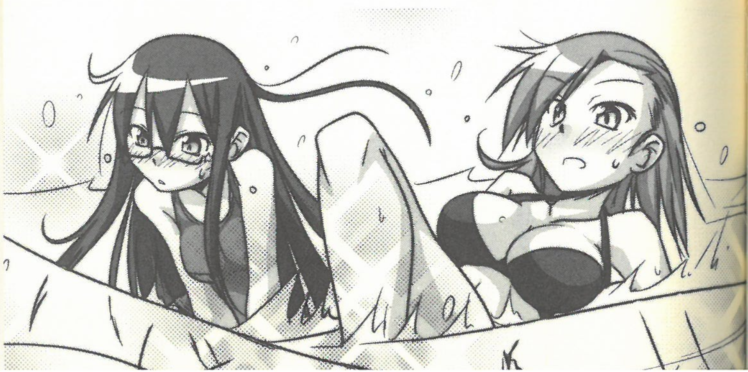
後のようなさっぱり感も全然ない。彼女は重大な失敗に気づいたように手と膝を地面についた。
「そういえば氷と雪は水じゃないから、シャワーの代わりになるわけないのよね……」
「ソノヨウナ目的ノタメニ、ワタシヲ使ウ者ハ初メテダ」
敵となる悪魔が出現したわけでもないのに呼び出されたアクアンズは、困惑したような顔を召喚主であるユズに向ける。精霊も困惑することがあるんだ……とアツロウはちょっと意外だった。
アクアンズが呼び出されたのは、ユズの作戦その二のためだった。
ユズ曰く『アクアンズの体って、水でできてるのよね？　だったら、水風呂代わりになるんじゃない？　というわけで、アクアンズ風呂を試してみようと思うの』。
「でもさ、それってつまり、アクアンズの中に生まれたままの姿で入っていくというわけで……ぐはっ⁉」
「卑猥な言い方するな、このアホロウ！」
アツロウの言葉は、ユズの鉄拳により途中で遮られる。
「とにかく！　試してみるから、男は絶対に覗かないこと！　ほら、ミドリちゃんも

一緒に入りましょ」
ユズはミドリとアクアンズを引き連れて公園の茂みの奥に入っていき、アツロウと主人公はその外で背中を向けて待たされることになる。
アツロウの背中から、「わ、ユズさんの胸、大きい～」とか、「ミドリちゃんの方こそ、プロポーションいいよね～」という声が聞こえてくる。
ユズのワガママな胸についてはアツロウも充分知っているし、コスプレアイドル・ドリーのスタイルも気になる。
(にしても、女子って集まると無防備な会話するよなぁ……)
お互いの体のことを観察して言い合うなんて、誘ってるとしかアツロウには思えない。むしろここは男として振り返るべきなんじゃないだろうか、という気さえする。
しかし、見てしまったらユズからいったいどんな制裁を食らうか……想像するだけでアツロウは背筋が震えた。きっとパンチぐらいじゃ済まないだろう――万魔の乱舞くらいは覚悟しなければなるまい。
(それは嫌だ――けど、しかし、しかし!)
心の中で苦悶しながら、ちらりとアツロウは横を見てみる。主人公はどうだろう? 何に対しても動じないこいつでも、さすがにこの状況ではそわそわしてるんじゃないかと思ったが……。

「ん? どうしたの、アツロウ?」
主人公は全然気にしていないようだった。普段とまったく変わらない、柔和なさわやかスマイルを浮かべる。
(魔王候補ともなると、やっぱり人と違うのか……?)
チャプ、バシャ、という、水に浸かる音がふたり分、背後からアツロウの耳に届いた。どうやらユズとミドリが、アクアンズ風呂に入ったらしい。
アツロウの耳は、否応なしに背後から聞こえる音に集中してしまう。
「冷たくて気持ちいい～」とユズの声。
「夏だからお湯じゃなくても大丈夫だね」とミドリ。
「うんうん」とユズが頷く。
「……覗く」アツロウはポツリと呟く、
「覗くべきだ、オレたちは」
「え? 何を?」
主人公は、唐突で意味不明なアツロウの言葉にきょとんとする。そんな友人に、ア

ツロウはギラリと光る目を向け、声を潜めながらも強い口調で答えた。
「何をって、あのふたりを、に決まってるだろうが！　ここで覗かないのは、やっぱり男として間違ってる！」
「でも、ユズもミドリちゃんも怒るよ」
　主人公は、なんで人を怒らせてまでそんなことをするのかわからない、といった様子だ。決死の覚悟のアツロウとは、天地ほどの温度差だった。そしてそんなふたりの後ろでは、「夏はやっぱり水風呂よね」「さっぱりするよ～」と女子ふたりの声。
「ちょっとの危険ぐらいで踏み留まってたら、何もできないだろ！　炎の乱舞で焼かれようと、万魔の乱舞でボロボロにされようと、オレは覗く！　覗くぞ！　主人公も一緒に来い！」
「ちょ、ちょっと、アツロウ？」
　アツロウは完全に困惑顔の主人公を引っ張りながら、一緒に茂みの中に身を隠した。間近からユズとミドリの声が聞こえて来る。
（ターゲットまでの距離はおよそ五メートル……下手な動きをしたら感づかれるぜ）
　アツロウは額の汗を拭い、ごくりと喉を鳴らせて、茂みの隙間から覗き込む。そこには一糸まとわぬ姿で風呂（？）に浸かる少女たちの姿があるはず。

　しかし……そこに広がっていたのは、まったく予想外な光景だった。
「なんで……なんで水着なんだよ、お前らはぁっ！」
　隠れていることも忘れてアツロウは立ち上がり、そこにいるユズとミドリを指さす。ユズとミドリは学校指定の水着……いわゆるスク水を着ていた。今の自分だったら、怒りでヤマやパズスよりも上級の悪魔だって呼び出せそうだった。
「水着なんて持ってきてたのかよ!?」
　東京封鎖は突然だったから、そんなものを用意していたはずがないのだが……。
「これ、さっきアキバに行った時、コスプレ店で買ってきたものだよ」
　ミドリがけろりとして答える。
「あぁ、そういうこと——って、普通、風呂に入るんだったら裸だろ！　水着なんて邪道だ！」



「うるさいわね……。っていうか……」
ユズが拳をぷるぷると震わせている。
「あ――」
アツロウは直感的に命の危険を感じた。興奮し過ぎて、自分が隠れているということを忘れていた……。
「何、覗いてんのよ、このアホロウはあぁぁっ！」
「熱ぅあああああっ⁉」
ユズからの制裁は万魔の乱舞ではなく炎の乱舞だったが――火炎激化スキルで威力は一・五倍になっていた。ちなみに、主人公はまったくお咎めなしだった。

《悪魔使い流サバイバル生活術　心得第五条》
悪魔の身体は特殊な元素で形成されています。例えば身体の一部が水のようになっていても、それを入浴などの目的に使うのは控えましょう。用法の誤りにより誰かが被害を負っても、責任は負いかねます。



「デカラビア東京に現る」

その日の夜、主人公一行はとあるレンタルビデオ屋に宿を借りることになった。
店番をしている店主は私室で休むが、夜の間だけ、商品が置いてあるフロアを自由に使っていいと言ってくれたのだ。
「この非常事態だからな、ＤＶＤなんて借りに来る客なんていやしない。というより、世の中が物騒だからずっと店は閉めてるんだ――君たちな、もしよかったらＤＶＤでもビデオでも自由に持ってきて観ていいよ。店内のテレビに映るようになってるから」
言い残して、親切な店主は奥に引っ込んでしまった。
幸い、この店には自家発電装置があるので、少々の電化製品なら使えるようだった。
「あー。俺はもう少し食いモンを捜してくるわ」
カイドーには腹が減ったということで外に出ていく。悪魔使いだから危険はないだろうが、夜に出歩くのは勧められることではない。

食糧はここに来る前にいちおう調達しては来たが、充分とは言えなかった。

主人公も食糧捜しに続こうとするが、カイドーに押しとどめられる。

「待ってな、子供の出る幕じゃねえ。まだスナック菓子とかカップ麺もあるだろ？　お前らはそこにある手持ちの食いモンで間に合わせてろ。数時間で戻る」

カイドーも未成年ではあるのだが、高校生である主人公よりはよほど世間を知っている。

「……わかった。俺が保護者としてこいつらの面倒を見よう」

そう言って送り出したのはジンである。カイドーは一時的に合流しただけだが、ジンは違う。主人公らと行動をともにすると約束したメンバーのひとりだ。

——その後、適当に夕食を取ると、昼間の疲れが出てきて、眠そうな顔で座り込む者も多くなった。

主人公とユズは店内のソファ、持ち込んだ毛布や寝袋に潜り込んでいく。いちばん元気があるのはアツロウで、熱心に棚を見て、興味のある映像作品をピックアップしていた。

「アツロウ、夜更かしはダメだぞ。明日も早いんだろう？」

ジンの言葉にアツロウは答える。

「わかってるけどさ、今夜はここに置いてあるの、どれもタダで観ていいんだろ？　せっかくだから何か見ようぜ」

「だったら、これなんかどう？　ちょっと前に話題になったロマンス映画☆」

少し仮眠をとって、目が冴えたらしい。ユズも乗り気になりＤＶＤのパッケージを持ち出してくる。

彼女は周囲の反応も聞かないうちにデッキでソフトを再生し始めた。

「これ、見たかったんだよねー♪」

「ま、夜は長いしな、最初はソデコに譲るか……次はこっちのアニメを見せてもらうぜ。なあ主人公、お前もこれ見たがってただろ？」

アツロウはデッキの横に数枚のパッケージを積む。彼らが子供のころに流行っていた、ちょっと古いＴＶアニメだった。

その間、主人公はずっとソファに座ったままで、成り行きに任せていた。今日もよく歩いたので、いささか疲れ気味だ。加えて昨夜は悪魔合体の組み合わせを遅くまで研究していたため、また睡魔が襲ってきている。

「なんだ、主人公、眠いんだったらあっちに寝床が用意してあるぞ」

ジンが言葉をかけてはくれるが、彼は頭を振って眠気を振り払った。アツロウが言

うように、今夜は映画やアニメを見放題なのだ。もう少し起きていたかった。ユズお気に入りの洋画の後で流されるはずのアニメは主人公も見たいと思っていたのだ。

――だが。

「……ん？」

「……すぅ、すぅ……」

「しょうがない奴だな。五分と経たずに眠ってしまうとは」

ソファで眠りこける主人公の肩に、ジンは毛布を掛けてやった。

いちいち起こして寝床に追いやることもないだろう。店内だから、人が横になれる場所は限られている。誰か数人はソファで寝なければならないのだ。

「……ん？」

主人公が目覚めたのは深夜だった。数本だけついていた店内の灯りは消され、今は非常灯だけが闇に輝いている――。

みんなはもう眠ってしまったのだろうか。しかし光が彼の顔を照らした。誰かの声も聞こえる。

「？」

ＴＶ画面はまだ映像を流していた。それは古い邦画か記録映像のように見えた。

「デカラビア……？」

いまＴＶの中では、ヒトデ型の胴体にひとつ目という奇怪な生物が何体か蠢いている。身振りとともに画面に日本語の字幕が流れていた。

〝人間たちが滅ぶのを見ているわけにはいかない〟

〝新天体Ｒが地球に接近している。破壊しなければ！〟

「これはいったいどういうことなんだ？　デカラビアの映画なんてあるのか？　それとも映画じゃないのかな」

朝のうちに悪魔合体で仲魔にしたデカラビアは、主人公のお気に入りの悪魔だった。今日の戦いでよく活躍してくれた。その特徴的な姿は印象深いものがある。

「ああ、主人公、起きたのか……これな、昭和の時代の映像なんだが」

不意にジンが話しかけてきた。そばのテーブルには汗をかいたグラスが置いてある。中身は薄い琥珀（こはく）色だった。

ジンの表情はよくわからない。

それと、あたりを見回せば他のメンバー――アツロウとユズもそばにいて、それぞれソファで眠りこけていた。たぶん、主人公と同じように映画を見ていてそのまま眠ってしまったのだろう。無邪気な寝顔だった。

「昭和の時代？　そのころ、デカラビアを召喚する人がいたってことですか？」

本来は魔法陣や呪文など複雑な手順で呼び出されるのが悪魔だ。ＣＯＭＰを使わずとも過去の時代にも悪魔使いはいたはずだ。

「うーん、ちょっと違う。デカラビアは西洋の悪魔と思われているが、実は一九五六年に来日していたんだよ」

「な、なんだってー⁉」

思わず上げた大声に、アツロウとユズもビクッと目覚める。

「そんな昔に……僕らが生まれるずっと前の話だな」

「なんだ、どうした⁉　敵か悪魔か⁉」

「デカラビアは堕天使の一種に分類されているが、その正体は実は……」

薄暗がりの中でジンは続けた。

「パ○ラ星からやってきた宇宙人なんだ。今流れてるのは人類とのファーストコンタクト時の記録をもとに制作された映像なんだ」

「「「な、なんだってー⁉」」」

今度は主人公の他にアツロウとユズも驚愕の声を上げた。

ＴＶには、ヒトデ型の生物を見て怖れ逃げまどう人々が映っている。

「パ○ラ星人は友好的だったが、その姿があまりに不気味なので、当時の人々は侵略者だと勘違いしたらしい」

「それはそうだろうね。宇宙人でも悪魔でも、こんな姿でいきなり現れたんでは、世間の人たちと解り合うのは難しかったはずだ」

ジンは熱っぽく語る。

「ちょうどそのころ、日本では原爆以上の破壊力をもたらす超元素の研究が行われていたんだ。それによって地球を破壊しかねないくらい危険な爆弾ができた」

パ○ラ星人たちはその爆弾を持っていることがいかに危険かを訴え、また偶然、地球を目指して突っ込んでくる小惑星の存在のことも人類に伝えた。

地球人より優れた文化と知性を持つ彼らは、友好関係を結ぶために忠告と警告を与えにやってきたのだ。

「それでどうなったんですジンさん？　その小惑星が地球にぶつかったら人類は⁉」

「そう、小惑星が衝突すれば大惨事になるはずだった。でもデカラビア――パ○ラ星人のおかげで救われたんだ。見ていなよ」

ストーリー仕立ての映像は、美女に化けたパ○ラ星人と科学者の会話のシーンに移っていた。

「彼らはね、人類には不要で危険すぎる超元素爆弾をミサイルに詰めて、接近する小惑星にぶつけたんだ」

ジンの言うとおり、小惑星は粉みじんになり、ピンチは免れた。そして科学者の一部がパ○ラ星人との意思疎通に成功した。こうして超元素の研究も放棄され、二重の意味で地球は救われたのだった。

「そうだったんだ……デカラビアは実は友好的な宇宙人なのか……でも、そんなことまったく知らなかったよ」

「結局、その珍妙な姿が災いして、パ○ラ星人は世界のほとんどの人々に理解されなかった。それで悪魔に身をやつして人類を見守ってくれているのさ」

悪魔合体で入った仲魔だけど、宇宙人なのかぁ、と納得する主人公。寝起きで頭が働かないせいか、ひどくすんなりと入ってしまった。

「ありがとうデカラビア、いやパ○ラ星人……そうか、オレたちは宇宙の孤児なんかじゃないんだ。地球人よりずっと進んだ科学や文化を持った宇宙人は確かにいるんだ！」

「そして彼らは人類と友好関係を結んでくれたのね！」

テンションが上がってきた主人公につられ、ユズも興奮している。

「こうしちゃいられないぞ！　パ○ラ星とコンタクトをしよう。今の人類は相手を姿形で判断するなんて失礼なことはしない。悪魔ともうまくやれてるじゃないか」

アツロウは鼻息も荒く叫び、走り出した。

「よし、いくぞユズ！」

「ええ、主人公、アツロウ！　ああ……あの満天の星のどれかがパ○ラ星なのね！」

三人は熱に浮かされたかのように駆けていき、レンタルビデオ屋を飛び出す。ジンが制止する間もなかった。

「おい、お前ら……待てよ。俺の話はジョークで……それにこの映画は……」

いったい三人はどこに向かって駆けていったのだろうか。

大いなる宇宙へのロマンに想いを馳せているのはいいが、ＣＯＭＰの中にいるデカラビアは放っておいていいのだろうか？　明日もまた山手線封鎖地域内での戦いが待っているのだが……。

あの主人公たちを止められる者は誰もいない。きっと、頭が冷えれば帰ってくるだろう。

「まいったな……勢いで言った冗談だったんだが。これは古い特撮映画で、偶然デカラビアとパ○ラ星人がそっくりなだけってオチなんだけどな……」

　グラスの中で溶けた氷がカランと音を立てる。
　デカラビアが宇宙人というのは、ジンの作り話だった。デカラビアは五芒星の悪魔で、宇宙人とは何の関係もない。
「それにしても、あいつら熱いな……まったく若さがうらやましいよ」



悪魔使い流サバイバル生活術「発電」

　山手線内には、人外の存在『悪魔』を使役する『悪魔使い』なるものが存在する。
　彼らの中には、大っぴらに自らの能力を誇示して他者を支配しようとする者もいれば、その力を隠し、一般人の中に溶け込んで暮らす者もいる。
　今、後者の悪魔使い四人が芝公園に集まり、車座になっていた。ユズとミドリは、アクアンズ風呂からあがったばかりだ。
「髪を乾かしたいよ～」
　ミドリはタオルで髪を拭きながら言う。ロングヘアーのため、濡れたままでいるのが気になるのだろう。「私も……」とユズも同意する。
「ドライヤーだったら持ってるんだけど」
　コスプレ道具を詰めたバッグから、ミドリはドライヤーを取り出す。
「けど、電気がないよな……」
　アツロウは、自分たちの持っている唯一の電力源である手動

の発電機を見ながらため息をつく。ドライヤーを動かすには、さすがにこれでは役不足だろう。かといって、ジオを電気代わりに使うのは無理だと既に証明済みだ。
　そう思っていたが……。
「困っているようだな」
　聞き慣れた声がして、四人が一斉に振り返る。そこにいたのは主人公の従兄であるナオヤだった。
「そんなこともあろうかと、これを用意した」
　ナオヤの背後にあったのは……足こぎ式の発電機だ。
（ど、どこでこんなものを手に入れたんですか、ナオヤさん……）
　アツロウは引きつった笑いを浮かべる。ナオヤのことは尊敬しているが、本当によく理解できない人物である。
「俺はいつでもお前を見守り、お前が魔王になるのを待っているからな、主人公」
　はっはっは、と笑いながら、発電機を置いて去っていくナオヤ。その姿を見て、主人公が顔を青くして体を震わせる。
　……やはり、何かトラウマでもあるのだろうか。
「で、発電機は手に入ったわけだけど……誰がやるんだ、これ」

　アツロウはその場にいる他の三人を見回していく。すると、全員と目が合ってしまった。
　――すなわち、三人ともアツロウの方を見ていた。
「え？　つまり……オレがやるってこと？」
　三人とも、頷いた。

　ブォ～とドライヤーで髪を乾かしながら、ユズは扇風機の風を受けて「はぁ、涼し～」と声を漏らす。そしてミドリが眺めているポータブルＤＶＤプレイヤーからは、必殺技の名前を叫ぶかわいらしいアニメ声が聞こえていた。
　その一方、アツロウが汗だくになりながら発電機のペダルをこいでいる。
「お、お前ら……はぁ、はぁ……なんか、増えてるぞ！　ドライヤー以外のものまで……勝手に使いやがって！」
　発電器はいくつもの電化製品につながれ、使用電気量は大幅に増えていた。
「はぁ、はぁ……疲れた……オレだけじゃなくて、主人公にもやらせろよ！」
　アツロウはペダルをこぎつつ、主人公を指さした。しかしミドリとユズは顔を見合わせ、首を横に振る。

「……主人公にそんなことをさせるのは……」
「……うん、それはちょっと」
「お、オレならいいのかよおおぉぉ――――！」
アツロウの絶叫が、日の暮れ始めた公園に響き渡る。
「大丈夫だよ、アツロウ。疲れたらピクシーがディアで回復してくれるから」
にっこりと微笑む主人公に、アツロウはこの世界の理不尽さを感じていた。
（そういう問題じゃねえ――――っ！）

そして――。
アツロウは疲れたらディアで無理やり回復させられ、再びペダルをこぎ、また疲れたら回復させられ……一晩中ペダルをこぎ続けた。そして止むことなく繰り返された筋肉疲労と超回復の末――。
膨れ上がった筋肉。
二倍以上に巨大化した体格。
……一夜明けた頃、彼はそびえ立つような巨漢の筋肉男になっていた。
「オレは……肉体派を脱却したいと言ってるのに……！」

《悪魔使い流サバイバル生活術　心得第六条》
悪魔が使う回復魔法は、疲労回復のほか、筋力トレーニングにも有用です。ただし、過剰な使用には注意が必要です。



行列のできる地獄法律相談所「相談者：S」

ここはケイスケとヤマが、ズバッと人の悩みを解決する悩み相談事務所。

今日の来訪者は、四人組の悪魔使いのリーダー的存在・S（プライバシー保護のため、本名は伏せさせていただきます）だった。

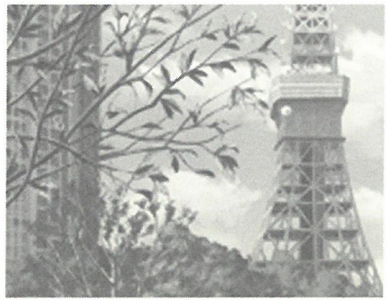
彼は、とても悩みがあるとは思えない涼しげな表情を浮かべている。

「今日はどうなさいました？」

ケイスケの言葉に、主人公はにこりと爽やかに微笑み、自らの悩みを話す。

「ずっとヘッドフォンをつけてるから……汗で耳がかぶれちゃって……」

「……」



八月中旬の猛暑の中、四六時中ヘッドフォンをつけっ放しの少年の悩みに、ケイスケとヤマは言葉を失って沈黙する。
ふたりとも、顔が引きつっていた。
やがてヤマが口を開き、至極当然の答えをつきつける。
「判決！　外せ！」





悪魔使い流サバイバル生活術「食料」

封鎖された山手線。その区域の中には悪魔と呼ばれる異常な存在が発生し、悪魔を使役する『悪魔使い』と呼ばれる者が活動している。
しかし、『悪魔使い』といえども人間であることには変わりなく、夜になれば睡眠を取り、腹が減れば食事をするのである。
そして今、四人の悪魔使いが芝公園に車座になっていた。
「腹減ったな。そろそろ昼飯にしないか？」
アツロウの提案に、主人公、ミドリ、ユズも同意する。
現在、山手線内に閉じこめられた人々の食糧は、ほぼすべて政府からの配給に頼っている。
「食べ物、誰が持ってるんだ？」
アツロウの言葉に、ユズとミドリは首を横に振り、主人公を見る。
「うん、オレが持ってたけど……」
主人公は首を横に振り、
「お腹を空かせた子供を連れた家族がいたから、その人たちに

あげちゃった」

天使のような笑顔を浮かべる。まるで、とてもいいことをしたと言わんばかりに。

……。

主人公以外の三人が、一斉に口をつぐんでいた。

いや、確かにいいことだ。

道徳的に、人道的に、あらゆる意味でいいことと言える。子供や老人などに優しくするのは。しかし——。

「全部あげたら、オレたちの食べる分がなくなるだろおおお——————！」

思わずアツロウは、渾身の一撃で主人公を吹っ飛ばす！

「な、なんてことをするのよ、アホロウ！」

「そうだよ！　主人公さんはいいことをしたんだよ！」

が、女子ふたりは地面に倒れる主人公を抱きかかえ、アツロウを睨み付ける。

「え？　今の、オレが悪いの⁉」

「当たり前でしょ！」

「主人公さんは悪くないよ！」

（いや、さっきお前らも主人公のこと睨んでただろ——……）

やっぱり扱いの差を感じるアツロウだった。

「とにかく食糧をなんとかしないと、ベルの王とか封鎖解除とか言う前にのたれ死にだ！」

アツロウの言葉に、主人公たちは考え込む。しかし停電状態では、店で販売されていたほとんどの食べ物が暑さで傷み、わずかな携帯食は既に人々によってほぼ食べ尽くされていた。

（配給以外に、食糧を手に入れることなんてできないよなぁ……）

空腹による腹痛を感じながら、アツロウがそんなことを思っていると、主人公がひとり言のようにつぶやいた。

「悪魔って、食べられないかな」

……三人とも、一瞬言葉を失った。

「ま、まさか、ねえ？」と、他のふたりを窺うようにユズ。

「そうだよ、主人公さん。いくらなんでも悪魔を食べるなんて……」と、動揺しながらミドリ。

「は、ははは。まったくだぜ。そんなことできるわけないだろ」と、引きつった空笑

いのアツロウ。
しかしその時、計ったように「ぐぅ〜」と四人の悪魔使いの腹が鳴った。
――そして、少年少女の想いはひとつになった。
「「食おう、悪魔を!」」
どの悪魔を食糧とすべきか、四人は真剣に話し合った。人型の悪魔や小動物系の悪魔はとても食う気になれない。レギオンのようなグロテスクな悪魔はどう見ても食糧向きではない。手頃で食べることができそうな悪魔――。
「龍王マカラなんか、鹿と鳥が合わさったみたいな奴だから、結構おいしいんじゃないかな?」
主人公がそう提案して、とりあえずはマカラを食ってみることになった。
そして半時間後、四人の悪魔使いたちは、悪魔が出現する水道橋ドーム前を訪れていた。
「ヒホ? 人間だホー!」
「ニンゲン、殺ス」

「天使たちの前に全滅させてやるぜ」
相手が人間と見るや、悪魔たちは砂糖に群がるアリのように集まってくる。人間は単なる補食対象だ。悪魔たちは彼らを捕らえ、エサとするはずだった……のだが。
「邪魔だ!」
「邪魔」
「邪魔だよ!」
「邪魔よ!」
四人はホコリでも払うようにあっさりと悪魔たちを蹴散らした。彼らは地面に横たわりながら、驚愕と恐怖をもって悪魔使いたちを見上げる。
(ツ、強イ……)
(強いホ……)
(なんだ、こいつらは……)
しかし、悪魔使いたちは彼らにトドメは刺さなかった。目的は悪魔を倒すことではないのだ。四人は周囲を見回し、ターゲットを探す。
そして彼らは発見する――龍王マカラを。
四人の悪魔使いにギラリと光る目で射抜かれ、マカラはビクリと体を震わせる。

（バカナ……我ガ恐怖シテイルノカ……人間ニッ⁉）

そして四人の悪魔使いはお互いに顔を見合わせると、一斉に龍王に襲いかかった。

彼らの目は、まさに獲物を前にした肉食獣そのものだ。

逃げなければ——マカラの本能がそう告げるが、蛇に睨まれたカエルのように動けない。彼はその瞬間はっきりと自覚した。今、自分は『喰う』側ではなく『喰われる』側なのだ、と……！

そして——。

アツロウたちは、瀕死で地面に横たわるマカラを、取り囲んでいた。他の悪魔たちは四人の悪魔使いたちを恐れ、ただ遠くから状況を見守っているだけだ。主人公がにっこり微笑んで「君たちに用はないよ」と言うと、悪魔たちは「ソ、ソウデスヨネ～」「じゃ、じゃ、じゃあオイラは帰るホー」と震えながら去っていった。



「よし、食うぞ……」

アツロウはマカラを見下ろす。勢いでここまで突き進んできたものの、実際に食うとなると躊躇（ためら）いがある——。

が、倒したはずのマカラは、いつの間にか影も形もなくなっていた。

「え？　なんで⁉　……あ」

アツロウの口から間抜けな声が漏れる。主人公やユズ、ミドリも、今思い出したらしく、気まずさと落胆が入り混じった顔をしていた。

ため息をついて、アツロウは肩を落とす。

（忘れてた……悪魔って、倒すと消えるんだった……）

《悪魔使い流サバイバル生活術　心得第七条》

繰り返しますが、悪魔の身体は特殊な元素で構成されております。食用とすることはできませんので、ご了承ください。

悪魔を食う、という試みは失敗に終わり、四人の悪魔使いたちは再び芝公園に戻っ

てきていた。
「こうなると……やっぱり人から食べ物をもらうしかないか」
　考えてみても、アツロウにはそれぐらいしか思いつかなかった。
「けど、誰からもらうの？」
「それだよね……」
　怪訝そうな顔をするミドリに、ユズが頷く。山手線内は全体的に食糧不足で、他人に与えられるくらい食料を持っている人などいない——。
「……悪魔の出現と山手線の封鎖は、神の試練です。この苦況にあって、私たちは神の導きに従い、人としての正しい選択を……」
　その時、公園内に響き渡る澄んだ声に、アツロウはビクリと反応した。
　声の方を見てみると、芝公園の中央で翔門会の巫女・アマネが演説をしている。
「……」
　アツロウたち四人は、口をつぐんで彼女を見つめる。この封鎖された山手線内で、充分な食料を持っている人物——。
　四人の意思が、再びひとつになった。

——アマネから、もらおう。

　演説が終わったのか、アマネは翔門会の信者に囲まれながら公園を出ていく。
「後を追おう！」
　アツロウは立ち上がる。アマネは今、封鎖区域の各地を演説したり、悪魔から民間人を守ったりしつつ巡回している。翔門会の本部に戻っても、アマネが不在という可能性もある。だったらここで捕まえて話をするのが最善だ。
「主人公、見失わないうちに先に行ってくれ！」
「了解、任せとけ、アツロウ」
　主人公はＣＯＭＰを起動、霊鳥スパルナを召喚して翔門会信者を追わせる。霊鳥族の飛翔移動能力を使って、まずは遠く離れているターゲットに追いつくためだ。そしてスパルナを飛ばす一方、同時に主人公は神獣ハクタクを呼び出す。スパルナがアマネたちの頭上まで来たところで、ハクタクが『瞬転の舞』を発動——スパルナと入れ替わって上空に出現した主人公は、空から降臨するかのように、翔門会信者たちの目の前に仁王立ちで降り立った。
「うおあああっっ⁉」

一番先頭にいた翔門会信者（男）は、危うく主人公とキスしてしまいそうになって尻餅をつく。

「な、なんだ、お前は⁉」

他の信者たちは、唐突に現れた主人公を取り囲んだ。

「うわ……ひとりで行かせるのはまずかったか……」

アツロウは主人公たちのいる公園の出入り口へ走りながら、少し後悔した。

「あなたは……」

主人公の出現に驚いたのはアマネも他の信者と同じだったらしく、目を丸くする。

……だが、そんな驚きの表情は一瞬で消え去った。翔門会の巫女は、すぐに冷静な口調で信者たちに命令を下した。

「その人を拘束し、翔門会へお連れしなさい」

はい、アマネ様！　と従順な信者たちが頷き、どこから持ってきたのかロープで主人公をぐるぐる巻きにしていく。さらに猿ぐつわを噛まされ、目隠しをされ、完全に自由を失った彼は、信者たちに丸太のように抱えあげられた。

その間、十秒にも満たない。録画しておきたいほど見事な早業だ。

拘束された主人公の姿を見て、アマネがこの上ない満足げな笑みを浮かべた。

「私の元にひとりで来たということは、ついに神の子として、救世主として生きる決心が付きましたか。すばらしい判断です」

もごもごと主人公は口を動かし、身体をくねらせて抵抗しているが、アマネは露ほども意に介さない。

「いえいえ、みなまで言わずとも構いません。私たちは、必ずやあなたが正しい道を選び取ってくれると信じていました。さぁ、善は急げと言います、さっそく翔門会へとお越しください。サリエルや他の天使もお待ちです。ああ、メタトロン様にも報告しなければ」

意外な強引さを発揮し、翔門会の巫女は何かの荷物のように主人公を運んでいく。

「ちょっと待ったぁぁぁっ！」

しかしギリギリで追いついたユズが、翔門会信者たちの前に立ちふさがった。アツロウとミドリも、なんとかユズの後に続いて到着する。

主人公誘拐を阻止されたアマネは「ちっ」と舌打ちした。

「何か用ですか、オデコさん」

「お、オデコ⁉　あんた、なんでそのあだ名を知ってるのよ⁉」

「神は人々の行動をあまねく見ていらっしゃるのです」

この天使たちはいったいどんな情報網を持っているのだろうか、とアツロウはちょっとだけ背筋が寒くなった。
「私よりもあんたの方がよっぽどオデコじゃない！　天使モードの時はオデコキャラになってるくせに！」
「それは普段の私と比べた場合の話で、客観的に見ればあなたの方が額の露出は顕著です。変な言い掛かりはやめていただきたいですね」
ふ、と鼻で笑い、アマネは言葉を続ける。
「そして、主人公さんはこれから人類の救世主として生きるのです。邪魔をしないでください、小娘が」
「あんた、私より年下でしょうが。第一、そんなことに主人公は少しでも頷いたかしら？　主人公は私たちと一緒に家に帰るのよ。あんたこそ、横から出てきて勝手なことしないでほしいわね、泥棒猫……」
アマネとユズはフフフと黒い笑いをぶつけ合う。
（こ、恐え～）



アツロウはゾッとした。ちょっと女性恐怖症になりそうな図だった。しかし、とにかくその隙に、アツロウとミドリは主人公を信者たちから取り返し、ロープと猿ぐつわと目隠しを解く。
「とんだ邪魔が入りました。そもそも、あなた方は私に何か用があるのですか？　私には、主人公さん以外はまったく、本当に、どうでもいいのですが」
いきなり『どうでもいい』扱いをされてかなり凹むアツロウだったが、ここでへこたれてはいけない、と気を持ち直して本題を話し始める。
「いや、実はオレたち、食べものがなくなってさ……。できれば、少し食糧を分けてもらえたらな～と」
「食糧、ですか？　しかし、私たちも食べ物に余裕があるわけではありませんが」
「え、そうなの？」
驚いた様子のミドリに、アマネはそうです、と頷く。それを受けて、彼女の横にいた信者のひとりが、懐から取り出したメモ帳を広げた。
「昨日のアマネ様のお食事です。朝、玄米ご飯と海苔三枚。昼、素うどんを茶碗一杯分。夜、玄米ご飯とわかめのみそ汁――となっております」
（そ、粗食だ……修行中の禅僧かってくらい、粗食だ）

アツロウとしては、翔門会にはお付きの料理人などがいて、毎日豪華な料理を食べているものだと思っていたのだが……。
「人々が食べ物も住居もなく苦しんでいるのです。私たち翔門会は住居があるだけで、生活は保障されているようなものでしょう。それなのに、食事まで贅沢にすることはできません。生きていくのに最低限必要な食べ物以外は、すべて人々に分け与えています」
まるで当然のことのようにアマネは語る。
「アマネはすごいなぁ」
主人公が屈託ない顔で微笑む。
（お前……さっきまで自分がロープで縛られて攫われそうになってたってこと、覚えてるのか……？）
本当に動じない性格だ――アツロウは尊敬の念さえ抱いてしまいそうになった。
そんな主人公を、アマネは顔がくっつきそうなほど間近から見つめる。
「しかし、主人公さん。もしもあなたが私たちの考えに賛同し、救世主となるならば、食糧を用意することもやぶやかではありません」
「え？」

キョトンとする主人公に、アマネは畳みかけるように言葉を連ねる。
「働かざる者食うべからず、何かを得るためには代償が必要です。あなたが救世主となれば、ご友人の皆さんも翔門会が衣食住のすべてをサポートします。いえ、難しいことをする必要はありません。あなたはただ、迷える子羊を導けばいいだけのこと。救世主とは、『良い羊飼い』であればいいのです」
「働かざるもの食うべからず……羊飼い……」
主人公の瞼がトロリと下りて、眠るようにぼぉっとなってくる。
「どうです、主人公さん？　救世主になろうと思いませんか……？」
「う、うん……」
主人公はフラフラしながら、アマネの言葉に頷く。
「ちょ、ちょっと主人公⁉」
「どうしたんだよ、急に。救世主なんて、それでいいのかよ、お前は⁉」
ユズとアツロウが声をかけるが、主人公は「うん、うん」と壊れた人形のように頷くだけで、アツロウたちの言葉はまったく響いていないようだった。
（まさか、アマネの言葉で本当に説得されちまったのか……？）
「やっと神の言葉が届いたようですね、主人公さん」

　アマネは勝ち誇ったような笑みを浮かべながら――主人公の前でゆらゆらと揺らしていた、糸でぶらさげた五円玉を懐にしまった。
「さ、催眠術じゃねえかっ！」
　アツロウの声に、しかしアマネは平然と答える。
「いいえ、これは神の教えを伝え、導いているだけです。とにかく、主人公さんは救世主になると言ってくださいました。では、さっそく翔門会へと行きましょう」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ……！」
　ユズがアマネを止めようとする。一方、アマネはそれを無視して主人公を連れて行こうとする。そこでアマネの手を振り払ったのは――主人公自身だった。
「――なっ⁉　どうしたのですか、主人公さん？　あなたは自分の意思で救世主となる道を選んだはずなのに」
「いや、全然自分の意志じゃないけどな」
　しかし、アツロウの言葉はアマネにスルーされた。
「主人公！　やっぱり主人公はアタシたちと一緒に家に帰るんだよね！」
　アマネの手を振り払った主人公を見て、ユズは目を輝かせる。しかし――彼はユズにも頷かなかった。

「……働かざる者食うべからず……羊飼い……そうだよ……食べ物がないいんだったら、自分で育てればいいんだよ……」
「主人公？」
　ブツブツと呟き続ける主人公を、ユズは怪訝そうに見つめる。
　――やがて彼は、さわやかな笑顔を浮かべて宣言した。
「――家畜を育てよう」
「家畜？」
　意味不明なことを言う主人公の顔を、アツロウは訝(いぶか)しんでのぞき込む。しかしやはり主人公は意に介さず、ＣＯＭＰを起動させてオルトロスなど獣系の悪魔数体を呼び出した。そして彼らを引き連れて、意気揚々と歩き出す。
「お～い、どこに行くんだ～……？」
　アツロウの呼びかけにも主人公はまったく気づく様子はなく、歩き去っていく。
　その場にいた全員が、呆然とそれを見送っていた。
「……」
　無言でアマネはＣＯＭＰを起動させる。召喚されたのは、妖獣モスマンだった。
「……まぁ、時にはこんな失敗もあります。それでは、私は用事がありますので」

そして妖気迅雷を発動、アマネは信者たちとともに凄まじい速度で公園から遠ざかっていく。
「ま、待ちなさいよ！　どうすんのよ、あの主人公は⁉」
元に戻して行きなさいよ～、というユズの叫びは、完全に無視されてアマネは立ち去ってしまった。
「逃げちゃったよ、あの人たち……」
呆気にとられるミドリ。
そしてアツロウは、完全に羊飼い（？）と化してしまった主人公を横目に、どうすりゃいいんだよと頭を抱えた。

《悪魔使い流サバイバル生活術　心得第八条》
常に戦いの緊張にさらされている悪魔使いには、時に癒しが必要です。獣系の悪魔と遊んで、気を紛らわせましょう。

芝公園の中に勝手に柵（さく）を作って、獣系悪魔たちを放牧している主人公を、他の三人

は呆然と眺めていた。
「そっちは柵だぞ～、気をつけろ～」
主人公は完全に、家畜を飼い慣らす牧場主になっていた。そして公園内の獣悪魔の牧場に、ある人は怯え、ある人は動物園の生き物たちを見るように好奇の目を向けている。
「……とりあえず、主人公は放っておいて」
アツロウは主人公から目を離し、ユズとミドリの方を見る。彼女たちも、さすがに今の主人公には対応の仕方が分からないのか、見ないふりをすることにしていた。
「食べ物の問題は振り出しに戻ったな……」
「そうだね……」
「う～ん……」
アツロウは肩を落とす。アマネの食事があんなに質素だとすると、彼女から食べ物を恵んでもらうわけにはいかない。しかし他に食料に困ってなさそうな人など、今の封鎖区域内にいるのだろうか。
「ガルル、殺スゾ、人間」「ひぃぃ！」「こら、人を脅かすんじゃない」
という主人公たちの声をＢＧＭに、アツロウたち三人は車座になったまま考え込む。

と、その時――。
「あの、すみません。ドリーさん、ですよね？」
アツロウたちに突然、声がかけられた。座ったままアツロウは声の方を見上げる。
そこにいたのは、大きなリュックサックを背負ったやや太めの男ふたり組だった。
（ドリー？）
アツロウは一瞬、なんのことか分からなかったが、すぐにそれがミドリのコスプレ名であることを思い出す。
「いつもホームページ見てます！　これ、差し入れです！」
「オレも！」
男のひとりが小さな紙袋を、ミドリに向かって差し出してくる。
「ありがとう～」
「こ、これからも応援してます！」
ミドリが立ち上がってそれを受け取ると、ふたりは緊張で強ばった笑顔を浮かべて、走り去っていった。
「差し入れ？」
「うん、ファンの人たちが時々持ってきてくれるの」

ユズに答えながらミドリが紙袋を破ると、中に入っていたのはクッキーだった。
「あれ、ミドリ。こんなところで何やってるホ？」
再び声が聞こえて、アツロウたちは顔を上げる。ジャックランタンとジャックフロストのヒーホーコンビだった。このふたりも悪魔なのだが、見た目が悪魔っぽくないためか、公園内にいる民間人たちもスルーしている。
「フロスト君……これからのご飯をどうしようかって話し合ってたの。食べ物がなくなってて」
まるで友達のようにミドリは悪魔と会話を交わす。悪魔召喚プログラムによる主従関係ではなく、こんなふうに話ができるのは悪魔使いの中でもミドリぐらいだ。
「大変そうだホー。だったら、これをやるホ」
ジャックランタンがマントの下からおにぎりやカップ麺を取り出す。
（どこで手に入れたんだ、これ……）
そんなアツロウの疑問を気にもせず、ミドリはランタンからそれらを受け取る。
「ありがと～」
ミドリがお礼を言うと、ランタンとフロストは軽く手を振って去っていった。
それを見送り、ミドリはもらったクッキーやおにぎりなどの食糧を、床に広げた。

「それじゃ、みなさんもどうぞ」
「えっと、これは……」
アツロウは戸惑いながら、ミドリに尋ねる。
「もしかして今までも、こうやって食べ物をもらってたの？」
「うん。封鎖が始まってから、ずっとね」
あっさりと頷かれ、アツロウは乾いた笑いを浮かべるしかなかった。
（実は食糧に困っていない人って、ミドリちゃんじゃないか……）

《悪魔使い流サバイバル生活術　心得第九条》
悪魔にも人間と同じように感情があります。仲良くなればいいことがあるかもしれません。できる限り悪魔たちと友好な関係を築いていきましょう。





「ラプラスメール・改」

彼らの朝は、ラプラスメールから始まる。
その内容は、一日に起こる事件を演繹的計算によって予測したものであり、主人公たちにとっては一日の行動の指針になるものだ。
「今日も来てるな……」
アツロウがＣＯＭＰの受信メールを確かめながら言うと、ユズと主人公も集まってくる。
「今日はどんな事件が起こるの？」
「今、確認する」
主人公の言葉に応え、アツロウはＣＯＭＰを操作してメールを開く。
「はぁ……。私、ラプラスメールを見る時が一番緊張するよ。メール恐怖症になっちゃいそう」
ユズは両手のひらを胸の前できゅ、と握り締めて、耐えるようにしながらＣＯＭＰの画面を覗き込む。せめてラプラスメールの伝える予測が明るく楽しいものだったらいいのだが、どれ

も凄惨な事件ばかりなのだ。しかもその中には、彼らが死亡するという事件まで記載されていたりするので、余計に気が重くなるのだろう。

「ん……？　これは？」

　ふと、画面の右上に「ディティールモード」と書かれたアイコンがあることにアツロウは気づく。昨日まではこんなものはなかったのが……ナオヤが新たに追加した機能だろうか。

　主人公も画面をのぞき込む。

「『ディティール』って、詳細って意味だよね。事件の内容がもっと詳しく表示されるようになるのかな」

「だったら助かるけど……」

　もし起こる事件の詳しい過程までわかるのであれば、危機を回避するための行動も考えやすくなる。

　とにかく試してみようと思い、アツロウはディティールモードをオンにしてみた。

「十二時五分。池袋の田中家で、飼い犬ペスの子供が生まれる。五匹。オス三匹、メス二匹。

十二時十三分。渋谷で木村三郎が石に躓いて転ぶ。

十二時十四分。渋谷で転んだ木村三郎を、古賀良樹が腕を貸して助ける。

十三時一分。宮田純一と島田啓子がケンカをする。

十三時十二分。新宿で高橋伸介が還暦を迎える。

十三時十八分。品川で町田幸三が五百円玉を落とし、気づかずに歩き去る。

十三時三十七分。品川で加藤浩が町田幸三の落とした五百円玉を拾う……」

　まるで町内新聞のような細かな事件が、ズラズラと表示される。どれだけあるんだというぐらいの情報量だった。

　画面をスクロールしてもスクロールしても終わりが見えない。しかもそのほとんどが、たいして重要でもない小さな事件ばかりだった。

「……」



三人とも口をつぐんでしまう。
アツロウはメールを最後まで読むことなく、その機能を切った。
「詳細(ディティール)って……事件の詳細を表示するんじゃなくて、細かな事件を表示するってことかよ……」



「牛馬喧嘩」

「あ……悪魔だーっ！　悪魔が出たぞーっ！」
「きゃー、たすけてーっ！」
炎天下のオフィス街に人々の悲鳴が響き渡る。山手線の環の中に封じ込まれた人々は、突然出現するようになった悪魔を前に逃げまどうしかなかった。
「大変だっ、行こうぜ！　あの人たちを助けるんだ！」
「そうね、急ぎましょう！」
「——我が召喚に応えよ、悪魔たちよ」
仲間たちとともに駆けていく主人公がＣＯＭＰを軽やかに操作すると、手持ちの悪魔が呼び出された。
左右を守るように出現したのは、二体の鬼、地獄の獄卒だった。牛の頭を持つがっしりした鬼がゴズキ、馬の頭を持つ偉丈夫がメズキ。
特にメズキはさっき二身合体で仲魔にしたばかりの悪魔だ。主人公が戦いの場で呼び出すのは初めてで、ゴズキとともに活躍してくれることを期待していた。

朝から使役しているゴズキはなかなか高い攻撃力を持っていた。邪教の館.exeで得た情報によると、メズキはよりハイレベルな悪魔で、ゴズキより魔力が高くて頼りになると思われた。

「ゴズキは左を、メズキは右の敵を叩け！」

進み出た二体の鬼は、敵パーティの左右を固める悪魔の頭を、得物でもののみごとにかち割った——。

「ゴズキにメズキ、なかなか強そうだよな。今度は俺のパーティに貸してくれよ」

「あっ、私も貸してほしいな～。いいでしょ？」

戦いの後、アツロウやユズにそう頼まれた主人公は快く承知した。同種族をデビオクで見つけて契約するか、邪教の館で合体して仲魔にしてもいいのだが、手持ちのマッカやCOMPの容量が限られているため、なかなかそうもいかない。

「なら、ユズとアツロウが一体ずつを使えばいいね」

——次の戦闘時、アツロウのパーティにはゴズキが、またユズのパーティにメズキが召喚された。大通りの左右から侵入したふたつのパーティはそれぞれ前面の敵を競うように撃滅していく。

「ブモッ、オレ最強！　立チフサガル奴ハ叩キ潰ス！」

「いいぞー……おっとあれは？」

アツロウははるか遠く、地面にメモリーカードのようなものが落ちているのを発見した。

「あら、なんかいいものが落ちてるわね」

メモリーカードにはなんらかの有益なデータが入っていることが多い。ぜひとも拾っておきたいアイテムだ。カードはアツロウの位置からもユズの位置からも同じくらいのところにある。戦闘が終わるまでにどちらかが拾えれば問題ないのだが……。

「アツロウ、ちょっと競争してみない？」

ユズは面白半分に思いついたことを提案する。アツロウもすぐに乗ってきた。

「よし、じゃあ昼前に確保したROCKYひと箱賭けるってのは？」

「それ、いいアイデアね！　メズキ、がんばって！」

ユズに発破をかけられ、メズキは奮起する。

「ヒヒンッ！　最強ナノハオレダ！　風ノ速サデ敵ヲ倒シマクル！」

ゴズキとメズキはコンビで活動することが多く、その反面互いをライバル視するところもあったかも知れない。メズキが敵を突破すると、通りの反対側にいたゴズキもますます戦意を高めた。他愛のないゲームだったが、勝負となるとアツロウとユズも、

そのパーティで戦っているゴズキ&メズキ以上にエキサイトしてくる。
「よおし、また一体倒したわ！　さすがメズキ」
「馬ハ牛ヨリ速シ。ンッン～、名言ダナ」
「ゴズキ、あとひと息だ、ガンバレ！」
「オレノ方ガパワフル。馬ニハ負ケナイ！」
向こうへ逃げていく会社員やＯＬに悪魔のグループが追いすがる。
「助けて！　悪魔が迫ってくるーっ！」
もともと犠牲者を出さないように急いで敵を倒さなければならない局面で、ライバル同士の掃討競争は好都合だった。
「よし、次だ。あの悪魔をやるぞ」
狭い通路を駆けていくアツロウとユズのパーティ。異なるパーティに所属するゴズキとメズキの肩がぶつかった。
「エエイ、ドケイ！　馬ガ牛ニカナウワケガナイノダ！」
ゴズキがうなれば、メズキも応じる。
「レベルハオレノ方ガ上、オレノ方ガ偉イノダ！　生意気ダゾ」
「レベルガナンダトイウノダ！　牛ハ胃ガ四ツアルンダゾ」

メズキはついに足を止めてゴズキに向き直った。
「ナンダト？　涎垂ラシテミットモナイ。ソレニ比べ、馬ハイイ。走ルト速ク、カッコイイ。牛ニハ無理ダロウ」
「牛ニハカッコイイ角ガアルゾ。馬ニハマネデキマイ」
「馬ノ方ガ高級ダ。競走馬ハトテモ高価ナノダ」
カチンと来たのか、ゴズキも引き下がる気配がない。
「牛ノ方ガ高級。松阪牛、神戸牛、高級肉トイエバ牛ダ」
「……ウ、馬モ食エルゾ！　桜肉トイエバ珍味デ有名」
狭い通路で押し合いながらゴズキとメズキは言い合いをしている。
「おいおい、お前ら、いい加減にしとけよ……」
「そ、そうよ。ほら敵を追いなさい！」
図体のでかい悪魔に阻まれているため、アツロウとユズもただ後ろをついていくしかなかった。
「高級、イヤ高貴トイエバ牛ダ。牛車ハ貴族ノ乗リ物。ソシテ、インドデハ牛ハ聖獣、神ノ使イダ」
「馬ノ方ガ人間ニ親シマレテイル！　ペガサスヤユニコーンナドハ正義ノ幻獣ッポイ

ダロウ？」

通路の出口には悪魔一グループがいたが、ゴズキとメズキは敵にほぼ同時に渾身の一撃をお見舞いした。自身の強さをアピールするためだが、攻撃は見事に決まった。だが最前列にいたゴズキは、二番手に飛び出してきた敵からダメージを受ける。ゴズキは怯んで後退した。

「でも、でもさ！」

アツロウは思わず口を開いた。ゴズキメズキの掛け合いを見ているうち、ゴズキを応援したくなったのだ。

「スペインには闘牛っていうのがあるだろ。牛は勇敢さの象徴だ。だけど、闘馬てのは聞いたことないよな！」

口論に人間が加勢したことで流れは変わってきた。

「寝ると牛になるとか、牛歩とか、牛はのろのろイメージよね。『蝸牛』って書くとカタツムリのことだし。どんくさいんじゃないの？」

今度はユズが割って入って、ゴズキをこきおろす。アツロウも負けてはいない。

「生物学的に言えばさ、牛は偶蹄、馬は奇蹄。牛の方が指の数が多いし、より進化してるんだぜ」

「それでも世間では馬の方が評価高いわ！　牛を馬に乗り換える、っていう諺（ことわざ）は劣ったものを優れたものに交換することなんだから」

口論は激化していき、それにつれて戦いの手数は少なくなっていく。これでは本末転倒というものだ。二体が罵倒し合っている間、ユズは迫り来る敵に魔法を撃ち、ピンチを脱した。アツロウも敵の攻撃をかわし、反撃を決める。

今やゴズキメズキは戦闘そっちのけで、両者ヒートアップし、互いに殴りかからんばかりになっていた。

「ああもうっ！　敵を倒すのよ！　ちゃんと前見て！」

しかし、この場所にふたつのパーティが留まっていたおかげで、悪魔に襲われかけていた人々はみんな無事に逃げおおせることができたようだった。敵のチームも後ひとつを残すばかりだ。アツロウとユズを尻目に、別方面から入ってきた主人公はやすやすとメモリーカードを拾い、そばにいる敵チームを捕捉した。

「ふたりともうまく時間を稼いでくれたね！　後は俺に任せてくれて大丈夫！」

「……あ、賭けが！」

ユズは力の抜けた声を上げる。メモリーカードが拾われたため、お菓子を賭けた競争は無効になった。

「――ヒヒン！　馬ノ方ガ偉イ、ナゼナラ、牛鹿ハイナイが馬鹿ハイル！」
「な、なんだと⁉」
「ナンダッテー⁉」
　メズキの爆弾発言に、アツロウとゴズキは驚愕の声を上げた。
「牛鹿ハイナイガ馬鹿ハイル！　馬鹿ノ人数分ダケ、馬ガ半馬身リードダー！」
「あーもう！　いいかげんにしてーっ！」
　たまらなくなったユズはメズキをCOMPに戻した。
「ブモーッ！　牛ガ負ケ？　負ケナノカー？　馬鹿ニハカナワナイノカー？」
　相手に負けたと勘違いして地団駄（じだんだ）を踏んでいるゴズキを、アツロウも帰還させた。
「……」
　ふたりの間に気まずい沈黙が流れた。少し離れた場所では主人公のチームの悪魔たちが最後の敵を倒し、歓声を上げている。
「……やれやれ。骨折り損、かな～」
　いや、それでも役に立つ戦いはしたというのはかなりの救いだった。
　戦い終わり、一陣の風が吹き抜けるビル街の路地に、悪魔使い二人の乾いた笑いが響き渡った――。



「そういえばさ、スキルクラックって人間からもできるんだよね。ちょっと不思議な感じがするけど」
　COMPの画面を見ながら主人公がつぶやく。
　そう言われて、アツロウもスキル一覧表を見てみる。確かに、人間の悪魔使いからクラックできる先制発動スキルは、かなり重要なものが多い。
「きゃあああああ――――！」
　その時、絹を裂いたような声と同時に、女子学生らしきふたりが、こちらに逃げてくるのが見えた。
「どうしたの⁉」
　駆け寄るユズに、女子のひとりが、焦りと恐怖を声に滲ませながら訴える。
「と、東京タワーの下で、悪魔を呼び出してる人が！」
　三人で駆けつけると、くたびれたスーツ姿で無精ヒゲを生や



した中年と、ＯＬ風の女性、そしていかにも下っ端という感じのチンピラが悪魔を呼び出していた。スーツの中年などはなぜか自暴自棄になっていて、「東京タワーをぶっ壊して死んでやる！」と叫んでいる。ほとんどの民間人がもう逃げた後で、人間の被害者はいないようだ。

「とにかく、あいつらを止めよう！」

主人公を先頭として、三人は悪魔使いに向かっていった。

「ひ、この化け物ぉ！」

くたびれスーツの中年悪魔使いが、顔に怯えを浮かべて逃げ去っていく。アツロウは彼から奪ったＣＯＭＰを地面に叩きつけ、破壊した。ＯＬやチンピラ風の悪魔使いも、主人公とユズに圧倒され、その後を追うように姿を消す。

「よし、それじゃあ、さっきクラックしたスキルは……」

アツロウはＣＯＭＰの画面に浮かび上がった表示を見る――。

【主人公はチンピラから『恐喝』をクラックした】

【アツロウは元・会社員から『公園で一日を過ごしてリストラされたことを家族から誤魔化す』をクラックした】

【ユズはOLから『上司にぞうきん汁コーヒーを入れる』をクラックした】

「……」

主人公とユズとアツロウは顔を見合わせる。全員、眉間に皺をよせて微妙な顔をしていた。

「え～っと、この能力……何に使えばいいんだ？」

アツロウの言葉に、主人公は腕を組んで少し考えた後、答える。

「将来、なにかの役に立つかもしれないし」

（こんなスキルを使う将来なんて嫌だ……）



「ラプラスの謎」

〝おハハようごザいママす。本日のニュースをお伝えしマすす。〟

——各人のCOMPへ毎朝配される謎のメール、いわゆるラプラスメールはいったい誰が発信しているのだろうか？

〝……みなササマ良■一日ヲ。〟

——東京封鎖が起こってから数日、主人公はそれが妙に気になっていた。さまざまな謎の中のひとつであるラプラスメールに着目した、というわけだ。

「アツロウ、オレは思うんだ。このメールを送ってきている奴が、すべてのカギを握ってるんじゃないかってね」

「ああ、手がかりとしてラプラスメールの差出人が何者かを探っていくのもアリかもな。なんか予言じみたニュースが書いてあるし、そいつが引き起こしてるって解釈もできる。どういう理屈かはさておいて、だけどな」

これまでのところ、ラプラスメールにはその日の封鎖地域内で起きる事件や死傷者数などが記されてきた。予言どおりに起

きた事件もあれば、起きなかった事件もある。起きなかった理由は、主人公たちが現場へ行って事件に介入したり惨劇を阻止した結果であることが多かった。
「それに時の観測者って名乗っているのも思わせぶりだと思う」
主人公は考え込んだ。
大勢の人が死ぬような事件を阻止できたのは、ラプラスメールで場所や時間が示されていたからだ。もしかすると差出人からの挑戦、それとも自分たちが踊らされている？
いや……誰かが仕掛けをしているとしても何人死傷するかなど、あらかじめ計算できるものなのだろうか？　それに自分たちの行動次第で未来はある程度変更できる、ということもわかった。
そして時の観測者という単語からは、別の可能性も考えられる。
「時の観測者って言葉は、何かの小説だったかゲームで見たことがあるんだ。引っかかる単語だよな」
とアツロウ。
最近流行の量子論やそれをヒントにした創作の中で使われる言い回しだ。世界に発生する〝事象〟は誰かが〝観測〟してこそ現実のものとなる、という理論。

事象には無限の可能性やパターンがある。たとえばガス爆発が起きたとして、死傷者ゼロのこともあれば数十人が死ぬこともあるし、何百人もが死ぬ大惨事になる可能性もある。
観測者という存在がそれら起こった事象のどれかひとつを〝選んで〟認知するまで、結果は選び取られない、とする考え方だ。
「ただ、観測者は予言者じゃないから、未来に何が起こるかは断定できないはずだけど……」
アツロウは主人公の肩に手を置いた。
「まだ現段階では情報が少ない。あまり考え過ぎない方がいいと思うよ」
とにかく、と主人公は息を吐く。
「時の観測者に返信メールを出してみようと思う」
どうかなあ、とアツロウは首をかしげた。
「よくあるだろ？　ニュース系のメールだとさ、このメールには返信しないで下さいってただし書き。向こうは受信できない仕様で、伝わらないんじゃないかな」
それでもダメでもともとだ、やってみる価値はある。主人公は簡単なメッセージを打ち、送信した。

〝あなたは誰ですか？　会いたいです〟

——そして翌日。

「なあ、今朝のラプラスメールの内容……文字バケは回復したけど、なんだか輪をかけておかしくなってないか？」

〝①昨日、主人公はデビオクにてコボルト、ワイラ二体、トラロク、ガギソン、ペンドラゴンを落札しました〟

〝②昨日、主人公は都内各地で計二五回の戦闘を行いました。その結果、レベルは7上がりました〟

〝③昨日、主人公は邪教の館.exeを八回使用しました。その際フレイミーズとエアロスを創造し、そのために二〇〇〇マッカ消費しました〟

「……な、なんだこれ？」

アツロウは青ざめて言葉を失った。

「たしかにニュースっていうのは本来、起こったことを知らせるものだけどさ、これ、主人公のことばかりじゃないか。どういうこと？」

ラプラスメールを受け取っているのは、主人公が知る限り、自分たちだけだった。

行動をともにしていた者が主人公の昨日の記録を知っても意味はないのだが……。

「不気味だけどさ、でもこれって俺の出したメールを誰かが読んでくれたってことなのかな？」

そちらの方が重要に思えた。主人公に興味を持ってくれたのか、返信を待っていたのかはわからないが、自分の出したメールへの反応と考えていいのかも知れない。

「ね、ねぇ、もうやめた方がいいんじゃない？　時の観測者に目をつけられたってことかも」

ユズは心配そうだ。

「いや、もう一度メールしてみよう」

ここで引き下がっては意味がない。主人公はメッセージを打った。

〝もう一度聞きます。あなたは誰ですか？　どこに行けば会えますか？　俺たちのことを知ってるんですか？〟

——さらに翌日。

「おい、主人公、これ……見たか？」

アツロウに促され、彼は自分のＣＯＭＰを開いてラプラスメールを見る。

〝①昨日の主人公の朝食はカレーパンとメロンパン、昼食は炊き出しの豚汁とおむすび、夕食は炊き出しのカレーライスでした〟

〝②昨日の主人公の下着は青のトランクスでした。今朝は縞の柄をはいています〟
「うわ……これってストーカーじゃない！　気持ち悪い！」
ユズに言われるまでもなく、主人公も背筋が冷たくなるのを感じた。今日は締めの文章がこれまでと違っていたからだ。
〝それでは良い一日を。いつも見ています。貴方がなにを食べどこで眠り、なにを思っているか。応援しています〟
「アツロウ！」
「わかってる、解析はやってる。ラプラスメールの発信源、突き止めてやるぜ」
メールが先方に届いていることがわかってから、アツロウは配信元を本気で調べていた。
「ダメだな、もうちょっとログが欲しい。明日配信されたら特定できると思う」
「頼む。俺も寒気がしてきたよ……でもそれはそれとして都内の探索なんかもおろそかにできないしね」
彼らの頭の上に見える寿命は今日は1になっていた。昨日は0だったのが〝主人公たちを倒すはずだった強力な悪魔〟を返り討ちにしたことで延命できたのだ。だが、未だ彼らに迫る危機的状況を考えると、ラプラスメールだけに集中するわけにもいかなかった。

「でもな、ちゃんと返信をよこすわけじゃなし、こんな内容のニュースを送られては黙っていられないな」
この日、主人公は時の観測者へ向けて抗議の内容のメッセージを送った。
〝いいかげんにしてくれないと怒るぞ。どこからか見張るようなマネはやめて、堂々と会って話してくれ〟
このメッセージが効を奏したのか、翌日朝にはついに時の観測者らしい者からのメールが届いた。
〝ごめんね。どうか嫌いにならないで。貴方を見守っているから〟
「よし、ここまで反応を引き出せばコンタクトもできそうだぞ！　このメールが届いたのは俺のCOMPだけなのか？」
彼の背後でユズが泣きそうな声を上げたのはその時だった。
「いやああっ！　主人公、これ、これ見てよ！　恐いよ～」
ユズのCOMPには、彼女に対してだけ、時の観測者からのメールが届いていた。
〝主人公につきまとわないで！　甘えた声でカレを誘惑しないで。あなたはカレにふさわしくないわ！〟

ユズと主人公の脳裏には、時の観測者のシルエットが浮かんだ。
主人公をいずこからかひっそりと見張り続ける女……会ったこともないのに恋心を抱き、そばにいるユズを逆恨みするアブナイ女。そんな人物像である。このままではユズに危害が及ぶかも知れない。
「よおし！　尻尾をつかんだぞ。主人公、時の観測者、つまりラプラスメールの差出人はお前のＣＯＭＰの中にいるはずだ！」
自信たっぷりにアツロウはそう言い放った。
「奴を引きずり出してやる。協力してくれ」
アツロウの言うとおりにＣＯＭＰを操作していく。ＣＯＭＰ内には、毎日の戦いで呼び出している悪魔がいるが、それ以外にも誰かが潜んでいた……いや、時の観測者はその悪魔たちの中の一体だった。
「召喚に応じよ」
そしてＣＯＭＰから飛び出してきたのは、神獣のヘケトだった。
「灯台もと暗しだ。まさか自分と契約している悪魔の中に時の観測者が紛れ込んでいたとはね。さあ、何もかも話してくれ！　東京封鎖の謎を！」
主人公が促すが、ヘケトはさめざめと泣き崩れるだけだった。

「なんのことかわからないわ……」
「ラプラスメールを出していたのはお前なんだろう？　いや黒幕じゃなかったとしても、なにか手がかりくらいは知ってるはずだ。頼む、話してくれ」
「知らないわよ～。あなたのそばにいるうちに好きになっちゃっただけだもの。お願い、嫌いにならないでよ～」
粘液に包まれた鱗だらけの身体がくねくねと蠢（うごめ）く。ヘケトは姿こそこんなだが、心はオトメだった。
「？？」
ヘケトはなにも知らないようで、主人公も次になにを言うか困ってしまった。
「ちょっと待ってくれ、なんかおかしいな……やべ、こいつはラプラスじゃない。メールの配信ミスだ、数日前から混線してたみたいだ」
アツロウは自分のミスに気付き、平謝りしている。
話をまとめるとこうだ――主人公がラプラスに対して返信で問いかけをした日から、ラプラスメールは配信されなくなっていた。主人公のメッセージは混線してヘケトへ届き、ヘケトも勘違いして主人公を意識するようになって返事を出し、紛らわしいメッセージが一行のもとに届くようになった。主人公の数度の問いかけや態度の硬

化に、ヘケトはついに身元がばれるような応答をするようになり、それで探知されてしまった。しかし、ヘケトはラプラスとは無関係だったのだ。

アツロウがＣＯＭＰの不具合を調整すると、メールボックスに数日前からのラプラスメールがまとめて配信されてきた。それは主人公の問いかけに反応した内容ではなかった。

「主がいきなり会いたいなんて言ってきたから、アタシ、ドキドキしちゃったの。どうしていいかわからなかったの～」

「やれやれ、骨折り損だったな……やっぱり差出人の正体は謎のままか」

勘違いから自分に惚れたらしいヘケトも気の毒に思える。だが、これまでの苦労や緊張が水泡に帰したことを知った主人公は脱力するしかなかった。

「す、好きになっちゃったのよ～！　どうしたらいいの～？」



「アヤの歌」

息を切らせて、主人公、アツロウ、ユズが野外ライブ会場に辿り着く。

ハルはステージ上で悪魔たちに取り囲まれていた。

「ハルさん！　今、助けます！」

ユズはステージ上に向かって呼びかける。しかし、主人公たちとハルとの間には何体もの悪魔がいて、その距離は絶望的なまでに隔たっている。

ユズの声で主人公たちに気づいたらしく、ハルはこちらに顔を向けた。

「あんたたちは……。ありがとう。でも、大丈夫だよ。自分の身くらい、自分で守るさ」

どこか空虚な笑顔を浮かべると、ハルは自らのシーケンサを起動させた。

「アヤさんからもらったこの歌は……悪魔を還すこともできるんだ」

そしてアヤの作った曲を、ハルが歌い始める……。



（語り）
忙しい都会で暮らす日々に、ふと思い出す故郷。
母が夜なべをして編んでくれた手袋は、今もこの手を温めてくれています。
幼い頃を過ごした故郷と、年老いた両親への想いを込めて――『ふるさと想歌』。

♪都会の冷たさに　いつしか慣れていた
遥か昔に捨てた故郷が　まぶたの裏に浮かぶ
すきま風吹き込むあばら屋で　暮らしたあの日々
父と眺めた冬の海　雪の冷たさにかじかむ手
あかくなったオイラの手を見て　母は手袋つくってくれた
父よ　母よ　元気にしているか　変わりはないか
忘れられない　嗚呼　ふるさと
許されるなら　帰りたい

「え、演歌だ……」とアツロウ

「演歌……」と主人公。
「演歌、だね……」とユズ。
Ｄ－ＶＡってロックバンドじゃなかったのかとか、なんでこんなに演歌を歌い慣れているんだとか、アヤは故郷に未練でもあったのか、など色々な疑問の残る予想外な選曲に、三人とも言葉を失っていた。
そして――。
「ウゥ、俺、故郷ニ帰ル……」
「父サン、母サン……」
「ヒーホー……故郷は、大切だホ……魔界に帰るホ……」
ハルを取り囲んでいた悪魔たちが、次々と涙を流しながら姿を消していく。そしてステージ上で演歌を歌い続けるハルを見ながら、ユズは思う。
（ちゃんと悪魔たち還ってるし⁉）



「速攻！」

芝公園で大きな戦いが始まった。
「ジンさん、待って下さい！」
主人公の呼びかけが聞こえているのかいないのか、ジンは翔門会の門をくぐり、どんどん進んでいく。奥にいるアズマのもとへ一直線に向かっているようだった。
「無茶だ！　ひとりで行くなんて……教団の悪魔使いだってあんなにいるのに」
仲間とともに駆けていく主人公の前に、紅色のローブをまとった信者が立ちはだかった。敷地への入り口は狭く、侵入者を撃退しようと敵がわらわらと殺到してくる。
こちらが悪魔使いと知っているのか、信者たちもそれぞれＣＯＭＰを手にしていた。
遠くに見えるジンの左右にも信者が迫っているが、彼は目もくれない。正面のアズマだけを目指している。
「あんなに人数が多いと、きっとやられちゃうわ！　急いでジンさんを追いかけて助けなきゃ！」

ミドリの言葉に主人公は頷く。

敵の真っ只中に飛び込む以上、自分の身も守らなければならないが、ジンに早く追いつくことも考えなければならない……そのために召喚する悪魔を選抜した。

「俺とユズは全速力で行く！」

「よし、援護は任せろ！　俺とミドリちゃんは後から行ってお前らが囲まれないように敵を倒していくからな」

アツロウの心強いセリフを聞いて、ユズも安心したようだった。

「加速といえば妖獣よね。モスマンをチームに入れて妖気迅雷を使うわ」

これまでの戦いでも、移動速度は戦いの重要なポイントとなっていたため、実戦で鍛えられたモスマンは数体がＣＯＭＰにストックされている。

だが教団本部の狭い入り口は、悪魔を伴った信者が幾重にも立ちふさがっていた。

「目の前の敵をいちいち相手をしていたら追いつけない。なら、飛び越えていくか。幻魔を呼ぼう」

幻魔族なら夢幻の具足という種族能力を持っている。浮遊していけばいいと考えたのだが、主人公は思い直した。

「いや、ここは霊鳥の方がいいかもな。飛翔能力を頼るならスピードもあるといい」

そういうわけで、主人公とユズのチームにはバイブ・カハが編入された。妖獣と霊鳥という高速進撃型悪魔で左右を固めたふたりは先陣を切って飛び出していく。

「悪魔使いが来たぞ！」

「本部に入れさせるな！　死守するんだ！」

殺気立つ信者たちの頭上を、主人公とユズはひとっ飛びしていく。

「ふたり抜かれたぞ！　ええい、撃ち落とせ！」

霊鳥を加速ブースターとしてずっと頼りにしてきた主人公であったが、日に日に強くなっていく敵の前に、バイブ・カハはやや力不足になってきていた。

「くっ、このままじゃ危ない。仲魔をチェンジするか」

難所を飛び越えてしまったのなら、より強い悪魔に入れ替えて戦った方が危険も少ない。敵と対峙した彼はバイブ・カハを帰還させ、より強い悪魔を呼び出した。

「よし、ソデコたちは突破できたようだな。ミドリちゃん、オレたちも前進だ」

主人公たちを送り出した後、アツロウとミドリは先鋒を追う信者らの後ろから攻撃を仕掛けた。教団側は浮き足立ち、そして前後から挟撃を受けるかたちとなる。

敵側の方が数が多く、最初は無茶な戦いかと思われたが、この電撃戦で主人公たちはひとりの犠牲者を出すこともなく勝利できたのだった。

「ジンさん、単独でどんどん行かないで下さい！　俺たちが後詰めにいなかったらどうなっていたか……」

　戦いの後、主人公はジンをたしなめる。

　ジンの使っていた悪魔たちは戦いで倒されてしまっていた。皮一枚でジンは助かったようなものだ。

「え、ああ……つい頭に血が昇って突っ走っちまったな。すまなかったみんな」

　表面上は涼しい顔だったが、ジンは少年たちに深く感謝していた。自分の力に自信はあったが、多数の悪魔使いを護衛に置いていたアズマを打ち負かすのはとうていひとりでは無理だっただろう。

「しかし、こういう戦いではモスマンとバイブ・カハは黄金コンビだな。やっぱり戦いは速攻だよなあ」

　アツロウは満足げに言うが、主人公は眉をひそめた。

「だけど、そろそろ戦力的に厳しくなってきたな……」

　バイブ・カハは今後の戦いでは移動要員としてしか使えないだろう。モスマンはもう少し使えるかもしれないが、それもやがて無力な存在になるのは目に見えている。

「この戦い方が有効だとしても、高レベルの妖獣と霊鳥を用意できなければ意味がな

いんだよな……」

　それに、有益な種族スキルを継続して使うため、主人公は低レベルの悪魔に精霊を合体させることでよりハイレベルな同種族を使っていた。たとえば、モスマンもネズミのような姿の妖獣アーヴァングから精霊合体でレベルアップさせて創造したものだった。言ってみれば、ずっと育てている仲魔だ。

　邪教の館.exeで精霊一体を作り出すのには、一〇〇〇マッカ必要となる。その費用を稼ぎ出すのも忘れてはならない事項だった。

「……よーし、ようやく強力な霊鳥と契約できるようになったぞ」

　そのうちに、バイブ・カハに代わる悪魔としてガルーダが加わった。ガルーダは他の種族の強い悪魔と比べても遜色ないほどの実力者だった。

　電撃戦が思うようにできないまでも、他の戦法でどうにかしのいできた一行だったが、ちょうどこの時、速度と戦力の両方を要する難しい戦いが起こった。

「俺とアツロウのチームに霊鳥と妖獣を入れる。作戦は芝公園の時と同じだ。俺とアツロウが先鋒として突出する。他のチームは援護を頼む」

　そして、この戦いでもどうにか勝利を収めることができた。

「強い……さすがに契約したばかりのハイレベル悪魔だ。まあ、ちょっとどうかなと

思うところはあるけどね」
額の汗を拭う主人公に、アツロウも苦笑いしながら相づちを打つ。
「そうだよなあ」
ミドリは不思議そうな顔で彼らの顔を、そしてＣＯＭＰに表示される妖獣のデータを見比べている。
「え～っと……どうかなって何が？　この新しい妖獣のこと？」
アツロウの横には召喚された巨大な妖獣が鎮座していた。しかし敵の術にはまったらしく、おたおたと身体を揺すっている。
「ほら！　しっかりしろ。もう戦いは終わったぞ」
「オオウ……オウ、ヨウヤク身体ノシビレガ消エタ。ホットシタ……」
これこそモスマンに代わって前線に出るようになった妖獣ベヒモスだった。カバのような頭に小山のような巨体とバカ力が自慢だ。
ミドリの疑問に主人公は答える。
「まあね……ガルーダは精悍で素早い。まさに霊鳥の長って感じなんだけど、それに比べるとちょっとベヒモスは個性的だよね」
妖気迅雷という加速技を得意とする妖獣族だが、その中で最強と思われるベヒモスだけはなぜか俊敏なイメージとはほど遠い悪魔だった。

「オレは納得いかないっていうか調子狂うな～。ベヒモスはどっしりしてて力自慢でさ。悪いところを挙げると、平均より動作が鈍くて敵の術にもかかりやすい。頑丈で強くて頼れるって言えばそうだけど、なんかもっさりしてるんだよな～」
巨体を誇るがゆえに動作は鈍く手番はいつも最後。大男総身に知恵が何とやらで、敵に翻弄されることも少なくない。
「えーと、あ、そうだ！　モスマンの次がベヒモスでしょ？　つまりモスつながりで妖獣族に属してるっていうことじゃないのかな？」
ミドリがシャレのようなことを言うと、今度は主人公が苦笑いする。
「いや、それ意味わかんないから」
「ブホ……」
ベヒモスはまいったなぁと言いたげにボリボリと腹を掻いた――。
多少のこきおろしを受けながらも、それでもベヒモスは主人公たちの最後の戦いの時まで最前線で戦い続けることになる。ガルーダとコンビで露払い役のチームに編入され、戦術の要であり続けたのだった。

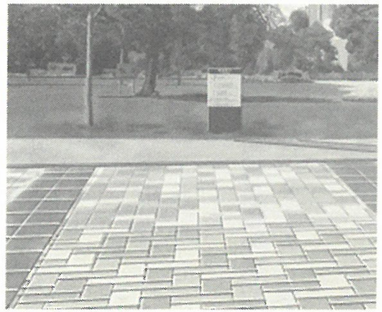


「アツロウの流儀」

1

ぎゅおんぎゅおんぎゅおんぎゅおん。
ぎゅあん、ぎゅおん。
ぎゅん。
「だーっ。やってらんねー」
少年が声をあげる。

東京、秋葉原。
蝋燭（ろうそく）の小さな光が、空きビルの一室を照らしている。三人の少年少女が座り込んでいる床は、打ちっ放しのコンクリートで、寝袋がいくつか転がっている。うなりを上げ三人が必死で回しているのは、携帯端末につながった小さなハンドルだ。
「根気ないわね、アツロウ」
あきれた声を出す少女。ヘッドフォンの少年が、隣で肩をす



くめる。

――東京封鎖。

山手線内側一帯を襲った停電と、「悪魔」の大量発生。

政府は、まるでそのことを知っていたかのように、自衛隊による封鎖を開始。

ライフラインは一夜にして寸断され、停電した首都の中で、人々は不安にさいなまれながら生存（サバイブ）していた。

ごくわずかなものだけが、その手に鍵を握っていた。何の変哲もない携帯端末ＣＯＭＰには、悪魔を召喚し、従属する力が秘められているのだ。

日々、秩序が崩壊してゆく閉鎖地域にあって、所有者に絶大な力を与えるＣＯＭＰは、まさに命綱だったが、弱点は、その動力にあった。停電した東京で充電できる手段は数少ないのだ。この場合は、すなわち手回し充電器である。

「確かにつらいけど、頑張らないとね」

取りなすように、ヘッドフォンの少年が声をかける。

「男なんだから、これくらいで疲れないでよね」

「疲れるとかじゃなくてさ。単純作業は俺の流儀じゃないんだよ」

「りゅーぎー？」

少女が、うさんくさそうな顔をする。

「あぁ。知ってるか？　怠惰（たいだ）というのはハッカーの三大美徳の一つなんだよ！」

「タイダって、あんた、やっぱり怠（なま）け者なんじゃない」

「ソデコにゃわからんか」

「ソデコじゃない、柚子（ゆず）だっつーの」

「ねー、このバカになんとかいってやってよ」

口論ともいえない、どこかのんびりとした、やりとり。

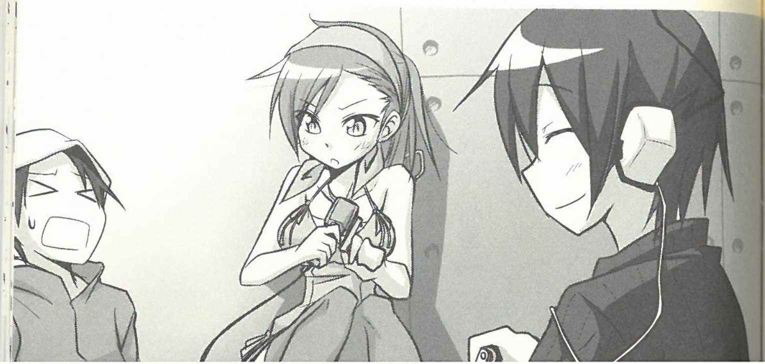
「わからなくもないけどね」

ヘッドフォンの少年は、手を止めずハンドルを回し続けている。

「後で楽するために、最初に苦労しておこうって話じゃないかな」

「そういうこと。さっすが話がわかる」

「最初から、そう言やいいのに。それならわかるけど……



でも、他にどうしようもないじゃない？　私だってやりたくないけどさー」
　ユズはそう言って、伸びをする。
「なにか方法があるはずなんだ。こんな時……ナオヤさんだったら、どうするか」
　アツロウが長考に入る。
「ま、いいけど。自分の分はちゃんとやってよね」
　ユズが、冷たい声で釘を刺した。

2

「本当にいいのかい？」
「ああ」
　アツロウ、不敵な顔で立つ。
「じゃぁいくよ。ジオ」
　少年の手にしたＣＯＭＰから紫電が放たれる。
「ぐぁぁぁあっっっ！」
　アツロウの全身がのけぞった。

　——五分前。
「なー。ジオで電撃かければ、充電できないかな」
「言うんじゃないかと思ったけど、本当に言ったわね」
「なんだよ？」
「あんた、発想のレベルが小学生よ、それ？　いくら充電池だからって外から電撃浴びせるだけで充電するわけないでしょ」
「やってみなくちゃわかんねぇだろ！」
「可能性はなくもないな」
「君までそういうこと言う？」
「普通ならもちろん無理だけどね。ＣＯＭＰにはハーモナイザ機能がある」
　ＣＯＭＰは、使用者と、その周辺に一種の防御効果を与える。ただの学生だった三人が、巨漢の悪魔と肉弾戦を行えたり、炎や氷を浴びても無事でいられるのは、このハーモナイザ機能の力だ。
「ハーモナイザ機能が働いて、電撃で充電できないかって？」
「そういうこと」

「うーん、そんなにうまくいくかなぁ？」
「ま、試してみるさ」
「いいけど、ＣＯＭＰ壊さないでよね」
「大丈夫だって」
そして現在。
――あまり大丈夫ではなさそうだな。
ジオをかけた少年は冷静に観察する。
「ど、どうだ？　充電率は？」
アツロウが白い煙を吐きながらささやく。
「うーん。変化はあるけど誤差の範囲だね」
充電池をノーパソにつないで残量検知ソフトを走らせる。
「よし。まだジオが足りないんだな。どんどん来い！」
「いいの？」
「あぁ。電圧上げながら、がんがん頼むぜ」
「わかった。ジオ！」

「ぐあっふ」
「ジオ」
「ぐがっ」
「ジオ……大丈夫？」
「ぐげげ……じゅうでんりつ、は？」
「うーん、まだみたい」
「も、もいっちょ。どんどん来い！」
「ジオ。ジオ。ジオ」
「ぐげげっががっぎごごっ」
「んー、まだだな」
「ごごごぎぎ？」
「うん、電圧あげてみるよ。電撃強化つけて、ジオ！」
「ぎゃんっ」
痙攣（けいれん）して床をはね回ってたアツロウは、ひときわ高く跳ね上がると、人形のようにゴトリと倒れた。
「おや……？」



「ちょ、ちょっとやりすぎじゃない？　途中から首が背中向いてたよ」
「大丈夫、まだ動いてるよ。ほら」
ぱくぱくと動くアツロウの口に耳を近づける。
「ディアだって。ユズ、頼むよ」
ユズは、一つため息をつくと回復呪文ディアを唱える。
「し、死ぬかと、けほっこほっ……」
アツロウは自分で吐いた煙にむせた。
「バカもほどほどにしないと死んじゃうよ、まったく」
「そ、それで、電池は？」
「効果はあったよ。三パーセント充電した。手回し発電機にして五〇秒分だね」
「……ぐはっ」
アツロウは力つきて倒れた。髪が白い。
「キミ、わりと容赦ないね……」
「そうかな？」

3

「やっぱ、いきなり魔法とか無いよなー。人間なんだからもっと頭使わないと」
「髪、まだ白いけど、服はわりかし平気なのよね。どうしてかしら」
「ハーモナイザーのせいかもしれないね」
「聞いてねーし。自分で作ればいいんだよな。充電器くらい」
「作るって、今から？」
「やったことねーけどさ、ここはアキバだぜ？　電子工作の工具とか材料とかあるだろ？　あとは調べればいいだけだ」
「アツロウ、あんたさー……」
あきれた声を出すユズを遮ってアツロウが続ける。
「あ、その顔、信用してないな？　見てろよ、すぐ作ってやるから。じゃ、いってくるぜ！」
閉まった扉に向かってユズがため息をついた。
「どうしたの？」
「時間かけりゃそりゃ多分、作れるだろうけどさ。あいつ、分かってるのかしら。あと五日で、脱出しないといけないのに……」

ユズたちのＣＯＭＰには未来を予知する機能がある。その機能によれば、あと五日で、封鎖された山手線圏内の全住人が死亡する。

その事実は、三人の心にも重くのしかかっている。

「まぁ、空いた時間にやるならいいんじゃないかな。電気が確保できれば、懐中電灯とか使えるしね。活動時間も増える」

「アツロウが悪いわけじゃないけどね。こんなことしてていいのかなって不安になっちゃって」

「なんとかなるんじゃないかな」

とぼけた声に、ユズはため息をついて、それでも微笑んだ。

「うん、なんとかなるといいね」

「それより僕は、一つ気になることがあるんだ」

「え？」

「あいつ、灯（あか）りもってったかな？」

停電した東京は、本当に暗い。

外はまだ日があるが、ビルの中は蝋燭をつけていないと一歩も歩けないほどだ。

期待を裏切らない地響き。そして男の悲鳴。長く尾を引く悲鳴が途切れ、何かがドサドサと崩れ落ちる音。

「た、だい、まー」

「お帰り。あ、額が割れて顔が真っ赤だよ。白髪に染まって、すっごい雰囲気でてる。蝋燭の光で見ると、由緒正しい日本の幽霊って感じだね」

「はいはい、ディアねディア」

ユズの手から淡い光があふれて、アツロウの顔を癒す。

「いやー、外真っ暗だわ。ＣＯＭＰのバックライトでいけるかと思ったら無理だった。停電を甘く見たらいけないぜ」

「そんなこと昨日でわかったでしょうが。ほんっとにバカなんだから」

昨日、はじめての停電の晩。夕方、道を歩いていたら、日がおちて、あっという間に、目の前さえ見えない闇の中で立ち往生した。

遠くの方でかすかに揺れる炎を追ううちに、公園についた時の安堵感は忘れない。

それに備えて、今日は、昼から寝場所を確保し、懐中電灯と乾電池、マッチとライターと蝋燭をそろえてきたわけだ。もちろん、忘れていっては意味がない。

「懐中電灯貸して。もう一度いってくるわ」

「待った。どうせなら、みんなで行こう。いいな？」

「いいわよ。アツロウ一人で行かせたら、またなんかひどいことになりそうだもの」
「へへっ。すまねー」
　幸い、人とも悪魔とも出会わずにすんだ。あちこち回って、集めたのは電子工作の書籍一式、それに、自転車と、電子部品と工具だった。
「原理は簡単さ。自転車のハブをＡＣモーターに繋げば、起電力が発生して……」
　ハンダゴテを片手に、アツロウがまくしたてる。
「それはいいけど、最近のハンダゴテって、電池で動くの？」
「まっさか、んなわけないだろ。これはこーして、コンセントに……あっ」
「……」
「……べ、別にハンダゴテくらいなくたってなんとかなるぜ！」
「いいけどねー」
「んじゃ、オレは向こうの部屋でやってるから」
「はいはい、先寝てるから、あんまうるさくしないでよね」
「わかったよ」
　専門書を運ぶアツロウが親指を立てて振り返る。

「あいつ、結構頑張るわね」
　寝袋の中で、ユズがつぶやいた。
「ん？」
「もっと早くあきらめるかと思ったけど……」
「自分の主義に関することだからね」
「プライドってことかな？　でも、こんなに苦労するなら、あと五日くらい、ハンドル回してもいいと思うんだけどな……」
「こだわりだからね。楽をするためなら、どんな苦労も厭(いと)わないってね」
「なにそれ、バッカみたい。おやすみ」
「おやすみ」

4

「できたぜ、できたぜ、おい」
　翌朝、二人はアツロウの歓喜の叫びにたたき起こされた。

「おはよー。って、あんた、目、真っ赤よ?」
「ん? あー、懐中電灯で本読んだからなー」
「もー。目悪くしても知らないよ?」
「まま、そんなのはいいからさ、見てくれよ、ほら」
「あ、おはよー。できたんだ」
「君、寝るときはヘッドフォンはずしたら?」
「だーっ。感動のないやつらだな、早く、こっち来いよ」
　隣室には、自転車があった。後ろのタイヤが外されて、ベルトがつながっている。
「んー、これ、動くの?」
「うごく、うごく。COMPの充電とか三〇分でOK」
「……へ、へー。って、それ、手回し発電機と変わってないじゃん!」
「しょうがねーだろ。アンペア下手にあげても壊れるんだからさ。その代わり、全員の分、つなげるぜ」
「あ、そうなんだ」
　自転車を全力で三〇分漕いで三人分……。私だったらハンドル回すな、と、ユズは思う。まぁアツロウが嬉しいならいいけど……。

「これでパソコンが使えるぜ! アニメとゲームが見放題、やり放題!」
「あー、あんたはそれが目当てか。アツロウ最低」
「パソコンがつながるってことは、電気ポットや炊飯器もつなげるんじゃないかな? 毎日、温かいご飯が食べられるよ」
「わっ。そうか! アツロウ最高!」
「へへっ。いくらでもほめてくれ!」
　アツロウが、やりとげた表情で、親指を立てる。

「うおおおおおおっ!」
　ほとばしる雄叫び。したたる汗。筋肉を震わせてアツロウが発電機を漕ぐ。
「アツロウ、電圧落ちてる。がんばって」
「おっしゃぁ!」
　急場しのぎで作った充電器の限界なのか、ちょっとでも力を抜くと、すぐに電圧が落ちてしまう。
「よかったね。うまくいって」
「うーん」

「どうしたの？」
「あのね、帰ってきてお茶飲めるようになったし、ご飯も食べられるし、結構感謝してるんだけどさ」
ユズは、微妙な顔をする。
「……確か楽するために、努力するとか言ってたよね」
「うん」
「なんか最初より苦労してるように見えるんだけど……」
「本人が満足してるからいいんじゃないかな。僕らは、こうしてお茶が飲めるわけだし……」
紅茶を飲みながら、いい笑顔の少年。
「キミ、わりとえぐいね」
「そうかな。あはは」
ユズは苦笑してアツロウに目をやる。
「どおおりゃぁぁぁぁぁぁぁ」
やり遂げた男の顔で、自転車を漕ぎ続けるアツロウ。
「男の子って、ほんっと、よくわかんないわ」





「ユズの戦い」

1

午後の渋谷。ショーウィンドウは割れていた。
地面に落ちた欠片で、走る少女の姿を映す。
無数の欠片が、無数のユズが歯を食いしばる。戦いを望んだわけじゃない。でも、戦う力があって嬉しい時もある。
空を仰ぎ、敵を睨む。頭上を旋回する鮮やかな黄と青の翼は、どこか熱帯の息吹を感じさせる。
霊鳥スパルナ。恐しいのは、その爪と嘴ではなく、翼と声だ。
ぎゃんぎゃんと声が響く。ガラスをこするような不快な響き、神経をぎりぎりと縛る麻痺の呪縛に打ち勝つようにユズは叫ぶ。
「行って、シーサー！」
唐獅子にも似た悪魔が、ユズのCOMPから現れる。
コウと吠えると、鬣から稲妻がほとばしり、霊鳥を打つ。
電撃に打たれ、鳥は空中で急停止。そのまま、びりびりと振動する。やがて、くしゃりと音を立てて破裂した。



降り注ぐ泥色の飛沫(しぶき)を、ユズは敢えてよけなかった。顔に張り付く生臭い汚泥。

「よかった。だ、だいじょうぶ？」

ユズの半分くらいの年の女の子。大人びた白いドレスは、封鎖の数日で煤(すす)けてしまっている。少女に声をかけながらも、四方に気を配る。悪魔は、もういない。アツロウ達も、ちょうど向こうで敵を倒したところだ。

かすかに少女が首を傾ける。無表情な視線。

「あ、ごめん……」

霊鳥スパルナの鳴き声は、麻痺を及ぼす。ユズがかけつけるのが遅かったら、この子は、そのまま嘴(くちばし)に目をえぐられていたに違いない。

治癒の呪文を受けて少女が動いた。顔に表情が戻り、瞳に表情が戻る。

「あ……っあぁっ」

「ん、なあに？」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁっ！」

顔をのぞきこむユズに少女は渾身の悲鳴をあげた。応えるようにシーサーが吠えた。

少女が走る。身を翻(ひるがえ)して。

「あ……ちょっと」

追おうとして、割れ残ったショーウィンドウのに自分の顔が映った。
ろくに洗えてない髪。汚れた顔と目の下のくま。なにより、悪魔の血肉を浴びて、まだらになった顔。
（……これじゃ、逃げるよね）
シーサーが、悲しく吠える。
「おまえのせいじゃないよ」
そう声をかけてシーサーをＣＯＭＰへ戻す。
「ふぅ……」
悪魔は、倒されるとすぐ煙となって消える。だから、たとえ血肉を頭からかぶってもあわてることはない。待っていればすぐに痕跡は消える。
この汚れた気分以外は。
ポケットティッシュを取り出して、のろのろと顔をぬぐう。
「おーい、大丈夫か？」
アツロウが近づいてきた。物理攻撃をメインとするアツロウは、ユズ以上に返り血を浴びている。顔から胸から緑だったり紫だったりする。が、あまり、それを気にした様子もない。

（男の子だからかな）
男の子は泥んこでもさまになる。女の子はそうはいかない。
「災難だったね」
ユズの肩に手が置かれる。
「あ、見てた？」
「子供が飛び出してったところまで。あ、迷子になってないから安心して。すぐに両親と会えてたよ」
「そっか。ありがと」
ヘッドフォンの彼は、魔法が得意なせいか、悪魔の使い方がうまいせいか、まったく返り血を浴びてない。
「ん、どうかしたの？」
アツロウが口をはさむ。
「ユズがね。女の子を助けたんだけど、その女の子が悪魔を怖がってね」
そうじゃないよ。怖いのは、汚いのはシーサーじゃない。
「そっか。ムズカシーよなー。でも、助かってよかったよな」
不器用な慰（なぐさ）めの言葉が、ちょっと嬉しかった。

「シャワー浴びたいなー。熱いシャワー」
ユズがそう言うと、男二人が困ったように顔を見合わせる。
『シャワーが浴びたい』は、封鎖が始まってからのユズの口癖みたいなものだ。けれど、今日のユズは、口癖に終わらせるつもりはなかった。

2.

「ふおぁぁぁ、うっしゃ、おっしゃ、うっしゃ、おいしゃ！」
「というわけで、シャワー作るから手伝って」
「って、本気かよ⁉」
「うっしゃ、おっしゃ、よっしゃ、ほっしゃ！」
「なによ、電気が作れたんだから、シャワーだって作れてもいいじゃない」
「そういやそうかな」
「うっしゃ、おっしゃ、わっしゃ、どっせい！」
「ちょっと汗くさい電気だけどね」
秋葉原の三人のアジト。電灯が煌々（こうこう）とついている。発電自転車の数も増えて三台になった。

「ふおぁぁぁ、うっしゃ、おっしゃ、うっしゃ、おいしゃ！」
発電機を漕いでいるのは、筋骨たくましい半裸の男たち……ＣＯＭＰで呼び出した闘鬼たちである。別に自転車を人間が漕ぐ必要はない。
それを思いついた時、アツロウは、大得意だったが、ユズは首を傾げた。悪魔にやらせることを最初から思いついていたら、自転車もいらなかったわけで。相変わらず、頭がいいのか間抜けなのか、よくわからない。多分、両方なんだろう。
「シャワーを作るとすると、水と熱だね。熱は……電力でもなんとかなるかな」
「量にもよるな。電気で風呂わかすのは結構キツいぜ？」
「そっかー、うーん」
ユズは考える。
「はぁー、うっしゃ、おっしゃ、うっしゃ、おいしゃ」
野太い男たちの気合が、最初にビルに轟いた時は、ユズもずいぶん閉口した。だが、かといって声がかわいい妖精や女神に自転車を漕がせるのも、間違ってる気がするということで、このままになっている。
慣れというのは怖いもので、今では、意識しないと、ほとんど耳にも入らない。

そんなことを思い出して、ふと気づく。
「あ、そうか。今度こそ、悪魔の力っていうか、魔法、使えないかな？」
「あ、ブフにアギか」
「うん。ジオの時はうまくいかなかったけど、今度はお湯作るだけだし」
「いいアイディアだね。やってみよう」
「あとは風呂桶代わりのものがいるな。なんか探してくるわ」
「うん、ふたりともありがとう！」
ユズは大きく頭をさげた。

実験は、思ったより簡単に進んだ。ブフで物体を氷結させ、そこにアギを撃つことで、お湯を作るのは簡単だった。
アツロウが運んできたドラム缶と併せて、簡単なお風呂が完成する。
最初は温度調整に手間取ったが、焼いた石と凍らせた石を別に用意しておくことで、快適な湯ができるようになった。
「あー、この湯気。なんか触ってるだけで生き返るカンジー」
「よかったな」

アツロウは汗をぬぐいながら、笑った。
「アツロウもありがとね。重かったでしょ。先、入る？」
「いやいやここは、レディファーストでしょ。お先にどうぞ」
「ありがとう……」
路地に設置したドラム缶。カーテンをかけて、簡易風呂場ができる。
ユズは、ありがたく一番湯をいただいた。

「やぁ、おつかれさま」
アツロウの肩が叩かれる。
「おう。ソデコもだいぶ凹んでたからな。うまくいってよかった」
「重かったでしょ。悪魔に運んでもらえばよかったのに」
「あ、そうか。って、先言ってくれよ」
「ごめんごめん」
「ま、でも、無理じゃね？　昼間っから悪魔従えて歩いてたら……」
女の子が逃げ出した時のユズの顔を思い出す。
その子も怖かったんだろう。そしてユズも。

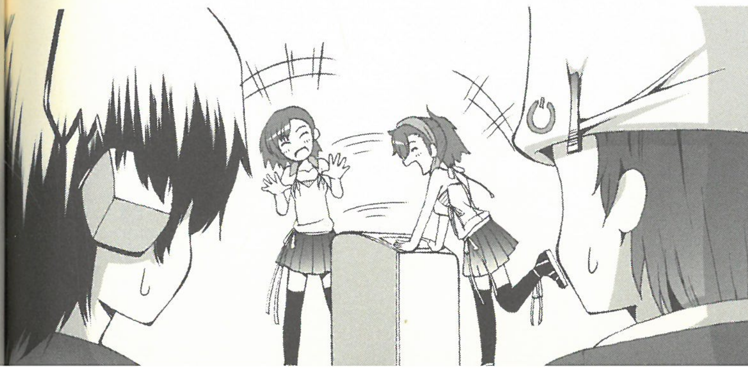
「悪魔使いは怖がられるか。なんでだろうね」
「ん、なに言ってるんだ？」
「あぁごめん。ちょっとね」
ヘッドフォンの少年は笑う。
アツロウにとって、彼は、友であり同級生であり、封鎖地域に来てかは、頼りになる相棒だった。ユズが、熱い目で見る時だけは気に食わなくなるが、それ以外は文句がない親友だ。
けれど時々。ほんの一瞬、彼との距離が測りがたくなる。毎日学校で顔を合わせていた同級生ではなく、ずっと年を取った存在に思える時がある。
たとえば、今の微笑み。
……ま、気のせいだろうけどな。
アツロウは疑問を頭にしまい込んだ。

「はぁぁぁ、極楽ぅ～」
湯の熱さが全身に染み込む感触をユズは満喫した。
体の疲れが湯の中に溶けだし、些細な悩みがどうでもよくなる。体を洗い、髪を洗

い、もう一度湯につかる。全身さっぱりしてから、湯をあがる。
服を着ようとして、ふと汗くささに気づく。
下着はさすがに替えたが、その上は替えがない。
「……洗濯したいな。せっけんでも大丈夫かな？」
そこまで考えて、ふと思いつく。

「お風呂、お先に～」
「おう、どうだった？」
「も、サイコー。アツロウもどうぞ。あ、それと一つ思いついたんだけど。お水と電気があるんだから、洗濯機動くよね。洗濯もしちゃわない？」
「いいアイディアだね。家電売場から借りてこよう」
「うえー。また荷物運びかよ」
「日が暮れてからいこう。そうしたら悪魔に運んでもらえる」
「あ、それ、ナイスアイディア！」
家電売場は七階にあった。悪魔の力を借りなければ、エレベーターの止まった七階

から洗濯機をおろすのは三人で力を合わせても難しかったかもしれない。
　実際には、鬼神ウベルリが一人で担いで下りた。
　例のアジトへ運び込めば、あとは簡単だった。
「うわー、回ってるー」
「そりゃ洗濯機だからな」
「回ってるー。うれしーなー。ぐるぐる、ぐーるぐるー」
「あの、ソデコさん？」
「なーによー」
「こいつは全自動洗濯機なんだから、そんな見つめてなくてもいいんだぜ？」
「私は、文明の証を楽しんでるの。アンタが、毎晩いじってるノーパソと同じよ」
「あ、それ一緒にされると傷つくな」
「まぁまぁ、楽しいならいいんじゃない？」
　ブザーが鳴って洗濯の終了を告げる。



「乾燥機ー！　かんそうきー！　ぽかぽかのふわふわふわー」
　歌うようにユズが服を乾燥機に入れる。
「……大丈夫か、あれ。キャラ変わってんぞ」
「大丈夫だよ、たぶん」
　少年が微笑んだ。
　清潔感に包まれながら、ユズは寝袋に入った。隣室からは、闘鬼たちの気合と、タイプ音が聞こえてくる。アツロウが、夜更かししてるのだ。どうせ、えっちなゲームでもしてるか、アニメのＤＶＤでも見ているのだろう。
　昨日までは、そんな些細なことでいらいらしたが、今日は大丈夫だ。いやなこともあった気がするが、みんな忘れた。暖かいお風呂ときれいな服。これがあれば大丈夫。
　谷川柚子は、いやなこととも、つらいこととも戦える。
　夢を見た。
　昼間の少女。白いドレス。よそ行きの服。楽しみにしていたおでかけ。突然の停電

と封鎖。悪魔達の絶え間ない襲撃。安まらない心。汚れた白いドレス……。
　そしてユズは目を覚ました。
　自分以外にも恵まれてない人がたくさんいる。目を向ける余裕がなかった、当たり前の事実。
　けれど、今は違う。戦える。谷川柚子が谷川柚子であるために。

「うーす、おはよー」
　アツロウが眠そうな目をこすって起きてくる。
「おはよー。ね、思ったんだけどさ」
　ユズは、小さく息を吸い込む。
「洗濯とかお風呂とかほしいのって私たちだけじゃないよね」
「……んー、まぁな」
「もっと多くの人、集められないかな」
「気持ちはわかるけど、焼け石に水じゃねぇか？」
「えーとね。そうすることで、悪魔使いの評判もよくなるかなって思って」

「いいアイディアだと思うけど、やるとしたら一日や二日じゃおわんねーよな……」
「そっか。そだね……」
　破滅の運命は近く、ユズ達に残された時間は少ない。
「それなんだけどね」
「あ、おはよ」
　ヘッドフォンの少年は、軽く手をあげて応える。
「昨日からさ。皆の余命が見えないんだよ」
「え？」
「なんだそりゃ？」
　ＣＯＭＰの持つ未来予知機能の一つが、余命告知機能だ。パーティリーダーには、道行く人間の推定余命が表示される。それが見えなくなっている。
「それって、運命が変わってきてるってこと？」
「そういうことなら、やってみようぜ。ユズ湯の開店だ！」
「ちょっと、なに、そのダサい名前」
「体に良さそうな名前だね。ユズ湯」
「だろだろ？　ユズ湯にきーまりっ」

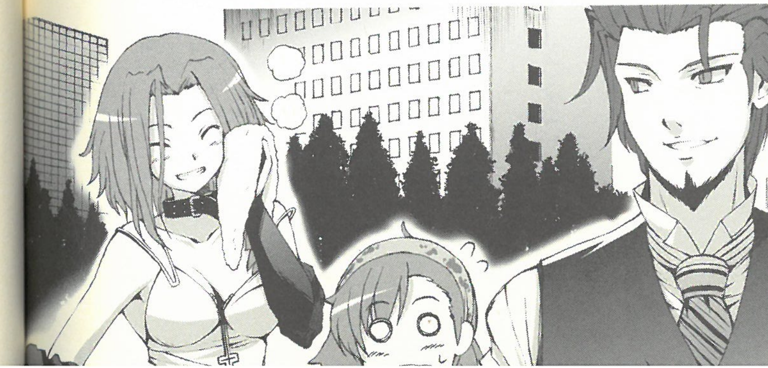
「もうっ。そうじゃなくて、三人でやるんだから私だけの名前ってのも……」
「それならユズでいいと思うよ」
「あぁ。ソデコがいなかったら、こんなこと思いつかなかったからな」
「わ、私だけじゃ何もできなかったし……」
「こういうのは女の子の名前じゃないとね。アツロウ湯って入りたくないしさ」
「うわ、それ、俺もイヤだ」
「はい。じゃぁ、決まり」
少年が手を打って、ユズ湯の開店が決定した。

3

「いらっしゃいー。お風呂と洗濯のユズ湯へどうぞー」
アツロウが声を張り上げる。
「って、客来ねぇなぁ……」
「まぁ僕たち怪しいからねぇ」
のんびりとした声で少年が応える。

「そりゃそうか……うーん、公園にでも声かけにいこうか」
「大丈夫。きっとなんとかなるよ」
「お、ソデコ、えらい前向きだな」
「へへー。我に秘策あり。なんちゃって」
『秘策』は、午後になって現れた。
「ハァイ。面白そうなことやってるじゃない」
「ハルさん、ジンさん、来てくれたんですね！」
ユズの顔が輝く。
「違うだろ、ユズ。そこは」
ヘッドフォンの少年が執事のように腕を折り曲げて会釈した。
「ユズ湯へようこそ！」
「熱い風呂は、日本の心だね！」
さっぱりしたハルが拳を握って語る。
「同感だね」
ジンが深くうなずく。

「アタシもロッカーの前に、一人の日本人だったってことか……」
「そ、そうなんですか」
ユズは、敬愛するロックスターを前に緊張気味だ。
「で、アタシは何をすりゃいいんだい？　今なら、ロッカーのソウルでもなんでも売ってやるよ？」
「そ、それは売っちゃだめー」
あわてるユズの代わりにアツロウが説明する。
「え、えーと、オレら、今日、ユズ湯を始めたばっかなんですけど、お客さんとか来なくて……」
「そういうことかい」
ハルは、大きくうなずいた。
「なんだい、いい湯だな、とか歌えばいいのかい？」
「あ、あの……」
「冗談だよ」
ジンが微笑んだ。



ノイジーなギターが風を刻む。そこにハルの歌声が乗るとハーモニーが生まれる。間近で聞く声は、ほとんど突風のようにユズを打った。あっという間に、人が集まっていく。
「すっごーい。さすがハル様」
「それもあるけど、やっぱアンプの音って珍しいもんな。人集めには最適だな」
「んー、確かにそうだけどさー。その言い方って……」
「ここが洗濯場かい？」
そう言ってジンが入ってくる。
「ういっす。お疲れさまです」
アツロウが頭を下げる。
「さすがだね。悪魔を使って電気を起こすとは。自分が年取ったって気がするよ」
「へへっ。ありがとうございます」
「外のお客さんだけどね。今、五〇人くらいだ。君たち、五〇人のお客をさばいたこと、あるかい？」
「え、あ、あの……」

「ない、よな？」

「ご、ごめんなさい。私たち深く考えないではじめちゃって……」

「いいよ、いいよ、それが若さの特権ってやつだ。そのために大人がいるんだしね」

「あ、ありがとうございます」

「なぁに、風呂代だ。あ、そうそう。風呂代といえば、君たち、代価はなににするんだい？」

「え？」

「お金がほしいというわけじゃなさそうだし、ハルみたいに歌ってもらうということでもないよな」

「よ、よく考えてませんでした。みんな便利になったらいいかなーって」

「なるほど。便利にね」

かわいそうなほどに緊張したユズに、ジンは微笑んだ。

ジンの手際はさすがだった。

風呂と洗濯機については一日一〇人限定としたが、それでも、ユズたちは応対に目を回した。代価については、名簿を用意して名前を書いてもらい、「なんでもいいか

ら、ユズ湯に協力してもらう」ということにした。

力がある人には、ユズ湯に必要なもの……ドラム缶や発電用の自転車を探してきてもらう。余ってる食料の差し入れはありがたくいただく。特になにもなければ、口コミでユズ湯を広めてもらう。

「えっと名簿は何のためですか？」

「人間、自分の名前を名乗ると、悪いことはしにくいのさ。無料のサービスは、どうしても無責任になるからね」

ジンは、ユズの疑問に静かに応えた。

「おねーちゃん、お風呂、ありがとう」

小さな子供が手を振る。ユズも笑顔で手を振り返す。あの時の、あのドレスの子はいないけど、いつか会えたらと思って手を振る。

「繁盛してるね。調子はどうだい？」

「あ、ジンさん。こんにちは」

ユズは頭を下げる。

「今日から、限定を二〇組にしてますけど、なんとかなってます」

「そうか。それはよかった。ハルも、また歌いたがってたよ」
「い、いつでも歓迎です！」
「で、いつ、公開するんだい？」
「そ、そうですね。今日あたりにでも……」
ユズが、うつむく。
ユズ湯が悪魔の力を借りていること。それは、まだ、公になっていない。
「どう言ったら、一番わかってもらえるのか……」
「難しいね。それこそ、ハルの力を借りたらどうかな」
「ハルさんの？」
「あぁ。ハルのライブをやって、その締めに発表すればいい。そうすれば皆も受け止めやすいだろう」
「そこまで頼っていいんでしょうか……」
「いいに決まってる。……とすると、善は急げだな。探してくるよ」
「あ、ありがとうございます。いってらっしゃい！」
だが、店を離れたことをジンは後悔することになる。

ユズ湯の前には、待合所ができていた。オープンカフェから借りたテーブルと椅子を並べただけの簡単な作りだ。風呂や洗濯の順番を待つだけではなく、人々の交流の場として機能し始めていた。
これを提案して、作ってくれたのもユズ湯の客だ。
片隅には伝言板があり、配給食料の情報交換やら物々交換やら、単なる落書きやらが書き込まれている。ハルの歌声はないが、ＣＤコンポから曲が流れており、知らない人も足を止めてゆく。
「はふ～」
洗濯所の受付を一旦終えて、ユズが椅子に座る。
「おつかれさま」
「よっ」
アツロウたちも座っていた。
「あ、二人ともお疲れ。そっちはどう？」
「うん。大丈夫」
「接客業って結構ハマるよな」
能天気なアツロウ。

「あ、そうだ。さっきジンさんがね」
ユズは、ハルの手伝いのことを説明する。
「それはいいアイディアだね」
「だな。ハルさんに任せとけば間違いないや」
「そだねー」
屈託なく笑う三人の前を、スケボーに乗った少年が滑ってゆく。
このところ、毎日顔を出している小学生だ。
ユズの前で、ジャンプを決め、着地に……失敗。
「あ、ボク、大丈夫？」
「ほっとけほっとけ」
「なによ、可哀想じゃない」
アツロウは首を振る。小学生とはいえど男だ。気を引こうとしたユズに慰められていい気持ちのはずがない。
小さく揺れる肩にユズが触れ、それがきっかけで泣き出した。
「あ、ボク、痛かった？」
ユズが言葉をかけると少年は大泣きした。

（わかる。わかるぞ少年）
アツロウは腕を組む。痛いから泣くのではない。情けないから泣くのだ。
「アツロウ……！」
小さく鋭い声がアツロウを引き戻した。
ヘッドフォンの少年が厳しい顔で空をにらんでいる。
「ほーら、痛いの痛いの、飛んでけー」
子供を抱き上げて、おまじないをしてあげる。泣きじゃくりながら身を任せる子供の重みを感じると、ユズは少しだけ心が軽くなった。
「さ、もう大丈夫？」
不意に、ユズの目の前が暗くなる。頭上から影が落ちたのだ。風を切り裂く羽音に、ユズが、ほとんど無意識にＣＯＭＰを取り出す。
ぎゃんぎゃんと、悪魔が鳴く。子供がユズにしがみつく。人々が悲鳴を上げる。
悪魔。
（助けなきゃ）
でも、どうやって？　今、ＣＯＭＰを使えば……。
顔面に鋭い衝撃。ユズの体が転がる。



ユズを蹴倒したスパルナが、ゆっくりと空中で旋回し、今度は、子供を狙う。
ユズは立ち上がってCOMPを開いた。アツロウたちの視線が背に感じられた。
（今、悪魔を呼んでいいのか？　全部捨てることになるぞ）
（いい！　だから、手伝って）
ユズは背中で応えて、悪魔を召還する。
「来て、シーサー！」
唐獅子にも似た悪魔が現れ、大きく吠える。人々の悲鳴がさらに大きくなる。
戦闘は、あの日の写しのように進んだ。シーサーの電撃がスパルナを捉え、血と臓物が広く散らばる。
短く一方的な戦闘を終えて、ユズは、おそるおそる人々を見渡す。
さっきまであれほどいた客たちは、ほとんど姿を消していた。残っているものも、単に逃げ遅れたというだけだろう。
「あ、あの……」
声を出す。人々が一歩下がる。急に皆、目をそらして帰り支度を始める。
かかわり合いになりたくないという意志が、はっきりと、感じられた。

「ご、ごめんなさい。嘘つくつもりじゃ、なかったんです……」
短い謝罪を言い終わる頃には、人の姿は消えていた。
（あ、そうだ、あの子……）
ユズがかばった子供の姿は、なかった。スケボーだけが転がっていた。
「悪魔と出会って汚れた時はお風呂が一番。ユズ湯へどうぞ。洗濯もやっております」
無人の待合所に向かって、悲劇をしめくくるように、少年がつぶやいた。
「なぁ、オレ、なんて言っていいのかわからないけど……」
「ありがとうね。でも、私、大丈夫だよ」
ユズは微笑んでみせる。
「だって、ずっと、こうやってお風呂屋さんしてるわけにもいかないでしょ？　そう考えたら、そろそろ畳んでもいいかなって」
「お、おまえ、それでいいのかよ？」
「いいのもなにも、しかたないしさ」
「で、でも」
「でも、なによ。どうかしたくても、どうしようもないじゃない！」

ユズは、息を止めて、涙をぬぐう。
「ごめんね、アツロウ……」
「いや……」
気まずい雰囲気で黙り込む。
「二人とも。お風呂わいたよ」
能天気な口調でヘッドフォンの少年が割り込んだ。
「やり場のないストレスを抱えてる時は、お風呂だよね。特に状況は好転しないけど、先延ばしにはできるよ」
「なんだ、そりゃ」
「ありがとう」
アツロウがちょっとだけ微笑む。
ユズも微笑む。つらくて、悲しいけど、お風呂はある。この前とは、そこが違う。

4

明日から引き払って移動。今日が電気のある最後の晩かもしれない。

「アツロウ、なんかゲームない？　えっちなゲームとか隠してるんでしょ？」
「な、なにいってんだよ！」
　アツロウがノーパソの画面を隠す。
「暇なのよ。見せなさいよ」
　押し退けるようにして覗き込んだノートには、そっけない英字の羅列が並んでいた。
「なにこれ。プログラム？」
「だーっ。見るなよ。恥ずかしい」
「……恥ずかしいプログラムなの？」
「ぐはっ！」
　悶絶して倒れるアツロウ。
「作りかけのを見られるのが恥ずかしいんじゃないかな」
　口を挟む少年。
「そういうものなの？」
「そう、たとえるならお化粧の途中を好きな人に覗かれる、みたいな」
「……あー、それは恥ずかしいわ。ゴメンね♪　アツロウ」
　ぽんぽんと肩を叩くユズ。

（こ、こいつ、また、なんかノリが違うぞ？）
（今夜は飲むぞーって、さっき言ってたよ）
（酔っぱらいかよ。って、酒なんか持ってきてないだろ）
（紅茶の緑茶割り飲んでたけど……もしかして、あれで酔っぱらったのかな？）
（ま、無理もねぇか。俺だって酔っぱらえるんなら、酔っぱらいたいもんなー）
「そこ、何、こそこそ話してるのー！」
「す、すいませんっ！」
「ゲーム機ないけど、トランプならあるよ？」
「大富豪やろーだいふごー。アタシつよいよー？」
「よっしゃ。やってやるぜ。罰ゲームつきにしようぜ」
「脱衣大富豪？」
「さらっと恐いことというなよ……」
「いいよーだついでもー」
「だーっ！　だめだ。だめです！」
「なんでだーアツロウ脱げー！」
「やめろ。引っ張るなっ。って、そこ淡々とカード配るなー」

5

目覚めると、手にカードを握っていた。男ふたりは、寝袋でいびきをかいている。
「……あ、れ？」
お茶が飲めるのも今日が最後と思って、夜更かしして騒いで……。
「ん？」
なんか、脳裏を、不穏な単語がかすめる。脱衣とかなんとか……。思い出さないほうがいい気がしてやり過ごす。
「うーーん……」
のびをして立ち上がる。時計を見て気づく。
「あ、もう、こんな時間。お店開けないと……」
ユズは走りだす。走り出して部屋を出た瞬間、男たちが目を開ける。寝たふりをする理由が男たちにはあった。
「……ユズ、大富豪強いね。身ぐるみはがされちゃったね」
「……」

「酔っぱらってるから弱いと思ったんだけどねー」
「おまえ、案外、腹黒いよなー。いいから服探そうぜ……」

外に出て日差しを浴びて、ようやくユズは思い出す。
そうか。ユズ湯はおしまいだったんだ……。
「閉店のお知らせ、作ったほうがいいかな……」
そう思って外にでると、人だかりがしていた。
「おーい、ユズちゃん、遅いよー」
「みんな抽選待ってたんだよ？」
「あ、ごめんなさい。い、いらっしゃいませ」
反射的にお辞儀してからユズは悩む。
電話やメール、ニュースがあるわけじゃない。昨日のことが伝わってないお客さんもたくさんいるだろう。でも、騙すことはできない……。
「ユズ湯は今日で……」
「悪魔使ってるから閉店とか言わないでくれよ？」
「……え？」



「話は聞いたよ。ユズ湯が襲われたけど、ユズちゃんが悪魔を撃退してくれたって」
「悪魔使いだからって悪いやつってこともねぇよな」
客たちが口々にうなずく。
「あの、でも……」
「ていうか、まぁ、俺たち、薄々気づいてたし？」
「そ、そうなんですか⁉」
「いやその……。風呂入ってると、うっ！　とか、はっ！　とか、聞こえてくるから
なぁ。なんか怪しいな、くらいは……」
「あ、そ、そうですよね……あはは」
「昨日はごめんな。俺ら怖くて逃げちゃったけど、ユズちゃんが怖いわけじゃないん
だぜ？」
「いえ、そんな……」
「ま、細けぇことはいいから、店開き。なっ？」
「は、はい」
封鎖された秋葉原の片隅。小さなビルの前に、ちょっとした憩いの広場がある。

テーブルと椅子が並べられて、多くの人が、ちょっとした休憩のために訪れる。抽選に当たれば、お風呂や洗濯も頼めるし、日によっては、あのD－VAのハルのライブも聞けるのだ。

電信柱の影に、子供が一人。スケボーを胸に抱いて、難しい顔で発声練習している。スケボーに隠すようにして、どこで手に入れたのか小さな小さな花束を持っている。

その横を通り過ぎる親子連れ。

両親の間を、小さな女の子が歩いている。服は灰色のジャージ。政府が投下した配給の服だが、胸に大切そうに白いドレスを握りしめている。

少女が両親の手を振りきって走り出す。

ふと、ユズが、その顔を見つけて微笑む。

「いらっしゃいませ！　ユズ湯へようこそ」



「ガイドーの生き様」

1

日の暮れた秋葉原。光という光のない真の闇。頼りになる星灯りも、空の汚れに遮られ届かない。

わずかに、その一角が灯台のように白く光っていた。

ユズ湯である。営業終了の札がでているが、テラスには何人かが残っている。

皆、一様に無言で、目だけが互いの様子をうかがっている。うち二人は、手元にCOMPを置いて敵意を隠そうともしない。

「あの、ほ、本日はようこそいらっしゃいました」

マイクを握ったユズが、ひきつった笑顔で声をかける。

と、難しい顔の男女たちが一斉にユズへ振り向いた。

今のこの東京で、肉声ではない、スピーカーからの声には、それだけの力があった。

「で、このメンツはいったいなんだ？」

ひときわガラの悪い男が、ユズを睨む。

「あ、あの、ゴメンナサイ……」
「ユズさん、おちついて」
眼鏡の真面目そうな少年が割ってはいる。
「どういう用だか知らないけれど、こんな乱暴者を呼ばなくてもよかったのに」
「んだ、こら？」
「自分が乱暴でないとでも言うつもりか、カイドー」
「乱暴だったらなんだってんだ？」
カイドーがＣＯＭＰを握る。
「面白い」
眼鏡の少年……ケイスケもＣＯＭＰに手をやる。
（あー、もうどうしよう）
泣きそうなユズの手からマイクが取られる。
「今日、呼んだのは、この場の全員にとって重要な用件があるからです」
ヘッドフォンの少年が、よく通る声で言った。
カイドーとケイスケが睨みあいをやめて振り向く。
「重要な……」

「用件だって？」
ハモった二人が、互いを睨みあってからそっぽを向く。
「はい。ユズ湯の閉鎖についてです」
たちまち、あたりに悲鳴が満ちた。
「この場に来てくれた方は、皆、ユズ湯の利用者です。もう一つ、集合のメールが届いたということは、悪魔使いでもあります」
静まるのを待って少年が言葉を継ぐ。
「オレたちも、いつまでも、ユズ湯をやっているわけにはいきません。封鎖を解くか、脱出するために調べたいことや、やりたいことが色々あります」
「で、でも、急すぎるよー」
眼鏡のコスプレ少女が悲鳴のような声をあげる。
「だ、誰かに代わってもらうわけにはいかないの？」
「ミドリさん、そうしたいですが、ユズ湯は、発電と湯沸かしに、悪魔の力を使っています。ふつうの人には代わってもらえないんですよ」
「そ、そっかー」

「なるほど、そういうことだね」
ケイスケが深くうなずく。
「つまり、代われるのは、この場にいる誰かくらいってことか」
「そういうことになります」
「その件、オレが代わってもいい」
「オレが舎弟に頼んでやってもいいぜ」
二人の声がかぶり、また睨み合いが始まる。
「ボクがユズ湯を継ぐなら、このような乱暴者を寄せ付けないことを約束しよう」
「ほー。テメェにそれができんのか？」
「今から脅迫かい？」
「テメェは何もわかっちゃいねぇ」
カイドーが鼻で笑う。ケイスケが無言でにらみかえす。
「カイドーさん、よかったら言葉を続けてください」
マイクの声が割り込んだ。
「今、ここいらのヤクザってヤクザが、ユズ湯を襲う計画を立ててる」
カイドーの声は、マイクもなしに、深く響いた。

「うそ……」
ユズが小さくつぶやく。
「嘘じゃねぇさ。金が動くところに集まるのがあいつらだ。誰が継ぐにしろ、そいつはヤクザの群から湯を守れる力がいる」
「で、でも、今までヤクザ屋さんとか来なかったし……」
つぶやくユズ。
「たぶん、お風呂を荒らされたくない常連さんがいたんだろうね」
少年の言葉に、カイドーとケイスケ、ジンが、微妙に目線をそらした。
「不本意ながら、ぼくもカイドーの意見に賛成だ。今の閉鎖空間で発電機を守り抜くのには、力がいる。でも強いだけの力じゃだめだ」
ケイスケはカイドーを一瞥する。
「力を使うことの意味を知っている人じゃないと」
「おぼっちゃまに、力の意味なんてわかってたまるかよ」
「君のような不良に……」
「それなんだけどさー」
マイクが音量をあげて割り込む。アツロウだ。

「ちょっとみんな、COMP見てくれる？」
めいめいがCOMPを開く。
「なんだこりゃ。緊急メールおよびBBS機能追加のお知らせ……？」
「Fromアツロウだって？」
「へへっ。いいだろ？」
アツロウが鼻の下をこする。
「電気のおかげで、ノーパソが使えるようになったからな。ちょっと解析してみたんだぜ？」
「解析って、おまえ……」
カイドーが気味の悪そうな顔でアツロウを見る。
「最初はさ。ほら。チートコードでレベルあげるみたいに悪魔のデータとかいじれないかなーと思ったけど、さすがに無理だった。代わりに、昼でも出せるメールと、情報共有の掲示板作ってみたぜ」
「掲示板かい？」
黙ってみていたジンが、はじめて口を開く。
「ええ。あると便利かなと思って。そこに、発電機の作り方とか、ユズ湯のノウハウ

全部のっけてます」
「お、ほんとだ。こりゃありがたい。うちでも一台ほしいと思ってたんだ」
「なるほど」
ケイスケが、頷く。
「ユズ湯が襲われやすいのは、唯一の発電機の持ち主だからだ。悪魔使いなら誰でも作れるというなら危険は減るわけだ」
「そう、うまくいくかっての」
カイドーが吐き捨てるように言う。
「甘ちゃんばかりで反吐(へど)がでらぁ」
「オレたちは甘いですか？」
ヘッドフォンの少年が、静かに語りかける。
「甘めぇ。掲示板で、みんな仲良くなんて、そううまくいくかよ。情報交換ってのは、つまりテメェの手札をさらすことだ。誰がそんなことするかよ」



「ボクはする。悪魔の能力に合体の法則。共有したほうがいい情報はたくさんある」
ケイスケが立つ。
「そうかい。じゃぁテメェのもってる悪魔の能力と弱点を書き込んでくれよ。オレが殺しに行ってやるから」
「く、それは……」
「できるか？　できねぇだろ。大切なことは隠されてクズみたいな話ばっか集まって、嘘ついて、騙して、自分だけ得しようってやつらがでる」
カイドーは、一同の視線を受けて、揺るがずに立つ。
「人間、騙して奪ってが当たり前だ。仲良しゴッコなんざ、そのことがわかってねぇ甘ちゃんだってんだよ」
「罪には罰があればいいだけだ。最初からあきらめるほうが言い訳だろう」
ケイスケが静かに言う。
「それがテメェのスジか」
カイドーが凶暴に笑う。
「ぼくは秩序を守る。おまえがその敵となるというなら……ヤマ！」
ついにケイスケがＣＯＭＰを開く。背後に警策をもった大きな人の影が現れる。死者の罪を裁き罰を与える冥府の神ヤマ。

「上等っ。パズス！」
カイドーの声と共に熱風が吹き荒れ、翼を持つ邪神の姿となる。
「ど、どうしよう」
ユズがあわてた時、のんびりとした声がかかった。
「こんにちは、遅れてごめんなさい……あ、あの、どうかしたの？」
気のよさそうな白衣の女性が現れると、カイドーが急にひるんだ。ＣＯＭＰを畳む。と同時に、パズスの姿が消える。
「マリ先生、いいところに！」
アツロウが安堵の吐息をもらす。
「あら、アツロウ君。今日は何のご用？　あら、ケイスケ君、どうしたの？」
「なんでもありません」
ケイスケも、激情にかられたことを恥じるようにＣＯＭＰを畳む。
「マリ姉、わりぃ。先、抜けさせてもらうぜ」
カイドーはマリに背を向ける。
「ま、甘ちゃん同士仲良くやってくれ」

そう言って男は、夜の闇に消えた。

2

「おつかれー。マリ先生が引き受けてくれて助かったな」
「うん。ミドリさんとケイスケ君も手伝ってくれるようだし、ユズ湯も安泰だね」
「そ、そうね……」
「元気ないな、ソデコ」
　ことさら冗談めかしたアツロウの声。
「カイドーみたいな野蛮人の言うこと、気にすんなよ」
「う、うん……ごめんね。なんか、凹んでて」
「気にすんなって。おやすみ」
「おやすみー」
　そうは言ったものの、その晩ユズは眠れなかった。
　カイドーは掲示板で悪いことをする人がいるといった。
　ケイスケは悪いことをする人は罰すればいいといった。

　自分は……谷川柚子はどちらもいやだ。でも、どうしたらいいかはわからない。
……やっぱり私って甘いんだよね。
　それが眠れないユズの出した結論だった。

3

「おう、三人そろって何しにきた?」
　カイドーに、にらまれて、ユズはすくみあがった。
「おびえんなよっ」
「ご、ごめんなさい」
「別に取って食ったりしねーからよ。目つきが悪りーのはうまれつきだ。で、ほんとになんの用だ?」
　ユズは深呼吸する。無理を言って、ふたりについてきてもらったのはユズだ。
　カイドーともう一度話をしたかった。
「あのね。昨日のカイドーの話、もう少し聞きたくて。ほら、ケイスケ君がいて喧嘩になっちゃったから……」

「あー昨日か。なんか言ったっけな、オレ」
カイドーが本気で考え込む。
「えっと、私たちの考えが甘いって」
「あぁそいつか」
カイドーは腕を組む。
「あの緊急メールな。オマエだったら、どう使う？」
「どう使うって……困った時に、助けてくださいーって言うとか？」
「オレだったらな。嘘のSOSで待ち伏せて殺ることを考える」
「待ち伏せ……？」
「テメーも悪魔使いだったらCOMP狩られそうになったことくらいあるだろ？」
「うん……」
「そういうこった」
「カイドーも、待ち伏せとかするの？」
「しねーよ。そんな雑魚っぽいこと。けど、待ち伏せされるくれー考えるさ」
「そっか……」
「そんなことしなくてもオレはつえーからな。つえーやつが奪うのが、この世のあり

方ってやつだ」
「そう、かもしれないね……。でも、そうしたら弱い人はどうすればいいのかな」
「あ？　しらねーよ、そんなこと」
カイドーは言い放つ。そして、ユズの顔をみて言い添える。
「弱ぇやつから死ぬんだ。死にたくなきゃ強くなりゃいい。俺は昔からそうやって生きてきた」
「そういうのって疲れねぇ？」
アツロウが小声で口を挟む。
「死ぬよりマシだ。こいつが俺の生き方だ」
「カイドーは、そうなのかもしれないね」
ヘッドフォンの少年が、静かに言う。
「でも、オレたちは、平和なところで平和に生きてきた。暴力はいけないとか、互いに信じあおうとか、そんなカンジで」
「それがどうした？」
「君の言うとおりだ。生き方は大切だ。だからオレは、ちょっと停電で悪魔が出たくらいで変えるつもりはない」

カイドーは、一瞬、奇妙な顔をして、そして腹をかかえて爆笑した。
「笑いすぎ……」
アツロウがぼそりとつぶやく。
「なるほどな。回りに流されて生き方変えるほどハンパじゃねぇってか」
ようやくカイドーが笑みをひっこめてまじめな顔をする。
「だが言っとくが、そいつは棘（いばら）の道だぞ。汚くてずるくて悪くて強いやつらがいくらでもいる中で、テメェは、筋を通せるのか？」
「まぁやってみるよ」
ヘッドフォンの少年は軽い口調でそう言った。
カイドーが眉をひそめて口を開いた時、カイドーのＣＯＭＰからメールの受信音が響いた。
「……もう、行きな」
「はい……」
「納得できねぇって顔してるな。いいんだぜ、オレが納得できねぇなら、オレのことをぶっ倒せばいい」
カイドーは、その時が待ち遠しいというように笑った。

「あ、あの」
「んだ？」
「ありがとう」
ユズがぺこりと頭を下げると、カイドーは虚をつかれた顔をした。
ユズ達が消えてから、カイドーはＣＯＭＰを開ける。
緊急メールだった。差出人を見てカイドーの顔が、一瞬ゆるんだが、文面を見て、また険しくなる。
『マリ　アズカッタ　ヒトリデコイ　アオヤマレイエン』
「クソッタレ」
カイドーはＣＯＭＰを叩きつけるように閉じる。そして、思い直して開き直す。

4

「来てやったぞ」
カイドーは、夜の霊園の奥に叫ぶ。

「ほんとに来やがったぜ」
　闇の奥から下品な笑い声がたくさん。聞き覚えはない。が、驚くほどのことではない。カイドーのチーム、ダイモンズに敵は多い。
「おっと、それ以上、近づくな」
「女はどこだ？」
「別のところだ。ＣＯＭＰを地面に置け」
「先に女を放せ」
「それで取引のつもりか？　やめとけやめとけ」
　年のいった声。弱者をいたぶり、食い物にするのに慣れきった声。
「今すぐ、ＣＯＭＰを放せ。そうしねーと、女の耳が落ちる」
「けっ」
　カイドーは、足もとにＣＯＭＰを置いた。
「アギ」
　暗闇が一瞬だけ光る。赤い光球が、カイドーのＣＯＭＰに命中し、ジュウジュウと音を立てる。嫌な臭いが漂った。
「ダイモンズのカイドーだな。ずいぶん好き放題やってくれたな」

「だったらどうだってんだ？」
「安心しな。殺したりはしねぇよ」
　肉食獣の笑い。
「両腕叩き斬って、二度とＣＯＭＰは扱えねえようにする」
　闇の中に気配が生まれる。悪魔が召還される時の、焼け焦げた臭い。
「やってみやがれ」
　カイドーは拳を構えた。
　次の瞬間、闇の中から轟音が鳴り響き、カイドーを吹っ飛ばした。
　カイドーは立ち上がる。足もとがおぼつかない。今ので片耳の鼓膜がいかれたようだ。墓石にぶつけた右肩も痛む。
「んだぁ、やるのか、テメェ？」
　土を蹴る音に、カイドーが振り向く。悪魔の足音に向けて、闇の中に思い切り拳を繰り出す。
「ぐぁっ！」
　石を打った感触。指が軒並みいかれる。臼（うす）をすりあわせるような低い唸りは、悪魔

の笑い声だろう。
——ウベルリか。
全身が石でできた、低級な悪魔。カイドーにとっては雑魚同然の敵。
ＣＯＭＰさえあれば、だ。
「ゴガァァ」
唸りと共に繰り出されたウベルリの腕が、カイドーの顔面を襲う。
身をねじってかわすが、遅れる。拳の先が、額をざっくりと、えぐった。
——こりゃ死ねるな。
石柱でぶんなぐられれば、人間は死ぬ。額の血と、間近に迫った死の感触が、カイドーの体と心を冷やす。
この相手は、強い。暴力の意味を熟知している。
瞬時に殺さないのは、カイドーの心を折るためだろう。
カイドーを従えて、ダイモンズ全体を配下に加えるのが望みというわけだ。無論、カイドーが折れないなら、単に殺すだけで満足するだろう。
そして敵の戦力。
ウベルリは悪魔としては、さほど強くない。切り札を隠してることも考えられるが、

それを考慮に入れても、悪魔使いとしては、それほどの戦力はないのだろう。だからこそ、こういう手を使う。
「ダイモンズのカイドーってのは、その程度か？」
安い挑発。
「んだらぁっ！」
気勢を上げて、殴りかかる。石の腕をかわして、膝（ひざ）を思い切り蹴りおろす。
石の悪魔でも関節は、あるようだ。膝を落とすウベルリ。さがった頭の目をえぐる。地に砂利（じゃり）が散らばった。
「ギュガァ」
石の悲鳴にかぶさるように……。
「ディア」
青い光がウベルリを包む。ウベルリが再び立ち上がる。
——ま、そうだろうな。
回復役を用意するのは定石中の定石。
この状況、悪魔の力のない自分に勝ち目はない。



「うおらぁぁぁ」
獣のように叫び、戦うカイドー。
冷徹に自分の余命を数えるカイドー。
——弱ぇやつから死ぬんだ。
カイドーは、そのことを疑っていない。

ヤクザは時計を見た。五分経過。
——そろそろ終わらせないとな。
携帯電話を最初に導入するのは、どこの国でもヤクザと決まっている。犯罪行為には、綿密な時間管理と緊密な連絡が不可欠だからだ。
カイドーの弱点がマリなのは前からわかっていたが、携帯メールの機能のおかげで、ようやく誘拐を実行に移せるようになった。
驚いたことにカイドーは、まだ立っていた。根性のあるガキなのは認めるが、跳ねっ返りすぎだ。死にたいなら死なせてやろう。
そう思った時、音がした。緊急メールの着信音。
手元のCOMPからではない。カイドーのほうからだ。

「ウベルリ、殺れ！」
迷わず叫んだが、カイドーはウベルリの剛腕を避け、するりとCOMPを取り出す。
「来い、パズス！」
砂漠の熱気を伴って、巨大な悪魔が降臨する。
顔のないウベルリが目に見えてひるんだ。圧倒的な格の違い。
顔は泥だらけ、腫れあがった唇から血を垂らしたまま、カイドーは笑った。
「ツメが甘かったんだよ、テメェらは」
ヤクザたちは慎重すぎた。すべてを悪魔にやらせて自分が近づかなかったために身体検査すらしなかった。焼け焦げたCOMPは悪魔召還プログラムの入っていない偽物だった。
パズスが動いた。主と違い、優雅とも言える動作で足を



踏み出す。

　邪神が近づくと、ウベルリは震えた。逃げたい。だが、逃げる指令は出ていない。

　パズスの太い腕が、愛でるようにウベルリに触れる。かすかに赤く光ったかと思うと、ウベルリが、さらさらと砂になって崩れる。

「あとは……」

　パズスの眼光が闇を射抜くと、火柱が、三つ立った。回復役、控え役の悪魔が一瞬でつぶされた。

「うっし、こんなもんか」

　カイドーが凶暴な笑いを浮かべ、指をぺきぺきと鳴らす。

「安心しろ。腕の一本は残してやるから」

5

　罠が待つ霊園に行く前に、カイドーはユズに一本のメールを打った。

『マリソッチイルカ』

　それだけのメールだった。

のこのこ出掛けて言うとおりにしてもマリ姉が無事に帰る保証はない。

かといってカイドーや配下のダイモンズは警戒されてるだろう。下手に動いたらマリ姉が危ない。

　あの三人に一報いれておけば、自分が消えても、いずれ助けにいくだろう、と、踏んだのだが……ここまで素早く動くとは思わなかった。

「デカい借りだな」

　カイドーは舌打ちする。

　確かに、あのヘッドフォンの野郎の言うことにも一理あるかもしれない。甘ちゃんの逃げ台詞じゃなくて、本気で平和と信頼を願う道もあるのかもしれない。

　今なら宗旨替えもできる。

「んー」

　カイドーは、少しだけ考える。

「っと、逃げてんじゃねぇよ」

　這いつくばって逃げようとしていたヤクザの脇腹に蹴りを入れる。

　悲鳴を上げながらヤクザは哀願した。カイドーの下につく。ヤクザは止める。カタギになる。心を入れ替える。

恐怖に襲われるままに、口から出任せを垂れ流すヤクザ。
「ま、無理だな」
カイドーは結論する。こいつも。自分も。
「ま、テメェらは勝手にしろや。俺は俺でやる」
カイドーは肩をすくめて、甘い平和の幻想を振り払った。
「ゆ、許してくれるんで……？」
「ん？　あぁテメェらのことじゃねぇよ。テメェらはとっとと死ね」
カイドーは、足下のヤクザたちを念入りに蹴る作業に戻った。
ひとしきり蹴ってから月を仰いで、楽しげに笑った。

「ナオヤと弟」

1

目を覚ましたら、狭い部屋にいたとしよう。
自分の目の前には見知らぬ男がいる。
善人か。悪人か。はっきりしたことはわからない。
男とあなたの間に、一本のナイフがおいてあったとする。さて、どうするか？
あなたはナイフに手を伸ばすだろうか。相手もナイフに手を伸ばすかもしれない。同時に伸ばした手が重なって、奪い合い、殺しあいになるかもしれない。
話し合えばわかりあえたかもしれない。意気投合できたかもしれない。けれど、そこに置いてあった一本のナイフが、その可能性を奪い去る。

どうしてそうなったのだろう。人間が残酷だからか。他人を殺して自分が生き残るのが人間の本性だからか。

あるいはそうかもしれない。だが、オレはそう思わない。

——悪いのは、そこにナイフを置いたやつだ。

「うーん、そうかもしれないけど、何の話？」

ユズは首を傾げる。ヘッドフォンの幼なじみは、たまに、饒舌になる。

「オレはわかるぜ。狭い部屋ってのが山手線圏内で、ナイフがCOMPってことだろ？」

アツロウがうなずく。

「うん」

「でも、COMPって……悪魔で戦うばかりじゃないよね。電気もお風呂も起こせたよ？」

「そうだね。でもオレたちは、そう思わないように誘導された。COMPを最初に手

に入れた時のことを覚えてるかい？」

「いきなり悪魔が襲いかかってきたな。戦闘チュートリアルと一緒に」

「そういえば……」

ユズは自分のCOMPに目を落とす。戦いが嫌いなユズは、何度COMPを捨てようと思ったことか。ユズにとって、COMPは、つい最近まで、ただの兇器だった。

「今いる悪魔使いは、ほとんど、みんなそう思ってるだろうしな……」

アツロウがため息をつく。

「これがCOMPが気に入らないことの、その一だ」

「他にも？」

「あぁ。運命予測機能だ」

「な、なんで？　あれのおかげで、私たち何度も助かったよ？」

「アツロウ、プログラマーとして運命を予測することって可能と思うかい？」

「い、いや、オレには無理だけど、現に予測できてたわけだから……」

「じゃぁ、どういう条件なら予測しやすいかな？」

「うーん、極端に選択肢が少ない場合だな」

「なにそれ？」

「たとえばさ、ソデコが一時間後に何してるか予測しようとしたら大変だよな。ソデコはなんするかわからないから」
「なーんか、バカにされてる気がする……」
「ワリっ。そうじゃなくてな。えーとだ。ソデコが風邪（かぜ）引いて学校休んでたとする」
「うん」
「そしたら、一時間後、何してるかは予測しやすい」
「家で寝てるーっていっておけば、だいたい当たるもんね」
「そういうこと。縛られて、ぐるぐる巻きにされてたら、もっと予測しやすいよな」
「アタシを例にしないでほしいけど、そうね。えーと、運命予測プログラムが、私たちの選択肢を減らしてるってこと？」
「明日、渋谷駅に行かないと死ぬ、と、いわれたら……」
「行くけど……あ、もしかして……」
「そう。運命予測プログラム自体が、ぼくたちの選択肢を制限している」
「うーーん、証拠とか、あるの？」
「相手の言うとおりに動かないで、予想外のことをしてみればいい。運命予測プログラムが本物なら関係なく当たるけど、そうでなければ外れやすくなる」

「……結果はもうでたってわけか」
「あぁ。余命表示もラプラスメールも停止した」
　幼なじみは射抜くような視線を投げる。
「オレたちは、誘導されていたんだ」
「……あのさ」
　おそるおそるといった様子でアツロウが声を出す。
「誘導されてたとして、それが善意って可能性もあるんだよな？　強い悪魔はどんどんでてくるし、レベルアップしないと戦えないわけだし」
「その可能性は否定しない」
「え、もし、そうだとすると……私たち、ヤバいんじゃない？」
「とはいえ、相手が完全に善意である可能性は否定できる。本当にそうなら、きちんと説明して、皆で協力して悪魔と戦う術を与えればいい」
　オレはね、と、幼なじみは静かに言葉を続ける。
「誰かに操られるのが大っきらいなんだ」
　少年の視線は、遠くの誰かを見ていた。

2

「うーん、面白いね」
表参道の小さなバー、エイジ。冷房の効いた店内の片隅では、遊び人風の男がグラスを傾けている。スローなジャズが流れている店内だが、耳を澄ませば、かすかに暑苦しい男の叫び声が聞こえる。
わずかな期間で、悪魔式発電機は、各所に普及していた。
「こう来るとは思わなかったね」
指先で、キーホルダーを回す。露天で売っていそうな、安い木のキーホルダーだ。隣に座るのは、シャツの上に羽織。下は下駄という、なんとも奇妙な装いの男だ。けれど、この男が着ると、調和してみえる。
「ねぇ、ナオヤ君？　君のご自慢のラプラスプログラムもかたなしだね」
遊び人風の男が、声をかける。
「運命（ラプラス）は破られるためにある。問題ない」
「君がいいならいいんだけどね。それにしても面白い」
男はからかうように微笑む。

「閉ざされた空間！　文明と切り離され！　命の危機！　不信と不安。その中で、とっておきの力を与えられた」
芝居がかった様子で男は両手をひらひらさせる。
「乱世を戦い抜く力。この世の王になる力。気に食わない何もかもを打ち倒す力だ」
「それが、どうだい。彼ときたら。選ばれしものの力でやったことといえば……あ、お兄さん、カールスバーグお代わり」
マスターは軽くうなずいてビールを注ぐ。二人の奇妙な服装と、会話を不審に思う様子もない。あるいは見えていないのかもしれない。
「お風呂屋さんだよ、お風呂屋さん。いや、ボクもサウナは嫌いじゃないけどね。ボクとしちゃ、こんなに愉快なことはないんだけど、兄としては、そのへん、どうなの？　ふがいないとか思ったりしない？」
「ふがいない？　おまえは俺の弟を知らないな」
「そりゃ身内に比べれば、ね」
「あれは気づいている。だからこそ、運命の全てに戦いを挑んでいるのだ」
「……へー。さすが身内だね。なるほどなぁ。確かに、運命（ラプラス）は狂ったし、おかげで上のほうも下のほうも、今のところ静観してる。狙ってやったっていうなら、誉めるし

かないね」
「おそらくは気づいたのだ。この封鎖の目的にね」
「……なるほどね。閉鎖環境。足りない物資。高まる緊張。そこに来て武器の投与。殺しあえっていわんばかりだ。CIAが途上国でやる手口だね。この国風にいうと蠱毒の壷ってやつかい？」
しかしねぇ、と、いって、男はグラスに口をつける。
「外からなら簡単に気づけるけど、中で気づくのは大変だよ？　気づいただけじゃなくて対抗するなんてね」
「俺の弟だからな」
声は誇らしげに聞こえた。
「ふーん。でも、ナオヤの計画とは違うけど、それはいいのかい？」
「……所詮は、回り道にすぎない。どれほどに平和と愛を説いても、暴力に抗することはできない」
「そうかなぁ。口先三寸あれば、わりとなんかなったりするけどね」
「力なき理想は押しつぶされるのみだ。それを悟った時こそ、俺はあれに力を貸す」
「力を借りる、の、間違いじゃないかな。おっと、こんなところで荒事は勘弁だよ。

ぼくは、ひ弱なんだからね」
「そう思うなら口を慎むんだな。誘惑者」
「うんまぁそうだね。ボクとしても、手を出すつもりはないさ。君の弟さんの活躍を見ているよ」
「傍観者気取りか。無為徒食め」
「ボクらが、目的もって動き出すほうがまずいと思うけどな。それに、この国じゃそういうの流行ってるんでしょ？　いい大人が働かないで何もしないってやつ」
「……ニートは流行りじゃないぞ」
「そりゃ失礼」
おどけた仕草で男は肩をすくめ、ナオヤは黙り込む。
今頃、ここにあるのは修羅の巷のはずだった。
神々と悪魔を巻き込む戦が起きるはずだった。その代わりに、自分は冷房の効いた室内で酒を楽しんでいる。第一ラウンドは、してやられたというわけだ。
弟は、既に気づいているだろう。仕掛けを打ったのが誰か。すぐに第二ラウンドが始まる。

待っていろ。

想いを込めてナオヤは窓の外を見る。

二人が出会うまでには、今しばらくの時間が必要だった。

みのり文庫をお買い上げいただきありがとうございました。
この本を読んでのご意見ご感想をお待ちしております。

〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町 1-8-3　長谷川ビル１Ｆ
みのり文庫編集部「女神異聞録デビルサバイバー」係

女神異聞録デビルサバイバー
アンソロジーノベル　Vol.1

2009年7月15日　初版発行

著　者――海法紀光・高平鳴海・村田治
発行人――河出岩夫
編　集――小寺盛巳
発行所――有限会社ハーヴェスト出版
〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町 1-8-3
長谷川ビル１Ｆ
TEL. 03-3865-7778
FAX. 03-3865-7779
発　売――株式会社星雲社
〒112-0012　東京都文京区大塚 3-21-10
TEL. 03-3947-1021
FAX. 03-3947-1617
印　刷――中央精版印刷株式会社

ISBN978-4-434-13307-7